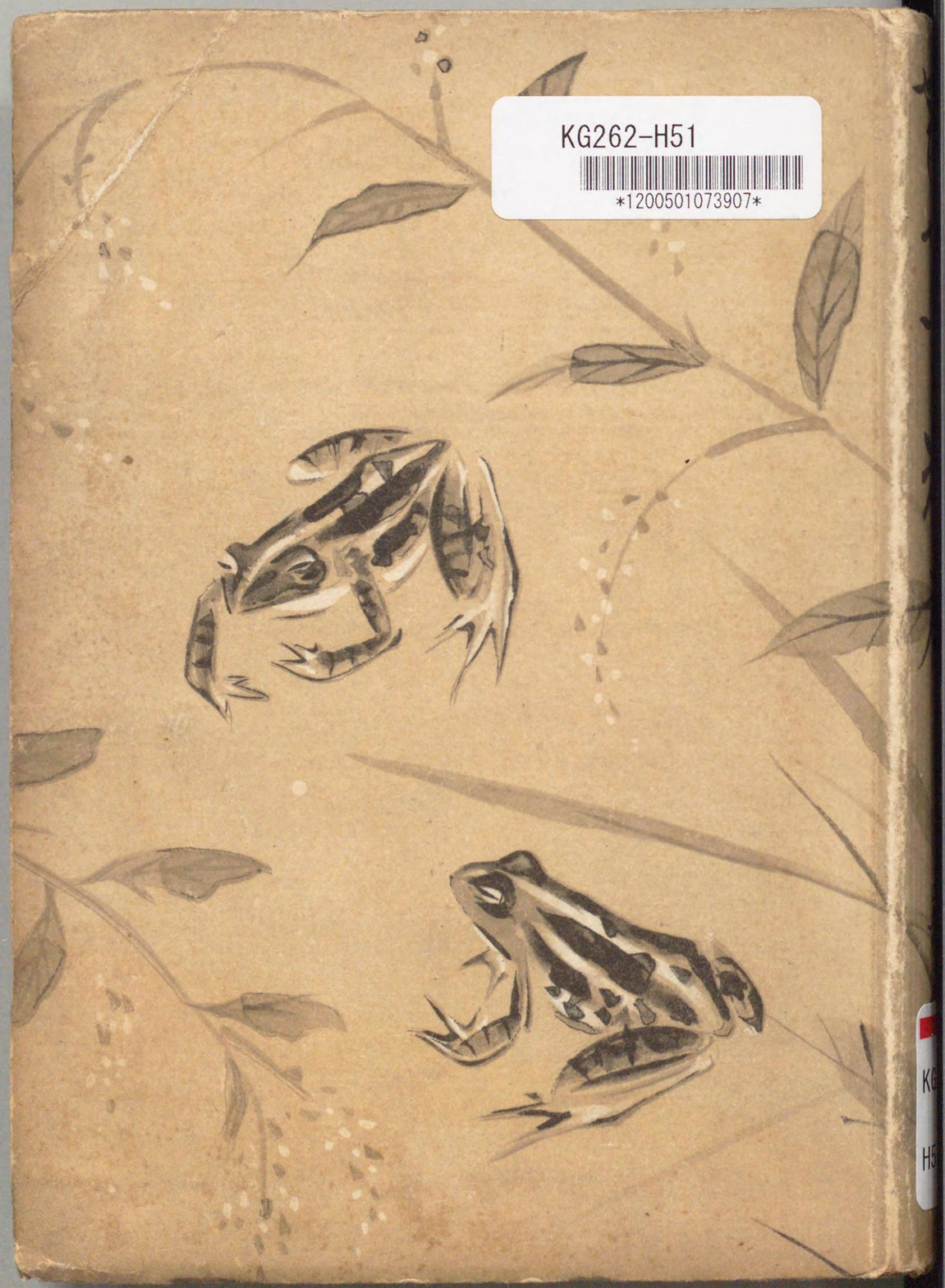
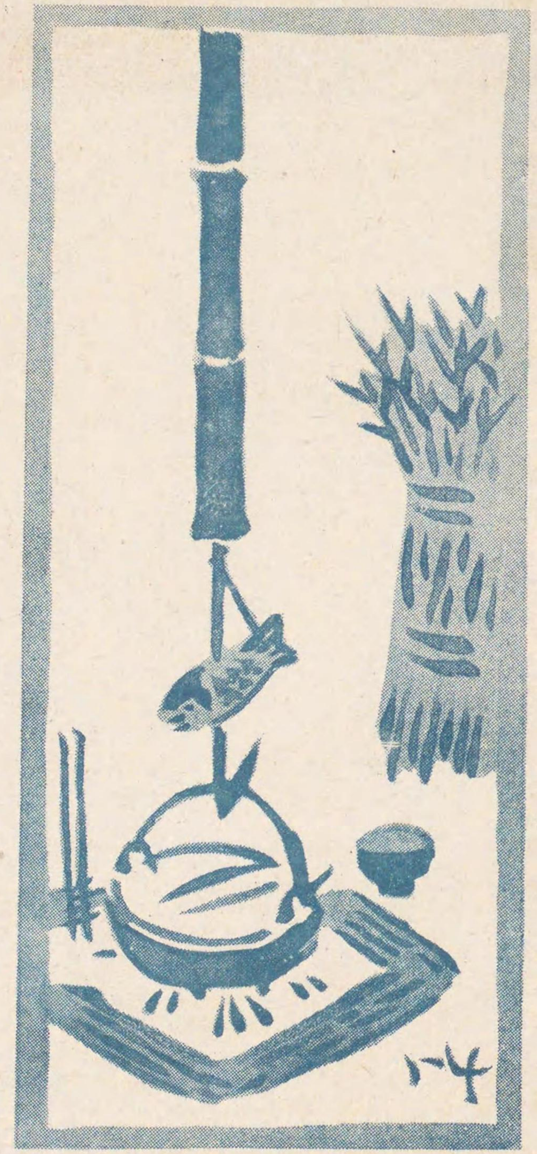
KG262-H51
1200501073907



芭蕉の精神

萩原蘋洲子著



弘學社版

序

偉人は時代の各方面を指導する能力を持つてゐる。芭蕉はその靜的指導者の一人であつた。俳諧は治まれる世の聲と貞德は云つてゐるが、併し俳人は孰れの時代にあつても、その時代に順應すべき用意と態勢を持たなければいけない。

芭蕉は戰場の勇士ではない。武士に生れて居りながら、武に疎く、兵に通ぜず、生物を殺したり、籠に入れて樂しむ事でさへ嫌つて居つた。さうした芭蕉が目に見えぬ鬼神を感動させ、猛き武夫の心をも慰める絶妙な詩技の所有者であるので、あるから、人は適材を適所に置けばどの位國家奉仕になるか知れないと思ふ。

芭蕉の如何なる感情が、如何なる思想が、現代の非常時に適切であるかといふ

KG262-H51

I種
W

1200501073907

事に就いて、私は改めて芭蕉の生活や行爲を見直した。そしてそこに芭蕉の尊皇心、神佛に敬虔な純眞性、寛厚・慈愛の指導精神が強く頭に響いたのであつた。かうした感情の理念は、畢竟寂びといふ深刻な内省的な觀念から出發したもので、それが彼の全人格・全生活・全藝術を覆うて行動させた所に權威があつた。平和を愛し、自然の懷に靜觀する芭蕉は、めまぐるしい社會活動の國家人ではなかつたけれど、國家はさうした人に甘美なる生命の糧を欲してゐた。正しい人の道の指導を待つてゐた。芭蕉は曠野に咲く一輪の美花である。心の飢に渴えてゐる人人にはどの位その花がなつかしく眺められたであらうか。芭蕉の聲は溪流の淺きせゝらぎである。ジャングルをかき分けて進む勇士達は、いかばかりその靈妙な水音に元氣を百倍させる事であらうか。芭蕉は沙漠のオアーシスである。活動的でなくて、眞の活動を鼓舞してくれる尊き存在は、山林の芭蕉その人であつた。

文は人也と云はれてゐるが、私は詩は人格也と云ひ代へたい。詩人には詩人の

人格がある。詩人の人格は溫情・高雅が中心生命である。人格が卑しければ詩は氣品を失ふ。人格が勝れてゐて、詩の拙い人もあると云ふ者があつたならば、それは詩技の研究が足りないからと云ひたい。技術の問題は詩人的性能を十分に持つてゐれば解決がつく。詩人の教化性は社會全般に適應されるもので、たゞひとり俳句ばかりの上ではない。此點に於て芭蕉は社會的偉人であつた。否國家的偉人であつた。本書刊行の目的は國家的偉人たる芭蕉の精神を世に知らしめんためである。

昭和十七年八月

萩原蘿月

凡例

一、本書は芭蕉の人格・生活に重點を置いて、彼が詩技の卓絶性を見ようとしたのである。從て內容も是等項目を先にし、作品所論の研究を後にした。

一、本書はなるべく通俗・平易を旨としたけれど、引用の文に就ては出典を示し、研究の便を計つた。

卷末に附錄として芭蕉研究書目解題を添へて置いた。主なる參考書は大概網羅したつもりである。

蘿月

芭蕉の精神

目次

一、生活と行狀　一
　一、衣・食・住
　二、佛頂參禪　二四
　三、具おほひと壽貞尼問題　二九
二、人格　四〇
　一、寬厚・慈愛

二、訓戒　六五
三、尊皇・敬神敬佛　七三
四、餘德　九九
三、作品と所論
一、各時代の句風　一〇八
二、文章　一三七
三、俳論　一四五
四、旅上詩人
一、東海・近畿・濃尾地方の行脚　一八四
二、鹿島の月見　一九九
三、大和の行脚・姨捨の月見　二〇一
四、奥羽行脚　二一一
五、細道以後の行脚　二五一
六、行脚の掟　二八六
附錄
芭蕉の研究參考書目解題　二九八

芭蕉の精神

田中咄哉州裝幀

一、生活と行狀

一、衣・食・住

衣服、芭蕉は茶色を好んだ。常に茶の紬の八徳を着てゐたといふ。死んだ時も常の好みの茶の浮衣を着せたと傳へられる。旅行に出る時茶の羽折といふものを携へた。之は茶色の羽織であつたけれど、途中雨風に汚れて、茶だか何だか分らないものになつて了つた（素堂の芭蕉庵六物ノ記）。越後高田今町の聽信寺といふ寺に、芭蕉奥羽行脚の時の道服が藏されてゐたが（成美の隨齋諧話）、地は紬のやうで、鼠色であつたと云はれるが、之は恐らく素堂のいふ茶の羽折

の汚れたものであらう。又芭蕉は伊賀の梢風尼から俳諧袖といふものを作つて貰つた。物を書くのに便利よく出來たもので、右の袖を左より一寸程短くしたものであつた。此の衣服を芭蕉は一幅半と云つて、元祿三年春伊勢の路草亭へ着て行つた事があつた(路草の一幅半)。杉風から夏衣を貰つたり、嵐雪の妻から小袖を貰つた事もあつたが、之も恐らく茶色のものであつたらう。茶は澁味のある物靜かな感じの色だから、芭蕉の氣に入るのも尤である。

食物、簡單な質素な物を好んだ。魚類より精進物であつた。俗に惡物食ひといふやうな食事でなく、奢つた物は一切避けて居つた。之は芭蕉が禪を學んだ關係もあつたらうが、一體に風雅の寂といふ教を堅く守つて、口腹の贅を目的としなかつたからである。元祿五年十二月、江戸から伊賀の意專に宛てた手紙に、

卓袋(伊賀上野の人、貝增屋市兵衞、芭蕉門人)が赤味噌のとろゝ汁もなつかしく罷成候

京屋(伊賀上野の人、一鷺、芭蕉門人)如き味噌食はるゝ時節に罷成候。云々

とあるし、某氏への狀に、

尾の露川方より宮重貰ひ申候。今夕御出候て、御料理なされべく候。云々

喜八への狀に、

一、もち米一升。一、黑豆一升。一、あられ。見合

右今夕會の夜食に成申候間、御いらせ傳吉に持たせ御越し可被下候。云々

かふじや茂作への狀に、

只今田舍より僧達二三人參候。俄に出可申貯無之候。さぶく候故にうめんいたし可申候。さうめんは澤山有之候。酒二升御越し賴入申候。さかなはつぶ納豆茶碗に入れ、云々

曲水亭にての探題、

乳麵の下たきたてる寒さかな

杉風への狀に、

新麥一升、筍三本、油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり。蕎麥粉一重、小遣錢二百文忝なく存候。

石川山店から芹の飯を貰つた喜び、

わがためか鶴はみ殘す芹の食(めし)

忘草菜飯につまんの暮

富家は肌肉を食ひ、丈夫は菜根を喫す。予は乏しと前書して、

雪の朝ひとり干鮭を嚙み得たり

干鮭とは鮭の乾物で、その時代貧賤の者の食物となつてゐた。

雜炊に琵琶きく軒のあられかな

雜炊とは野菜を入れた粥である。其角が芭蕉堅田閑居を聞いて、「雜炊の名所ならば冬ごもり」といふ句を作つてゐるが、堅田は雜魚雜炊の名産地であるから、師と共に雜魚雜炊を食つて冬ごもりしたいといふのである。蒟蒻と柿とは芭蕉の好物であつた。許六の言に、「翁は昆若をすかれたり。云々」(麻生の後序)とある。粟津の無名庵に居た時、李由は柿、去來は蒟蒻を見舞に持つて來た事があつた。

蒟蒻の刺身も少し梅の花

李由、去來の二人に

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

瓜も好きだと見え、子供を相手に瓜を食つた句もある、

子供等よ晝顔咲きぬ瓜食はん

酒田の玉志亭で、納涼の餘興にも眞桑瓜を出され、

初眞桑たてにや割らん輪にや切らん

などと云つた事もあつた。園女亭で菌を食べ過ぎて發病し、それが死因であつたと云はれた位だから、菌も好きだつたと見える。

初松魚は食べない事もないが、奢つた食物であるから好もしくなかつたやうだ。太右衞門への狀に、

初かつを御振舞被下候由、かゝる隱居の似合しからず候へども、おもと殿御志追付參上。

河豚は昔から俳人の賞美した魚であつたが、芭蕉は食はなかつた。それは毒のある魚と知つて、徒に命を落す愚を恐れたからであらう。岸田重右衞門宛の狀に、

今日在所中寄合ひ候て、ふぐ汁被成候。夫に付參り候仰被下候。忝けなくは存候得共、愚老は其相伴には成りがたく、併し何心なくよびに被下候故、ふぐ汁何もしたたかに食ひ候

を見物に可參候。我等は雜煮が可然候間、其御心得可給候。云々

ふぐ汁やあほうになりとならばなれ

太郎兵衛への狀にもそれに似た事を云つてゐる。尤も其角の「詩人ゆるせ松江の河豚といはんに」といふ句を評して、「古風は鱸魚を愛し、河豚を知らず。云々」と云つてゐるが、之は句の新古の上の論であつて、實際の問題ではあるまい。

酒は前にあげた杉風への狀の、油のやうな酒五升だとか、茂作へ二升屆けてくれと云つたやうな記事を見れば、平生用ひた事は分るが、其角の大酒を戒めた位だから、大酒はしなかつただらう。

元起和尙から酒を貰つた返事に、

水寒く寢入りかねたるかもめかな

大晦日に酒を飲み、夜更して、元日寢忘れたとあつて、

二日にもぬかりはせじな花の春

尾張の人から淡酒一樽、木曾の獨活茶を貰つて、

飲みあけて花活にせん二升樽

九月九日、乙州一樽を携へて、

草の戸や日暮れてくれし菊の酒

などの記事もあつて、相當飲んだものらしい。併し體の惡い時は飲んでも寢られなかつたと見え、

酒飲めばいとゞ寢られねね夜の雪

などの句もあつた。

茶は殊の外好きのやうであつた。許六宛の手紙に、

煎茶可被下由遲くともくるしからず候。能き便宜に少々可懸御意候。頃日あへ茶にも給べ飽き申候。

正秀宛の手紙にも、

清茶一袋、さかな一種被遣、さて〳〵忝けなく御厚志難盡候。茶は拙者賞翫いたし候。

とある。其他三井寺から澤山貰つた手紙や野水への禮狀などを見ても、喫茶癖は相當のもので

あつた。

餅も菓子も好きらしかつた。元祿四年四月嵯峨の落柿舍に入る時、「唐の蒔繪畫きたる五重の器に、さまざまの菓子を盛り、名酒一壺、盃そへたり。云々」とあるから、甘味も辛味も兩方いけたものである。

要するに芭蕉は始めから奢つたものを食つて、生を貪らうといふやうな人ではなかつた。貧しい一介の俳諧師に、食膳の佳餚が何の必要があらうか。米は玄米でも粟でもよろしい。酒は濁酒で結構である。肴は有合せの粗末なもので十分である。自分は口腹の贅のために生きてゐるのではない。ただ風雅の寂に生きるものである。之が芭蕉の信念であり、芭蕉藝術の本領であつた。元祿七年八月、伊賀の無名庵に於て月見の會があつた。それは丁度無名庵が新築されて、その祝を兼ねての會であつた。その時の献立表を示すと、

生麩　ゆ
煎物　蒟蒻　つかみ豆腐
　　蒟蒻　吸物　しめじ

木茸　茗荷
里いも
もみうり
中猪口　くるみ
しぼり汁
すしやうゆ
すり山の芋

人參
肴　やき松茸
くわし
吸物　松だけ
冷飯　とり肴
さけ　柿
芋煮入

全部精進料理ではあるが、二汁、五菜に點心が附いてゐる。芭蕉の一生涯かくの如き善美を盡した饗應は恐らく之が始めで終りであらう。

支考の「俳諧十論」に「奈良茶三石食うて後、はじめて俳諧の意味を知るべしとは、或時に故翁（芭蕉）の戯ながら、云々」とある。之は奈良茶を三石も食べなければ、俳諧の意味が分らないといふ事で、それ程迄に俳席の饗應は質素であり、又その質素な味を十分に體驗しなければ俳諧は上達しなかつたのである。奈良茶とは豆や栗を入れた茶粥の事で、俳席の夜更に主人の氣轉で客に出す料理であつた。なほ同書に、

其席は一汁、二菜に過ぎず。……酒は二献に過ぐべからず。……遅き時は待つ心に屈し、待ち得て飽く時は昏睡に怠る。……かく饗應の輕からんも、ひとへに儉約の心にあらず。例の睡らず、例の寂しからん、其故あるを知るべきなり。云々

と云つてゐる。かくの如く蕉門では俳席の夜食は簡單が式であつて、支考の云ふやうに、食事を遅く出すと、早く食ひたいといふ氣になつて、句作に精進する心が碎けて了ふ。又多く食べると、眠くなるから怠る事となる。その手加減が主人の心構で、決して儉約といふ意味で饗應

を輕くする譯ではなかつたのである。例の寂しからん即ち風雅の寂といふ教を會得させるための質素である。此の教は後世の俳人に多大の影響を與へ、也有などは例の滑稽ではあるが、俳席之掟といふ式を立てて、

一、飯は三石の掟を守るべし。

一、汁一つ、菜一つ、酒の肴も一つに限りて、鰹に精進の咎をのがるべし。夏は必ず茄子を用ひ、豆腐は三期に渡るべし。香の物は論ずるに足らず。

一、酒は膳の前後をすべて三盃を過ぐべからず。さるから盃を得道具を許すべし。

一、菓子は其日のあるに任ず。先は煮豆に定むべし。

と規定してゐる。要するに此の教は風雅の寂即ち閑寂精神の修練を目的として規定されたもので、無理に貧しい寂しい物を食べればよいのではない。形式に捉はれて閑寂にやらうとすると金持の凝つたお道樂になるから注意すべきである。閑寂を上品な物靜かな趣味として、うまい精進料理を食はうとする人が、世間往々にあるけれど、芭蕉の寂はそんな不眞面目なものではない。芭蕉の道を踏み違へないやうにするのが肝要である。

住所、芭蕉は草庵を四度結んで四度破つたと云はれるけれど(其角の終焉記)、實は五度結んで五度破つてゐる。尤も之は江戸の芭蕉庵に就いてであるが、なほ芭蕉の草庵としては、粟津の無名庵、石山の奥の幻住庵、伊賀の五庵があつた。芭蕉は漂泊の旅人であつたから、隨所に門人の家でも家でなくとも泊り歩いた庵はあつたけれど(例へば去來の別莊なる嵯峨の落柿舍或は攝津の王生山淨春寺境内の金龍庵など)、先づ大體以上の四五ヶ所が芭蕉の定庵であつた。

昔の芭蕉庵は深川萬年橋の北詰松平遠州侯の邸内にあつた。萬年橋とは小名木川が大川に落合ふ口に寄つた小橋で、今の西元町と大工町に通ずる橋である。當時その附近は武家や寺院の賜地になつて、而かも堀割多く、小名木川の入口には行德行の船番所があり、川向ふには船大工が多く住んで居つた。「續江戸砂子」に、江戸内外分傍示の場所と題し、元祿十一年標木を立てた雛形が載つて、「此枕より内小荷駄馬口附之者不可乘者也」とあつて、その場所を列記せる中に、深川では高橋、扇橋、萬年橋をあげてゐるから、萬年橋の南は江戸市外であつた事が分る。つまり芭蕉庵附近は場末の新開地で、江戸市内と云つても田舍寄りの所で、杉風が芭蕉庵眺望と題し、「葛飾の郡はなれし花の雲」、芭蕉が「草の戸や芭蕉を富士にあづけ置く」、「花の雲鐘は上野か淺草か」と詠んだやうに、田圃つゞきの廣々した土地であつたらしい。ただ水郷であるため、土地低く、濕つてゐて、不健康地を免かれない所と思はれる。

芭蕉庵はもと杉山杉風の別莊で、坐興庵と云つた。江戸下り後九年間の放浪生活のあげくが芭蕉庵入りとなつたのである。門人の李下が一株の芭蕉を贈つた所、それが地味に叶ひ、繁茂したので、世間から芭蕉庵と呼ばれるやうになり、遂に芭蕉の草庵の名となつて了つた。杉風は杉山伊兵衛、日本橋小田原町に住し、代々幕府の御用川魚商を勤め、鯉屋と云はれた。庭中に鯉の生洲があつて、それが古くなつて不用となり、古池同然となつたのが例の古池やの池であつた。杉風は平野町に採茶庵といふ草庵を持つて住んで居つた。芭蕉庵の側に採茶庵があつたといふから、當時は畠つゞきの一郭の内にあつたのであらう。

芭蕉庵入りは延寶八年冬と考へるが、その頃の芭蕉は隨分貧乏であつたやうで、寒夜ノ辭に「月に坐しては空しき樽をかこち、枕によりてはうすきふすまを愁ふ」とあつて、

艪の聲波を打つて腸氷る夜や涙

或は「こゝのとせの春秋市中に住み侘びて、居を深川のほとりに移す。長安は古來名利の地、

空手にして金なきものは行路難しと云ひけん人のかしこく覺え侍るは、この身の乏しき故にや」（續深川）と前書して、

柴の戸に茶を木の葉かくあらしかな

茅舍買氷

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

雪の朝ひとり干鮭をかみ得たり

などの句もあつた。其角の大酒を戒めた「朝顔にわれは食くふ男かな」の句も入庵二年の作であつた。とにかく住居を得て、しばらく靜養する事が出來たと云つても、生活はひどく苦しく、侘しい思はこれらの句を讀んでもよく分らう。

最初の芭蕉庵は二年後の天和二年十二月二十八日駒込の大圓寺から出た火で燒けて了つた。芭蕉は一時甲斐の山里に引移つたが、天和三年五月其角の招請によつて江戸へ歸り、しばし本船町の小澤卜尺の許に止まつた。九月友人素堂の骨折で新庵が成つたので入庵した。芭蕉庵の廣さは六疊一間に緣側、便所、臺所が附いてゐたのだらう。信州浪人の河合曾良が近所に住んでゐて、炊事の手傳をしてくれた。後に淨求といふ深川の道心坊が常に來て何くれと世話してゐた。へつつひが二つ、臺所の柱に瓢がかゝつてゐる。米二升四合位入る大さのものであつた。米が無くなると花活にも使つたらしい。此瓢は石川北鯤といふ弟子の寄附で、四山と號し素堂の銘があつた。米、味噌、醬油、酒その外生活の必需品は杉風其他から仕送つて貰つた。佛壇は壁を丸く堀り拔いて、內に砂利を敷き、出山の釋迦の像を入れた。二見といふ文臺があつた。表に扇の繪を書いたものである。檜笠もあつた。之は甲斐の山人から貰つたもので、芳野行脚に用ひたもの。別に澁笠もあつた。之は手製で、草庵の秋のつれ〴〵に、竹を削り、紙を張り、澁をしいて日に干し、苦心して作つたもので、裏に「世にふるはさらに宗祇のやどりかな」といふ句が書いてある。

在庵中の行事は雪月花の眺と句作であつた。或時は深川八貧と題し、門人達と題を探つて句作し、その題に當つたものが買物に行くといふやうな趣向もあつた（貞享三年）。芭蕉は米を買ひに行く番に當つて、

米買に雪の袋や投頭巾

とする。或は又閑居ノ箴と題し、庵の戸をあけて、ひとり雪をながめ、酒を飲み、酒を飲むと眼が冴えて、寝られないと述懐した。さうかと思ふと、初雪の降る日、庵に居た事を喜んで、

初雪や幸ひ庵にまかりあり

古池の佗しい蛙の音を聴き、

古池や蛙飛込む水の音

草庵病起、

観音のいらか見やりつ花の雲

蓑蟲が鳴くから聴きに來いと、嵐雪に手紙を遣ると、嵐雪は早速來たが、蓑蟲は鳴かず、蝗が稲を食べて飛廻つてゐたといふをかしみもあつた（同四年）。其角、仙化と舟に乘つて三ツ又に月見し仙化の僕半四郎の名句に驚き、歸庵なほ月の名殘を惜しみ、

名月や池をめぐりて夜もすがら

遂に閉關ノ説を作つて、門を鎖して人と逢はず、（同五年秋）

蓬や雲は鎖おろす門の垣

と云つたものの、一と月も經たない中に彦根の許六を迎へて閑談してゐる。實に悠々自適の生活振りである。衣、食、住すべて門人の世話になりながら、襦袢を洗つてくれ、糊を少し付けてくれ、人が來て無駄書したから紙を貰けろ、次手に酒を頼む、旅行したいから金を借せ、但し我等しきの事であるから、返せないかも知れないなどと、隨分我儘な勝手な事を云つてゐるが、それでも門人は親に仕へるやうに、一つとして芭蕉の意にそむいた事はない。芭蕉といふ人は德のあつた人である。

芭蕉は書道に趣味を持つてゐた。上京時代北向雲竹に書を學んだとあるが、兄の半左衞門は手蹟師範をしてゐたといふから、幼より兄に就て學んだものか。半左衞門の手蹟は見事なもので、芭蕉も拙くはなかつた。人に頼まれれば色紙も短冊も書いた。許六が國へ歸る時、次郎兵衞を使者として、手紙や色紙、短冊、畫讃の類を持たせてやつたといふ話がある。俗に則詠切れと云つて、芭蕉が素堂の需に應じて、貞享頃和漢則詠集を淨書したものが傳はつてゐるが、芭蕉庵で書いたものであらう。潮來の本間家の記錄によると、芭蕉が古今著聞集の有用な部分だけ書き拔き、本間家へ預けたものがあるといふが、本間家へはしば〳〵行つたものらしいか

ら、或は本間家で書いた事もあつたかも知れない。句集に、

朝な〳〵手習すゝむきりぐ〳〵す

といふ句が傳へられる。

繪も幼時より書いたものらしいが、後許六に學んでゐる。許六は狩野永眞の門人であるから芭蕉も狩野風であつた。專ら粗畫で、多くは畫讃であつたといふ。杉風子孫所藏の芭蕉遺墨の抄錄を見ると、萩と月の自畫讃、一蝶畫芭蕉讃（朝顏の畫、朝顏にわれはの句）、許六畫芭蕉讃（瀧に山吹の畫、ほろ〳〵と山吹散るかの句）などがあつた。これらも芭蕉庵のすさびであらう。

元祿三年四月、芭蕉は近江石山の奥の幻住庵に入つた。幻住庵はもと菅沼曲翠の伯父菅沼八郎左衞門範元の隱宅で、八年前に歿し、幻住老人と云はれた人であつた。こゝへ入れたのは曲翠の世話であつた。屋根を葺きかへたり、垣根を直したり、すべての修理は曲翠がやつたのだらう。幻住庵記によると、非常に景色の佳い所で、風は後の峯前の湖から吹込んで涼しく、日枝の山、比良の高根、辛崎の松などはよく見えるし、笠取山に通ふ木樵の聲、麓の小田に早

苗取る歌、螢飛び交ふ夕やみ、水鶏の叩く音など、美景足らずと云ふ事がなかつた。持佛一間を隔てて、夜具の類を入れる所をこしらへ、枕もとの柱に木曾の檜笠、越の菅蓑をかけ、筑後高良山の一如僧正から幻住庵といふ額を書いて貰ふ。話相手は宮守の翁、附近の百姓、猪が稻を食ひ荒したとか、兎が豆畠に入り込んだなどといふ農談に興じ、夜になると燈の下で、自分の影法師に是非をこらすといふ有樣で、やがて出でじとさへ思ひ定めたのであつた。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

幻住庵生活はそれ程寂しいものでもなかつた。膳所、大津、京あたりの門人は時折訪れるし金澤の秋之坊は熊野がへりに尋ねてくる。或は蚊帳を贈つたり、麥の粉を持つて來てくれる門人もあつた。併し秋霧が立つやうになると、寢冷えして體に障るので、七月半過には下山したくなつたのである。七月十七日附、牧童宛の手紙に、

拙者儀山庵秋至り候ては、雲霧に痛み候て、病氣に障り候故、近日出庵致し、名月過ぎには何方へなりとも、風にまかせ可申上存候。云々

とある。草庵にしばらくゐては打破りと云つたやうに、芭蕉はいやになるといつも風の如く飄

然と去つて了ふのである。

幻住庵を出た芭蕉は、八月粟津の無名庵に入つた。無名庵とは義仲寺境内木曾義仲の墓の側の草庵で、木曾塚と門人に呼ばれてゐた。その頃芭蕉は病氣で、寢ながら大津の尙白と月見の兩吟を卷いた。平田の李由、京の去來は蒟蒻と柿を持つて見舞に來た。大阪の之道、大津の珍碩が來訪した。病氣も少しよくなつたので、堅田へ遊びに行き、途中で風邪をひき、貧しい漁師の家に臥て了ふ。九月九日の重陽には乙州が酒樽を下げてくる。かういふ風に附近の門人は芭蕉を慰めてくれたけれど、こゝも冬になると立ち出でて、湖南の門人の家に泊り歩き、年末には乙州の新宅で年を忘れた。

元祿四年正月は無名庵で春を迎へたが、二三月頃一寸伊賀へかへり、四月十八日嵯峨の落柿舍に入り、五月四日まで滯在した。落柿舍は貞享頃去來の作つた別莊であるが、以前は數寄な人の草庵で、作りみがかれた家であつたが、ようやく頽破して、今は寂しい草庵となつた。裏畠に數十本の柿の木があり、一夜の中に柿の實が落ちて了ひ、買手を驚かした話がある。それ以來落柿舍の去來と云つた。落柿舍生活は芭蕉を十分に喜ばせた。坐右には源氏や土佐、世繼

などの物語があり、蒔繪の重箱にはうまい菓子があるし、而も名酒一壺を供へてゐる。「我貧賤を忘れて、淸閑を樂しむ」と芭蕉は云つてゐる。芭蕉はこゝに落着いて臨川寺に參詣したり、小督の墓を尋ねたりした。京から凡兆夫婦が來る。一つ蚊帳に五人入つて眠れないので、夜半過ぎから起出し、菓子を食つて明方まで話し明かす。人の來ない日は寂しいから無駄書をして遊ぶ。江戸から乙州が歸つて來て、江戸の門人の噂をする。堅田の千那や京の史邦、丈草が來る。杜國の夢を見て泣く。終り頃曾良が旅先からやつて來て、芳野の花や熊野詣の話をする。大井川に船を浮べ、嵐山に添うて戸灘瀨を上る。以上の日記を「嵯峨日記」と云ひ、魯玉の寶曆三年本が古い。

落柿舍を出てから芭蕉は又近江に遊び、八月無名庵へ來て、三夜ノ月見をした。卽ち八月十四日（待宵）は楚江亭、十五日（名月）は無名庵、十六日（十六夜）は堅田の浮御堂に船を浮べ、連夜の遊興を盡した。名月の無名庵の會は大津、膳所の人々が主で、乙州は酒を携へ、正秀は茶を持つてくる。洒堂（珍碩）の茶好き、丈草の酒好き、支考は若く、木節は老人、その中に惟然は賞むるも譏るも空うそぶき、各風狂を盡しての月見であつた。此の惟然坊はをかし

な男で、無名庵に泊つてゐた時、木枕を帶にくるんで寢たので、芭蕉からお前の頭には千兩の金がかかつてゐるのだらうと笑はれた事があつた。

芭蕉はその年の十一月江戸へ着いた。芭蕉庵は奥の細道の時、人に讓り、その後幾人か主人を代へたので、元祿五年春は橘町の彦右衞門店で正月を迎へた。栖去、辯を作り、「なし得たり風情、終に菰をかぶらんとは」と、三年間漂泊の旅をつくづく歎いてゐる。五月半、舊庵の傍に芭蕉庵を再興した。前の芭蕉庵は其角、一晶らの勸進であつたけれど、こんどのは杉風一人の施主であつて、それに枳風が助け、普請は曾良、岱水の指圖であつた。「三間の茅屋池に臨みて立てり」とあるから、前の芭蕉庵より廣かつたやうだ。やはり富士の佳景に接し、三股の月を眺める便があつた。芭蕉五本を植ゑた。七月七日素堂亭に老母七十七の祝筵があり、七人の連衆が分作した。この頃淨求法師が居て、炊事を助けた。閉關ノ說を作り、門を閉ぢて人と逢はなかつたが、八月には許六江戸に下つて入門し、九月洒堂も上方から來て、芭蕉庵の客となつた。深川夜遊びの興行はこの時であつた。

貞享以後芭蕉が鄕里へ歸つた時泊つた家に五つある。之を伊賀の五庵と云つて、卽ち無名庵

蓑蟲庵、瓢竹庵、東籠庵、西籠庵がそれであつた。無名庵は上野赤坂町、芭蕉の兄半左衞門の後園にあつた。元祿七年八月の新築で、その月見の會の獻立は芭蕉としてはこの上なき贅澤なものであつた。芭蕉歿後愛宕町大福寺の東隣に移し、寶曆頃藤堂采女（白舌、五代目城代）之を再修し、再形庵と云つて、自分の別墅內に建てた。その舊趾は今立入氏の邸內にある。蓑蟲庵は服部土芳の草庵で、はじめは些中庵と稱した。上野西日南町にあつた。幽邃な草庵であつたが、土芳歿後頽破したので、猿雖の曾孫桐雨之を修理し、蓑蟲庵再興記を作つた。今菊本直次郎氏の所有にかゝる。瓢竹庵は岡本苔蘇の草庵で、蓑蟲庵に近く、上野東日南町にあつた。庭前の大櫻樹の見事な花が有名であつた。支籠庵、西籠庵、共に窪田猿雖の草庵で、上野片原町にある。東籠庵は以前からあつたやうだが、西籠庵は元祿五年に成り、芭蕉の命名したものであつた。以上の草庵中東籠、西籠の二庵は宿泊したやうにも見えないが、猿雖亭興行はよく見る所であるから、泊らない事もあるまい。芭蕉芳野行脚の際、萬菊を連れて猿雖の庵に宿り鼾の圖を畫いたと傳へられるが、之は京に來た時畫いたもので、京から猿雖に贈つたといふ說の方が正しい。萬菊の鼾が餘り高いので、戲にその幅員を圖示したのである。無名庵の新庵で

續猿蓑の草稿を檢べた事は有名である。

二、佛頂參禪

芭蕉は在京時代南禪寺の塔頭某和尚に就て禪を學んだといふ說があるが詳でない。普通は天和初年江戸深川の臨川佛頂に學んだといふのが確定的である。芭蕉と佛頂との關係は前半に於て詳かでなく、後半卽ち芭芭庵と臨川庵との往來以降に於て明になつてゐる。佛頂は小名木川の南ヒツコミ町に住し、芭蕉はその北向ふの芭蕉庵に住んで居つて、親しく往來したものであらう。佛頂が臨川庵に住んでゐたのは、根本寺と鹿島神社との訴訟事件解決に基くのである。

根本寺は常陸の鹿島にある有名な寺院で、佛頂は當時その寺の住職であつた。根本寺に傳はる佛頂和尙出入留寫によると、訴訟の原因は香取神社の大宮司家と根本寺との勢力爭ひであつた。根本寺は推古天皇の御宇聖德太子御勅許の寺で、德川以前は常陸の佐竹氏から寺領二百三十石を貰つて居つた。その當時鹿島神社は五百石を領した。その後根本寺は一時無住となり、

維持困難に陷つたが、南化禪師の時鹿島神領の內から百石だけ分けて貰つて寺領とした。然るにその後繼天柱なる者が住職になつた時、寺領を神領以外から出して貰ひたいと訴へたけれど許されなかつた。佛頂の前住冷山の時になると、大宮司から社下の各寺の住職は後住を自分で定めてはいけない。年賀、節句には各寺より社家に出頭し、且つ何事も社家の下知に從ふべき由を申渡されたが、冷山之を謝絕し、その旨幕府へ訴へた。その結果根本寺は別に立ち來つた寺であるから、先規通り自今やつて差支へない事になつた。冷山は延寶二年十月遷化した。然るにその後住に佛頂がならうとした時、大宮司から拒絕して來た。そして大宮司は江戸に上り裁許を仰ぎ、十一月根本寺領を半知五十石に減して了つた。佛頂大に憤り、その理由なき旨を幕府に上申したが却下された。佛頂之にひるまず再三再四愁訴して、遂に天和二年六月二十七日の判決により、大宮司は三百六十石の內百六十石を取上げられ、根本寺は本知百石に復する事になつた。此訴訟は延寶二年より九年を要した。佛頂勝訴となるや直に後住を龍鐵に讓り、飄然として隱退した。

芭蕉の佛頂參學に就ては異說多く、いちいち信じられないが、たゞその中佛頂が深川東森下

町の長慶寺（溪トモ、曹洞宗）に住んでゐた事は事實であつた。即ち佛頂は裏大工町の臨川庵に住み、長慶寺にも住んでゐたのである。臨川庵を臨川寺（臨濟宗）となす人もあるが、天和當時は草庵で、寺院ではなかつたらしい。寺になつたのは正德三年で、僧佛頂の開基であらう。士則の「枇杷隨筆」に、佛頂に關する芭蕉の手紙を載せ、

早春佛頂和尙へ御狀被遣候を、則愚庵へ爲御持越微に熟覽仕候處、木兎の角あるけしき先づ感心仕候上、病床に病と組んで勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ驚入奉存候。和尙の肝腸いまだしかと探られず候間、重て評判可申進候。和尙にも舊臘は寒ぬるく候故、御持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し止めて、俳諧にて到半夜候。

梅櫻みしも悔しや雪の夜

と御申候。感心致す事に候。云々

とある。之によると佛頂も俳諧をやり、持病があり、芭蕉庵に出入した事が分る。支考は播磨に盤珪禪師、江戸に佛頂和尙と云つて、天下に龍虎の名知識である（爲辯抄）と云つてゐるが、

佛頂は盤珪と比べられる程の有名な僧ではあるまい。根本寺の一野衲で、芭蕉を偉くするために龍虎の一人と誇張したものであらう。臨川佛頂を佛頂國師一絲和尙と混同する人もあるが誤である。正保三年に死んだ佛頂國師に、正保元年生れの芭蕉が禪を學ぶ道理はない。之も支考の說と同じく芭蕉を偉くする揑造說である。

隱退後の佛頂の消息はよく分らない。貞享四年秋芭蕉が鹿島へ月見に行つた時、「根本寺のさきの和尙、今は世をのがれて、このところにおはしけると云ふをきゝて、云々」（鹿島紀行）とあつて、其時は未だ鹿島に居つた。併し「奥の細道」に、「奈須の雲岸（巖）寺の奥に佛頂禪師、山居の跡あり。云々」とあるから、後にこゝへ隱栖したものか。積翠の句選年考、木啄も庵は破らず夏木立の句の頭註に、「佛頂和尙二度此庵に歸りて、正德四年十二月十八日寂す。八十七歲」とあるから、雲岸寺の庵で遷化したものと見える。

芭蕉と佛頂を緣深きものに附會した說が少しある。それは桃青改號に就て、一、或時佛頂庭前の桃を指して笑ふ。芭蕉その意を悟つたけれど、自分の未熟なるを戒め、桃青と改めた、云々（冠山の全集）。二、佛頂和尙に參禪し剃髮した時、梅子熟せざるの意を取つて、桃青と號し

た（魯庵の桃青傳中の一説）。三、佛頂より汝が佛道桃の青きが好しと呵せられたから改號した、（同上）。其他道のべの木槿は馬に食はれけりの註に、此句は佛頂が道の邊の木槿を指して一句せよと云つた時の卽吟で、禪意に叶つてゐる（素丸の說叢大全中の一說）などと云はれるが皆信じられない。甚しきは古池やの句を禪の公案のやうに取扱つて、佛頂との問答に附會した說さへある（春湖の古池眞傳）。曰く、或日佛頂が六祖五平と共に芭蕉庵に至り、近日何所有といふと、芭蕉答へて、雨過洗二青苔一と云。和尙、如何是青苔未生前といふや、池邊の蛙一躍して水底に入る。芭蕉音に應じ蛙飛込む水の音と答へると、佛頂莞爾として珍重々々と唱へ、偈を認めて歸つたといふ逸話であるが、全く架空な小說的記事である。

芭蕉は何のために禪を學んだかよく分らないが、恐らく禪俳一味といふ立場から、禪に趣味を感じて、學んだものかと思はれるが、一面には芭蕉庵に入る當時の芭蕉は非常に貧乏であつたし、覇氣も相當に强かつたやうで、物質的にも精神的にもなやみの多かつた時代であつたから、心を落付けるため、苦悶を打破するために參禪したのかも知れない。禪家では芭蕉は居士になつてゐるが、果して佛頂から居士號を許される程修行が積んでゐたものか明かでない。

三、貝おほひと壽貞尼問題

芭蕉の遊蕩生活、得道した芭蕉の上から考へると、何となく一種の滑稽を感ぜしめるが、波瀾の多い芭蕉の生活から見ると、此問題は私共に深い考察を向けさせる事であつた。芭蕉の亡命卽ち寛文六年七月から、江戸下り卽ち同十二年春迄、芭蕉は京へ行つたものか、伊賀に留まつてゐたものか――恐らく伊賀と京とを往來したものと推せられるが、その末の寛文十二年正月に、「貝おほひ」といふ破天荒な遊蕩氣分の著作があつたとすると、私共の眼はあやしく光るのである。芭蕉の亡命に關する伊賀の戀愛說は確證を得ないから信じられないが、この「貝おほひ」の出現によつて、全く荒唐無稽な說として打捨てるわけにも行かなくならう。確證はなくとも、その間に芭蕉の情的な動搖は始まつたのではなからうかといふ位の想像は起きて來よう。そこで壽貞尼といふ女の登場である。話は前後するが、今芭蕉の澄ました顏を見上げながら、「貝おほひ」とは何であるかと味到するのも興味の一つではなからうか。「貝おほひ」は伊

賀上野天滿宮奉納の句合である。一名三十番俳諧合と云つて、合せて勝負を見るといふ意味から、平安時代の戯技の名を取つて附けたのであるが、恐らく西行の蛤貝の歌「今ぞしる二見の浦のはまぐりを貝あはせとておほふなりけり」から思付いた命名であらう。作者は大方伊賀上野の人であらうが、中には「續山井」や「續連珠」に見えた人もあつた。內容は當時流行の小唄や奴詞を取入れたもので、且つその芭蕉の判詞が句以上に遊蕩氣分を助長させるもので、どうしても芭蕉は一時なりとも酒色の間に身を委ねた事がなくては、それほどまでに知るわけはなく、興味を感ずるわけもなからうと思ふ。二十九歳の芭蕉はこんな事をおつしやる。「伊勢のお玉は鐙か鞍かと云へる小歌なれば、誰も乘りたがるはことわりなるべし。云々」、「京女郎にほの字とは、誰もすき鍬のかねくゝ望む事なれど、云々」、「左のぬれかけ道者は、ぼつとりものゝしなものの袖にしぐれの通りものとや申さむ。云々」。「松の葉」三谷踊に、「伊達も浮氣も命のうちよ。やがて死ぬ死ぬ。ひつぴけ。うんのめ。あすをもしらぬ身に」とあるが、かゝる刹那的快樂主義は當時の遊蕩兒の人生觀で、若い芭蕉のそれに共鳴した事は、以上の判詞を以てしても想像が出來よう。之を後の芭蕉庵生活と比べたまへ。色男の芭蕉、飄然と江戸へ下つたものの、住むべき一定の家もなく、僅の知己を頼として、浮草のやうに、昨日はそこの岸、今日はこゝと、流れ流れて來た末が深川の六間堀、杉風の別墅と云へば豪氣なものだが、土地は低いし、場末ではあるし、一間しかない壁をぶち拔いて、出山の釋迦の像を安置し、瓢を米櫃にも花活けにも代用したといふ貧乏ぐらし、いつも茶の八德を着て、嵐雪がとこへいてくるぞやと云はれては、どら者の其角氣が詰つて、俳情の外は逃げ歩いたといふのも無理のない事でさりとては變り果てた身の上である。伊勢のお玉に乘りたがつたり、京女郎にほの字では、芭蕉も門人の大酒を戒めたり、路通の還俗を憤る資格はないのである。參禪や草庵燒失が芭蕉に深い內省を促すやうになつて以來、色慾もさすがに捨てがたき情であつた位に片付けてはゐるが、壽貞との關係があつては、終世人知れぬ思の種となつて惱まされた事であらう。

一體芭蕉はどんな女を好んで居つたか。浪花の漫筆と傳へられる俳諧正語抄に、昔芭蕉は肥後の山中で夫婦の樵夫に逢つて、その睦じい生活に感動したと云つてゐるが、それは信じられないが、柴賣女のやうな質素で勤勉で、夫のために勞苦も厭はず働くといふやうな女ならば、妹脊の契を結んでもよい（凡兆の柴賣說）と言つたとあるから、かうした夫唱婦隨主義の女に

は共鳴を持つてゐた事が分る。壽貞は果してかゝる種類の婦人であつたか。壽貞の素性に就ては一向手がかりがない。酒竹は藤堂家の侍女であらうといふが確證があつたわけではない。何時何處で關係したものかそれもはつきり分らない。たゞ想像する所、亡命後伊賀か京の出來事かと考へるだけである。壽貞と芭蕉との外ならぬ關係を想像させる唯一の材料は、今の所次のやうなものしか殘つてゐないだらう。

一、風律が野坡その他の人の俳話を書きとめた小ばなしといふ書に、淺生庵（野坡の庵號）談として、「壽貞は翁の若き時の妾にて、とく尼になりしなり。其子次郎兵衛もつかひ被申し由。云々」とある。

二、元祿七年閏五月十一日（二十一日か）、杉風に與へた書狀の一節、「猪兵衛病氣、桃隣無御油斷被仰付可被下候。折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。されども壽貞病人の事に候へば、しかじか茶をまゐるほどの事も得致すまじくと存候。云々」

三、同年六月三日、猪兵衛に送つた手紙の一節、「理兵衛細工無之時分、せめて煩ひ不申樣に御氣を可被付候。右之通壽貞にも御申聞かせ可被下候。おふう夏かけて無事に候や

樣子具に御申越可被下候」

四、同年六月八日、猪兵衛への手紙、「壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へども、急便に候間、此書狀一所に御覽被下候樣に賴み存候。萬事御肝煎御精御出しの段々、先書にも申來り、扨々辱く誠にふしぎの緣に候。此御人賴み置き候も、斯樣に可有端と被存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界一言理窟は無之候。ともかくも能き樣に御はからひ可被成候。理兵衛もうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ、取亂し不申樣に御しめし可被成候。以上

五、同年七月、壽貞の死を悼みて、

數ならぬ身となおもひそ玉祭

六、同年十月、伊（猪）兵衛宛遺言狀、「伊兵衛に申候。當年は壽貞事に付いろ〳〵御骨折面談に御禮と存候處、無是非事に候。殘り候三人の者ども十方を失ひうろたへ可申候。好齋老など御相談被成可然了簡可有候」

七、支考の「露川賣」（享保八年作）に、「昔西行・宗祇など兼好も長明も今日の芭蕉も、

酒色の間に身を觀じて、風雅の道心とはなり給ふ。云々」

はじめの閏五月十一日附杉風への手紙は、芭蕉が膳所から送つたもので、芭蕉庵の留守を預けた壽貞が病人だから、お出でになつても茶一つ上げられまいといふ文意、六月三日猪兵衛宛の手紙は、理兵衛・壽貞・おふうの事を心配したもの、六月八日のは壽貞の死を聞いて歎いたもの、七月のは壽貞追善の句、數ならぬ身となる思ひそと云つた芭蕉の心持を想像すると、壽貞との關係の尋常一様ではなかつた事が推せられる。最後の文は支考が世情文明の俳諧に、遊興の經驗を持たぬやうでは駄目であると、露川を攻擊したもので、直接壽貞には關係した記事ではないが、之に對して露川は「相楔」に支考の說を罵つて、遊興に身を持ち崩して、風雅の道心となるわけはない。それは蓮二が我田引水論である。殊に兼好や長明が酒色に長じたなどとは前代未聞の事である。虛を先にして、實を後にする術だらうと冷やかしてゐるが、芭蕉が酒色の間に身を觀じたといふ支考の虛妄說は、どういふわけか辯駁してゐない。兼好・長明に就てその妄を辯ずるならば、芭蕉に就ては大に辯じなければならぬ筈であるが、一向それに觸れてゐないのは不思議である。露川は芭蕉の若い時の遊蕩を知らないのか。或は遊蕩を認めてゐ

ても默つてゐたものか。考へさせる態度である。

とにかく壽貞に就てこれだけしか證據が殘つてゐない。壽貞はこれまで何をして居つたか。寬文十二年から元祿七年迄、二十三年の歲月は流れてゐるが、それ迄の壽貞の消息は沓として知れない。そこで臆測の種になるのは元祿五年秋の「閉關ノ說」である。

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置くといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなるかたくも多かるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關も守る人なくば、いかなるあやまちをかし出でむ。蜑の子の波の枕に袖しほれて、家を賣り、身を失ふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂を苦しめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事一夜の夢の如し。五十年六十年の齡傾くより、淺ましうくづおれて、……貪慾の魔界に心を怒らし、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり。出ては他の家

業を妨ぐるもうし。……友なきを友とし、貧を富めるとし、五十年の頑夫自ら書し、みづから禁戒とす。

此文は冒頭の色慾論が唐突で、全體の意味の徹底を妨げる恐がありはしまいか。冒頭の論によると、色は君子の惡む所、佛も五戒の初めに置いてゐるが、人間には弱い所があつて、つい情にほだされて契を結ぶ事があるから、人目の關が大切である。片田舍の遊女風情に迷つて、家を賣り、身を亡ぼす例は多いけれど、徒に長生ばかり願ふ守錢奴の無情漢よりは、かゝる人の方が遙にましで罪は許されようといふのであるが、かうなると芭蕉は艶隱者のやうになつて物の分かる苦勞人のやうに思はれるが、それを芭蕉平生の言行から推すと、そこに何となく芭蕉らしくない氣持があつて、矛盾があり、ヂレンマがあるやうにも考へられよう。其後半は例の物臭い述懐で、人間も年を取るに從ひ、體も利かなくなり、氣力も無くなつて了ふから、私慾ばかり考へないで、利害の念を打破して、心を靜に持たうではないか。人が來ると無用な口もきかなければならず、人を訪ねると家業の邪魔ともならうから、門を鎖して、人と逢はない方がよいといふのであるが、何となく昔の遊蕩生活を後悔したやうなしないやうな、愚痴つぼい、引込み思案の獨言のやうになつてゐる。五十年の頑夫と云つた意味は、自分は聖人の教に從ひ、佛の戒を守つて、色を愼み、利害の念を破却し、心を靜かにしてゐたならば、苦しむわけもなかつたらうに、頑夫であつたものだから、種々の煩惱に苦しめられるのである。禁戒しなければいけないといふ意味であらうが、それならば前半の戀愛同情論は、芭蕉の一生に就て何か重大な意味をもたらす問題のあつた事を暗示させて、そこに芭蕉の大きな苦惱が含まれてゐるやうにも取れるのである。壽貞とは子供迄なした仲だけれど、食はせる事も出來ず、ひとつに居ては門人の手前も工合が悪いといふやうな事から、因果を含めてはなれ〳〵になつたものだが、それが又尋ねて來て、一層芭蕉の苦勞を增したから、色慾論が出て來たやうにも考へられよう。なほ憶說を逞しくすれば、元祿五年秋頃は、壽貞は芭蕉庵に來てゐたものであらうか。理兵衛、まさ、おふうの三人の子を連れて、少くともまさ、おふうだけは自分と共に芭蕉の厄介になつて居たのであらうか。理兵衛は細工物を商賣してゐたやうだから靑年であらうがまさ、おふうはまだ子供であつたらしい。今眼前にやつれた壽貞や可憐な子供を見ると、芭蕉も一層昔の事が思出され、氣が屈して閉關ノ說を書くやうな考になつたのかも知れない。壽貞

も諸所流浪した揚句又芭蕉を慕つて江戸へ下つて來たが、病氣勝ちで滿足に家庭の世話も出來なかつたので、次郎兵衛を呼び寄せたものだらうが、六疊一間（前の芭蕉庵より廣くなつて居たらうから、八疊かも一間位あつたかも知れないが）しかない芭蕉庵に四、五人も住んでゐては、狹くてどうにもならなかつたらうから、子供だけは近所に預けたものか、などといふ想像がとめ度なく起つてくる。壽貞も俳句を作つてゐたか詳かでないが、寛文頃に壽貞號の俳人は幾人もあつた。例へば重賴の「佐夜ノ中山集」にある一ノ宮壽貞（阿波住）、季吟の「續山井」にある杉本壽貞（山城）、似仙の「落花集」にある壽貞（大阪）、一雪の「言之羽織」にある比丘尼壽貞（京）等があつた。その中の何れが芭蕉關係の壽貞であるか一向分らないが、瓊音は一ノ宮壽貞を芭蕉の壽貞としてゐるが確證はあるまい。次郎兵衛は元祿六年五月頃は芭蕉庵に居つて、許六の歸國の際芭蕉の手紙や色紙・短册・畫讃の類を許六亭に屆けたり、或は芭蕉最後の旅行の時江戸からお供して伊賀へ行き、なほ終焉の時も病氣を看護して、忠實に仕へて居つた。芭蕉と壽貞の間の子のやうに云ふ人もあるが、さうではあるまい。壽貞の連子であらう。芭蕉と別れた後に出來た他人の子であらう。元祿五年（？）三月二十三日附、猿雖宛の芭蕉の手紙に（山崎氏芭蕉全傳）

次郎兵衛殿頃日俳諧めされ候よし、珍重々々。さめぬ內無心元存候。發句も候はば御書付御越可被成候。云々

とあるから、次郎兵衛は芭蕉の子ではないと思ふ。芭蕉の子供ならば、次郎兵衛殿と書くわけはあるまい。之によると次郎兵衛は俳諧をやつた事もあると見えるが、好きでもないやうで、直にさめさうだから心許無くと芭蕉が言つたのだらう。其角の終焉記に壽貞が子次郎兵衛と書いたのも、芭蕉の子ではないといふ事を特に示さうとしたのではなからうか。芭蕉歿後次郎兵衛や理兵衛・まさ・おふうの消息は一向知れてゐない。二人の子供は伊兵衛や好齋老が世話したものか。

妾と云つたのは、芭蕉は方外の人で、僧侶のやうな生活をしてゐたものだから、その生活の手前妻とは云へず、妾と書いたのだらうと思ふ。それがため芭蕉の人格の下るわけはないのである。元祿俳人の生活はそんな窮屈なものではない。あの律義な去來にさへ可南といふ妾があつた。而も相互愛情が濃やかのやうで、篤實、溫良な去來の人格には何の障りもなかつたので

ある。

二、人格

一、寛厚・慈愛

芭蕉の門人中には師風に從はないものもあつたし、我見に執はれて、師に反感を持つた者もあつた。併し表面から芭蕉に楯を突くやうな者はなかつた。外觀的には靜かであつたが、不平を抱いてゐる者は確にあつた。それが歿年近くになると、だん〳〵馬脚を表し、つひには全く師風を變じたり、罵る者なども出て來たのである。其角・嵐雪・荷兮・野水・越人等はかゝる

疑をかけられさうな態度を示した人物であつた。併し芭蕉はかくの如き門人と云へども、皆一樣に愛撫して、怒を表さなかつた。その寛厚・慈愛實に芭蕉の德望を高めるばかりであつた。

其角は芭蕉十哲中の高弟で、嵐雪と共に芭蕉の双翼であつた。元祿五年芭蕉は、「草庵に桃櫻あり。門人に其角・嵐雪あり」と題して、「兩の手に桃と櫻や草の餅」と云つた位、信用厚き門人で、世間でも彼の才能と地位は認めて居つた。其角は延寶二年十四歲で入門し、老雪は嵐亭治助（はるすけ）と云つて、其角よりやゝ後れ、延寶七年頃入門した。とにかく二人とも蕉門の古老であつた。その其角や嵐雪が生涯芭蕉に忠實な門人であつたかといふと決してさうではなかつた。敢て芭蕉に反旗を翻した譯ではないが、結局性格や趣味の相違から自然と師の句風から離れて行つた。之は芭蕉も以前から知つてゐたらうが、强ひて咎めなかつた。元祿六年芭蕉が酒田の淵庵不玉の獨吟歌仙を批評して、「近年武府の風雅分々散々適々邪路の輩も相見え候處、云々」と奥書に述べてゐるが、果して之が芭蕉の言であるかどうか詳かでないが、若し芭蕉が云つたとしたらば、邪路の輩は其角一派を指したものだらう。「此道や行人なしに秋の暮」、死ぬ少し前の芭蕉の句であるが、意味深長なもので、芭蕉の晩年も案外淋しかつたやうに思はれる。

其角が師風に遠ざかつた事に就いて、去來或時(元祿七年五月か)芭蕉に質した事があつた。芭蕉云、それは汝の言ふ通であるが、天下に師たる者は先づ自分の形位を定めなければ人が從はない。之れ其角の舊姿を改めない所以で、予の流行に進まない譯である。流行は違つてゐても、風雅の誠を知つて居たならば、互に勵むたよりともならう。去來云、師の言を返すのは失禮であるが、俳諧は新みを以て生命とする。水雪の清きも一定の場所に留まつて動かなければ必ず汚くなる。其角は今日諸生のために古格を改めないとしても、長くその風に留まつてゐるならば、劍が菜刀になつたやうなものである。芭蕉云、汝は言を愼しむがよい。其角は今我流行に後れても、行末何等かの風流を考へ出すかも知れない。去來云、それはさうであらうが、幾年かかつてさうなるか心細い次第であると云つて退いたといふ話がある(贈晋氏其角書、元祿十年)。元祿五年許六が芭蕉に入門する時、芭蕉に向つて、自分は翁に對面しない前に、其角の所へ百四五十句ほど點を乞うた事があつた。然るに自分のよいと思ふ句には點が稀で、言捨ての句に褒美の點があつた。今日翁の感心された句は大方一點の句であつた。其角は翁の高弟である。それなのに師弟の胸旨がこんなに違つてゐては賴もしくないがどうだらう。自分の俳

諧と其角の俳諧の合はない理由、翁の俳諧と自分の俳諧との符合する理由を詳說して下さい。芭蕉云、貴丈が俳諧を好むのは閑寂にして山林に籠るやうな氣持がするからであらう。其角の趣味はさうでない。其角は伊達風流を好んで、作意の働き面白きを愛する。そこが貴丈と其角の相違する點である。許六云、然らば翁と其角とは師弟何れの所を敎へ習ひ得たのであるか。芭蕉云、自分の風は閑寂を好んで細い。其角が風は伊達を好んで太い(細いの誤か。感覺の鋭いといふ義であらう)。その鋭い所が自分の風であると云つた(許六の自讃之論上)。

以上の問答によると芭蕉とは個性が相違した。趣味も亦違つてゐた。其角は潤達な男で、浮世の禮義に拘泥しなかつたが、芭蕉は謹直で細心で、引込み思案の方であつた。句風も其角は作意を旨とし、表現の新奇を好んで居つたが、芭蕉は物の本情を摑んで表さうとし、表現の誇張的技巧を喜ばなかつた。故に其角の句は難解で、純直自然には行かなかつた。從つて芭蕉晩年の輕みといふ流行には從ふ筈はなかつたのである。去來は何處迄も師の風を忠實に守つて行かうとする人だから、其角の風にはだんだんと慊らなくなつて、芭蕉に質したわけであらう。それを芭蕉がおだやかに諭してゐる所は、芭蕉の人格の如何に寛厚であつたか、包容性に富ん

でゐたかが窺れよう。元祿三年の其角の句に、

切られたる夢はまことか蚤の跡

といふのがあつた。之に就て去來は其角は實に作者である、僅に蚤の食つた位の事を、かく迄云ひ盡す者はあるまいと感じ、芭蕉は其角は定家卿である、それ程でもない事を仰山に云ひ連ねてゐる（去來抄）と驚いてゐるが、誇張表現も此程度ならまだ分るが、

饅頭で人を尋ねよやまざくら

筑摩川春行く水や鮫の髓

かういふ句になるとこけ威しの句とならう。饅頭の句は許六は謎であると云ひ、去來は未完成の句だと云つてゐるが、謎と云はれても仕方あるまい。酒と云はず、饅頭と云つた所が、新味だらうが、奇拔な事を云つて、人を驚かす外に何の意味もない。句意は饅頭をやるから人を尋ねてくれと云ふのださうだが獨合點の句である。筑摩川の流を鮫の髓に喩へる事も奇拔である。かかる傾向は既に正風を離れたもので、芭蕉の教とは雲泥の差である。去來や許六が怪んで芭蕉に質問した理由はよく分るが、それでも芭蕉は、其角の長所を認めておだやかに辯解してゐる。元祿の末に其角は洒落俳諧と云つて謎のやうな譬喩體の新風を起し、

日の本の風呂吹といへ比叡山

いざよひや龍眼肉のから衣

などといふ句を作るに至つては、もう手の施しやうがない。比叡山は坊が三千ある。天台根本の寺である。そこで三千坊を三千本と酒落れ、臺根を大根に喩へ、日本の風呂吹と云つたもの次は十三夜・十五夜と月を見て來たから、十六夜には眼がしぼんで、恰も空の黃眼肉のやうになつたといふ意で全然謎である。芭蕉が知つたら定めし邪路の輩と云つて唾棄するであらう。併しかうなる傾向は以前から見えて、去來の注意を待つ迄もなく、芭蕉はひそかに憂へて居つたに違ひない。それでも芭蕉は寛恕して捨てて置いて、門人の言を却て戒めてゐたほどであつた。

人格

嵐雪も芭蕉には忠實な門人ではなかつた。其角とは性格が反對で、柔弱な隱遁的な男であつたが、死ぬ迄其角と親交のあつたためか、晩年になる程其角の影響が著しく、洒落風に傾いて來た。其角に艶な所があるやうに、嵐雪には俗な美しさがあつた。元祿四年の猿蓑の序に、其

角は俳諧を幻術にたとへてゐるが、同書、

花芒　大名衆を　まつり哉　　嵐雪

といふ句を出して、神田祭の警固の役人を花芒に喩へてゐるが、これなども嵐雪の俗悪な浮華な一面を示したもので、洒落風の譬喩體に近いものであつた。許六の同門評判に嵐雪を評して「柔弱にして弱く、弱きによつて美しきやうなり」とあるが、そんな風も見える。芭蕉の一周忌に嵐雪の追善句、

夢人の裾をつかめば納豆哉

とあるが、之も許六の自得發明辯に、

師の亡き追善に、かやうのたわけを盡す嵐雪が俳諧も世に行はれて口すぎをする、世上面白からぬ事也。云々

と云つてゐるが同感である。芭蕉から見たら嵐雪も邪路の輩であらう。蕉門の兩大關と云はれた二人がこんな風であつたから、芭蕉の晩年もさぞかし寂しかつた事であらう。

其角や嵐雪はまだ芭蕉に惡口を云はないからよかつたが、名古屋の荷兮はひどい男であつた。

許六は滑稽傳に、荷兮・野水・越人・木因・路通は芭蕉勘當の門人であると云つてゐるが、之は支考の中傷説を眞に受けた誤説である。支考の「笈日記」(元祿八年刊)の序に、

世の人の是非に立てる事の淺ましうおぼゆるとて、老後には恨をふくめる人(野水・荷兮・越人を指す)のもとにもひたすら行きかよひて、まどかになし給へるは、是をも風雅の上にあらんと殊更に尊とかりける。云々

とあるが、何で恨を含んだか判然しない。併しかゝる中傷を受けるだけの行爲は荷兮にはあつた。それは曠野後集(元祿六年刊)の問題である。彼は同書の序に、幽齋・常友・守武・宗鑑・貞德・日能・親重・維舟・貞室・一三・忠知・宗因等の發句をあげて激賞し、末に

やゝこの比に至りて、ちりぐ草の雫をだに味ふる人なきにや、一ふしある文字も聞かずなり行くぞつたなし。たゞいにしへをこそ戀ひしたはれ。云々

と云つて、暗に蕉風の天下を惡く云つてゐる。荷兮は正風初期の風調を代表すべき冬の日の撰者として鏘々たる門人であつた。それが中頃になつて師風を改め、言語の洒落を旨とする古風な俳諧を慕ふなどとはをかしな話である。かゝる意見は芭蕉の生前に言ひ出すべき言葉ではな

い。而も卷頭に春可の「うぐひすも歌機嫌なりけふの春」の句を出し、次に信德の「蓬萊や人丸赤人榧かちぐり」の句をあげてゐるなどはどうかしてゐる。春可の句は重頼と正式の喧嘩の種となつた有名な句で、蕉門の撰集には關係のない句である。かゝる句を卷頭に置く事はむしろ蕉門の作者として遠慮すべき事である。次の信德は貞門・談林・蕉門と渡り歩いた男で、延寶時代には芭蕉の先輩として七百五十韻などで新風を鼓吹して居つたが、貞享以後芭蕉が寂栞主義の境地を展くやうになつてから、芭蕉一派より物の數ともされなくなつて了つたらしい。例へば凡兆の「大年を思へば年のかたき哉」の上五を戀櫻と置いて、芭蕉から「そこらは信德の知る所にあらず」（去來抄）と一蹴された話がある。信德が蕉門で如何なる地位の人物であるかは荷兮も知る筈であらうが、それに構はずかゝる談林の古ぼけた句を出すのもいかがと思ふ。「故あつて先師に遠ざかる」とか「恨を含める人」などと云はれる所を見ると、何か芭蕉に反感を持つてゐたやうに見えるが、その反感が芭蕉の風が自分の趣味に合はないとか、或は去來の猿蓑に對する不平であるとかいふならば、それは自分の句が時代後れになつて、世間から捨てられたといふだけで、恨に思ふ荷兮自身のひがみである。又例へその外に込み入つた

事情があつたにしても、荷兮は芭蕉の指導によつてえらくなつたのであるから、その師恩は忘れてはならない筈である。荷兮の方が恨みに思つてはいけないのである。實をいふと芭蕉の方から遠ざけてよいのであるが、芭蕉は怒る人ではなかつた。去來抄によると、芭蕉在世中芭蕉の句を譏る者があつたので、去來は爭はうとした所、芭蕉の云ふに、怒つてはゐけない。自分には自分の句が未だ盡さないと思ふものが澤山ある。却て五三の句をあげて譏られるのは、名人のやうで名譽であると大笑したといふ逸話がある。この譏つた者は荷兮周圍の人であるかどうか明かでないが、去來の「答許子問難辯」に、

尾陽の荷兮一書を作る。書中所々先師の句をあざけると聞けり。我いまだ此書を見ず。この荷兮や先師世にます内ひたすら信仰す。一とせ故有て野水・凡兆と共に先師に遠ざかる。師その恨を捨て、遷化の年東武より都へ赴き給ふ道、名古屋に至りて彼が柴扉を叩きて二二日親話したまふ。彼またこれを崇め尊ぶ事舊日の如し。翁遷化の時、東武の其角・嵐雪・桃隣等東山に於て追悼の會をなす。かれ蕉翁の門人の數に加はりて着坐す。今書を作りて翁をあざける。もつとも憎むべきの甚しきものなり。彼が心操をかへりみるに、翁在

す時は先師を賣りておのれが浮世のたよりとし、先師歿し給ひては、また先師を賣りて初心の輩に今は先師に勝りたりと欺き導かんためなるべし。云々

と云つて、深く彼が忘恩行爲を憤慨してゐる。此一書といふは橋守（元祿十年刊）の事であらう。故ありて先師に遠ざかるとは、凡兆の事は明かでないが、荷兮・野水は古風を慕ひ、芭蕉の教にそむいたので、芭蕉の不快を買ひ、自然と足が遠くなつたのだらうと思ふ。恨を捨てるといふのは、芭蕉が寛恕して、彼等の氣持を和げようとした事である。最後の旅行に名古屋へ立寄つた時、荷兮は露川を道案内とし、芭蕉を連れて佐屋迄行つて水鷄を聞かせて待遇した。芭蕉が死んで四七日に露川・素覽・佐次の尾張連中の追悼句はあつても、荷兮・越人・野水の追悼句は見えない。露川等の追悼句がある位だから、四七日頃は荷兮等も芭蕉の死を知つてゐる筈であらうが、送らないといふのはどうした譯か。それでも荷兮だけは十一月十二日京丸山量阿彌亭に於ける初月忌の追善に出席してゐるから、そこだけは感心であるが、それも越人・野水の一派を代表して行つたものかどうか分らないが、越人・野水の不參加は面白くない。橋守は見ないからよく分らないが、支考の露川賞に、「身は竹齋に似たるかなは、荷兮が橋守の文盲を見習ひて、ルかな・クルかなと思召候哉。クルかな・ケルかなとは手爾波を重ねて大決定の詞也。云々」とある事、又は露川の返答相楔（あくさび）に、「竹齋の句、名目にのせし哉留の事、今更ならぬ事也。橋守に一通り演べたり。云々」とあるなどによつて想像すると、荷兮は芭蕉の狂句木枯の句の末の切字をわるく云つたものと見える。恐らく彼は古風の切字論に立脚して、似たる哉を浮哉と思つて、意味の治定しない哉の證句に出した事であらうが、此句は荷兮の撰した冬の日の卷頭吟で、それを今になつて譏るとは譯の分らぬ事である。かういふ態度では支考・許六から勘當說を流布されるのも尤な事である。

越人は荷兮とは少し違ふ。彼は越前の產で、若い時流浪して名古屋に來り、野水の世話で紺屋を開き、菱屋重藏と云つてゐたが、浪人上りらしく、自分では學問が無いやうに云つてゐるが、相當な學者であつたやうだ。貞享初年芭蕉に入門し、三尾濃江行く所一器の食を分かち、一ッ衾に寢たやうな親しい師弟であつた。但し性格は頑固で、激情家で、自負心の强い男であつた。去來・丈草を柔弱の內股膏藥と罵り、路通が如きは長くらべする相手でないとか、素覽が如き數にも足らぬ者共などと、同門の惡口を云ふのは此男の癖であつた。支考から勘當說を流布

されて非常に憤慨し、「不猫蚊」や「猪、早太」を著して、支考の欺瞞行爲を痛罵し、或は「鵲尾冠」の問はず語に、芭蕉・其角・杜國を特に推稱し、君臣の情誼、父子の愛情に喩へるなど、それが芭蕉に恨を含むとは少し受取れない話である。彼が路通を惡んだ事は、路通が芭蕉の破棄した十七體の附句の傳書を寫し取つて賣り歩いた事を野水からでも聞いたものか、又は猿蓑撰の時、路通と別れる時の句の前書に、路通と書かないで僧と別ると改めたり、（六二頁參照）元祿四年九月野水と共に上京し、凡兆を誘つて芭蕉を訪れ、路通をあしざまに罵つて芭蕉の氣持を害した（削かけの返事）事でも分らうが、去來を嘲ける理由は少しも分らない。越人は古風を慕つて、貞德の句を賞める事は荷兮と同樣である。去來は溫厚な人物で、天性正しく生れ附き給ふによりと許六も賞めてゐるやうに、實直な師に忠實な人であつた。何がために去來や丈草を罵るのだか罵る方が悪いやうにも取れよう。去來の猿蓑の評判を不快に思つたのか、去來と許六の親交を嫉んだものか、支考に利用される去來の好人物を侮つたものか、或は去來の路通びいきを悪く取つたものか、一向分からない。路通や去來を罵るのはまだよいとしても、師の芭蕉を恨む段に至つては、何の理由によるものか一層分からない話となる。芭蕉が古風をかへり見ない事に反感を持つたものか、名古屋の若い俳人が深川集を手本にした事に就て不快を感じたものか、そんな理由でもあるまい。芭蕉が路通を可愛がつたり、去來を信用する事を面白く思はなかつたものか、それだとすると越人のひがみである。一說に壺中の「弓」（元祿六年刊）の尻押しをして、去來や芭蕉に楯を突いたと云はれるけれど確證があるわけではない。「弓」の序を見ると、何だか去來の猿蓑に反抗するやうな口吻がないでもないが、それは去來に對する不平であつて、芭蕉には觸れてゐない。壺中は元祿四年頃芭蕉に入門したもので、それ以前名古屋の連衆と親しく、或は越人・荷兮などに敎を受けて居つたものかも知れないが、その壺中を越人・野水・荷兮・凡兆などがけしかけて、去來・芭蕉に反抗させたといふ一說は、何の意味だか分らない話である。「弓」には越人の發句二、凡兆・野水・壺中等との半歌仙一卷があるだけで、それも別に芭蕉に當つた所はない。壺中の序は少し變であるが、去來・芭蕉を向ふに廻して悪口を云ふ程の俳歷も自信も壺中にはある筈がない。それは越人等が書かしたと云へばそれ迄であるが、それ程にして去來・芭蕉を悪く云はうとする彼等の考が分からないし、又それを知る確證もないのである。前に上げた問はず語の文や元祿元年の芭蕉の二人見し雪はの句の追憶、貞享四年

冬曾遊の懷舊談などから考へると、越人は芭蕉を追慕し、その情誼に泣いてゐた事は分かる。私はただ越人の自負心が芭蕉の近親を罵つて、芭蕉の氣持を損ね、その上自分は古風を慕つて流行に後れ、同門からはあまり相手にされなくなつたので、その不平やら憤慨やらが嵩じて、結局芭蕉に反抗心を持つてゐたやうに誤傳され、且つは支考の宣傳もあつて、蕉門から離されて行つたのぢやなからうかと考へる。橋守の荷兮は良くないが、その荷兮と越人と同列に見るのはどうかと思ふ。野水は越人の恩人であるから、どこ迄も野水を辯護するのは當然で、「不猫蛇」や「猪ノ早太」を見れば分かるが、荷兮には觸れてゐない。荷兮も野水も勘當の弟子であると云はれてゐるから、野水のためにその浮説を打消さうとするならば、荷兮のためにもその非を鳴らしさうなものだが云つてゐない。知つてゐてもわざと默つてゐたものか、その間の消息は詳かでないが、露川は荷兮弟子也と云つてゐる外、何とも云はないのは不思議である。芭蕉歿後越人は義仲寺の追悼會へも出席せず、追悼句も送つてゐないから忘恩の徒であると云ふのは早計である。「笈日記」によると、十月五日芭蕉の病狀が悪くなつたので　御堂前の花屋の裏に移し、膳所・大津の間、伊勢・尾張の親しき人々に手紙を出したとあるが、之は支考が出したのであらうから、平生仲の悪い支考からの通知では、手紙を受取つたとしても、越人は行くわけはないのである。或は支考は荷兮・越人・野水を除いて他の者に知らせたかも知れない、受取らなければそのまゝになる。受取つても支考からでは行かない。こんな工合で會にも出ない、追悼句も送らないといふやうな事情ではなからうか。義仲寺の會は四十三人とあるが皆近江・京・大阪・伊賀の門人だけである。その後江戸の連中から追悼句が集まつて來たが他の地方からは來てゐない。義仲寺の追悼會は手近の門人で行つたと見える。四七日になつて伊勢から路草・圓友の人々、尾張から露川・素覽の人々の追悼句が來てゐる。四七日（十一月九日）頃には越人の耳にも入つてゐる筈であるが、荷兮だけ初月忌（十一月十二日）の丸山量阿彌亭の會に出席してゐる。自負心の強い越人であるから、自分は自分一人で芭蕉を追憶しよう、嵐雪・桃隣主催の初月忌の會へ出る必要もないと考へてゐたかも知れない。追悼句も送らない、會へも出ないと云つて、師恩を忘れた行爲であると云ふのならば、浪化・史邦・北枝・桐葉・知足などはどうしたものか。彼等は生前芭蕉とは深い關係にある人達であるが、師の追悼集に句も送らなければ、京の會へも義仲寺の會へも出席してゐない。彼等も忘恩の徒と云は

なければならないがさうは思へない。當時の社會は交通機關も不便であつたし、俳人の道德も後人の考へるほど堅苦しいものではないやうである。彼等はいつか芭蕉をなつかしく思出してゐる。報恩的な集も出版してゐる。越人も頑固ではあるが、かゝる種類の一人かと考へる。

野水と芭蕉の關係もよく分らない。故ありて先師に遠ざかると云はれてゐるから、何か譯があつて離れる事になつたものと見えるが分らない。越人と同道して京に出で、路通を罵り、芭蕉の感情を害して氣拙くなつたものか、壺中の「弓」の尻押しをして遠去つたものか、何れも確證がない。芭蕉は門人の前で腹を立てるやうな人ではない。夜半頃駕籠に乘つて、大津の乙州亭へ歸つたなどといふ支考の說は信じられない（削かけの返事）。之は越人の云ふやうに、「たとひ門人道に違ひぬる事申すとも、和かに教訓せらるべし」（猪ノ早太）といふ方が眞である。勘當說は全然僞である。芭蕉は最後の旅行に野水の新宅を訪れて句作してゐるから何よりの證據である。野水も荷兮や越人のやうに古風を慕つてゐたらうから、師の流行には後れるし、句作も振はなくなつて、同門から疎んぜられる上に、町名主といふ役向きの仕事に追はれて忙しく、それに茶道に凝り出したとも云はれるから、そんなこんなで自然と芭蕉から離れて行つたのだらうと考へる。たゞし路通を惡くいふやうな人であるから、同門の惡口ぐらゐは云つたであらう。野水は芭蕉の流行には從はなかつたから、とかく噂の種には上つた人物だらうと想像される。

凡兆も芭蕉から遠ざかつた男であるが源因はよく分からない。越人は剛毅な男のやうに云つてゐる。猿蓑撰の時、選句に付て去來と論爭し、或は芭蕉の添削に不滿足であつたりした所から見ると、頑固な人物のやうに思はれる。猿蓑撰後烏ノ賦を作つて芭蕉に見せ、「をどりくどき、早物語の類に御座候」と云はれた事もあつた。荷兮・越人と親しく、猿蓑撰後あまり評判されなくなつた。普通には加賀の友人の罪に連座して入獄したため、世間に遠慮して身を退いたと云はれてゐるが、それは芭蕉生前か死後の事か明かでない。壺中の弓の尻押しは信ぜられない。自分の撰した猿蓑を人に惡く云はせるなど常識を外れた事である。猿蓑刊行後去來の名聲のみ上つて、自分は餘り評判されなくなつた恨を芭蕉へ持つて行くなどは考へられない。猿蓑以來凡兆の句は餘り他集へ見えなくなつたのは、他に源因があるのぢやなからうかと思ふ。罪に觸れたのは元祿六七年頃か。凡兆の傾向は去來や芭蕉とは違つて居るから、否一般の蕉門

とも違つてゐるから、芭蕉晩年の流行に從へず、野水・越人などと親しかつた所も、やはり當時の蕉風に不滿を持つてゐたらしく、句も時代後れとなり、振はなくなつて、同門から問題にされなくなつて衰へて了つたものだらう。寶永六年の「ねなし草」に、囚にありし時とあつて、「かかる身を虱のせむる五月かな」といふ句が出てゐるから、投獄された事は事實である。それや是れやが手傳つて、凡兆は芭蕉歿後ようやく世間から忘れられて行つたものであらう。許六からは好意を持たれたものらしい。許六に凡兆の追悼吟もあつた。勘當の門人の中に入れられなかつた事は幸であつた。

木因の勘當說は僞說であらう。併しその說が支考から出たといふ說はどうかと思ふ。木因は俳學のあつた人で、芭蕉は杭瀨川の翁と稱揚し、「蒜のまがきに蔦をながめて」の前句、「蔦のゐる花の賤屋とよめりけり」の附意に就て教を乞うた程であるから、門人としてではなく、むしろ先輩とか友人といふ地位に考へた人であつた。貞享元年秋大垣へ行つて木因の家に泊めて貰つたり、元祿二年秋奥の細道を終つて木因に逢ひ、船で送られた事もあるから、勘當などといふ說はうその皮であるが、猿蓑以來句も名も集にあまり見えなくなつた。之は純粹の芭蕉門人格でないからであらう。支考の中傷かどうか分からないと云つたのは、支考の芭蕉七回忌追善集なる「歸花集」（元祿十三年刊）の序を木因が書いたり、又は三十三回忌追善集「三千化」（享保十年刊）などにも出句して、芭蕉歿後は支考と親しくなつたやうに見えるが、例の支考の事だから前に木因を勘當の弟子と云ひふらして置きながら、何食はぬ顏で木因を利用したのかも知れないが、とにかく木因は支考に近附いて行つた。

路通の疎遠は荷兮・野水のやうに芭蕉に反抗したのではなく、自分の不德行爲によつて、遠ざからなければならなくなつたので罪は輕い。路通が芭蕉へ入門したのは、元祿元年芭蕉芳野行脚の歸途、近江の守山に於てであつた。道のほとりに和歌俳諧の短冊を賣つて居つた乞食に色々身の上を尋ねて見ると放蕩の結果だといふ。教へれば物になりさうな男であるから、芭蕉に拾はれたのである。其後江戸へ出て芭蕉庵の近くに住み、芭蕉の僞筆を賣り歩いてゐたので同門に顰蹙されたが、元祿三年冬膳所の曲翠を訪れ、役にも立たぬ事を云ひ爭つて、心細くなつたとあるから、何か曲翠に不德行爲を詰責されたのであらう。芭蕉の「住みつかぬ旅の心や置火燵」といふ句は、路通の手紙を見て同情したものであつた。猿蓑に、「いね〳〵と人にいは

れつ年の暮」といふ句があるが、之も其頃曲翠などからでも追拂はれた時の事であらう。去來の「旅寢論」に、

先年（元祿四年秋、野水・越人上京して、芭蕉の前で路通を罵つた時の事か）野水先師に語りて曰、近來、大津の連衆名護屋へ來りて、蕉門十七體の附句不殘傳授し侍るよしを申す。名護屋の連衆かつて信せず。若しかゝる事も侍るや。先師の曰、これ誠に途方もなき事也。先年加賀の門人何がしが許より、常に遠國に侍れば、親しき教を受くる事も叶はず。願くは附句の體書き記し侍るべきよしを望む。是がために附句の大數を書出し侍れども、如レ此記さばかへりて初心の迷あるべしと思ひとりて、終にその書を止む。さだめし反古の端を拾ひ見て、是を云ふなるべしと大笑ひしたまへり。思ふに此文をとゝのへ給ふは大津にての事也。路通久しくかしこに侍れば、その文を見てその旨を知らずして、みだりに遠境（長崎）の人に傳ふなるべし。云々

とある。十七體の附句論を書いたのは大津だと云ふから、元祿三年冬の事であらう。其頃芭蕉は大津・膳所などの門人の間を泊り歩いてゐたから、或は乙州の家にでも居て、附句ノ傳を書き、後に破つて了つたものを路通が拾つて寫し取り、長崎迄來て賣歩いたものであらう。路通を罵つたのは曲水ばかりではなかつた。正秀・乙州・李由なども彼が非行を責めて去來に評へた。三月二十七日附の去來の手紙（元祿七年か）に、

路通程の頴悟秀才、各樣より外には餘計には無之候。天晴芭蕉門の一人と存候。これ切りに御捨て被成候ては惜しき事に候。昔御拾ひ被成候御善心被思召出、先づ今度は御宥免被下候樣に各被仰合度、云々（芭蕉全傳）

とあつて、去來は寛大の處置を望んで居つた。越人は猪ノ早太に、

おもふに路通に惡名つけたるは却て貴房（支考）と許六なるべし。本朝文選列傳に、路通は輕薄不實にて師命に違ふと、いらざる事を板行にあらはし、路通も大に腹立ちて、彼の文選を絶板せしむ。後に返店文を削りて、風俗文選と題號を直したる事世に隱れなし。されば其頃は貴房も許六と共にをどりあひ、蕉門の先輩にいろ〳〵難をつけて云ひ貶したがる時分なれば、路通が事をもあしざまにふれ廻られしならん。……まして其頃（猿蓑撰の頃）路通が如きは長くらべする相手にはあらず。何の益ありて凡兆迄語らひて、路通を翁

へさゝへらるべきや。云々

と云つてゐる。本朝文選改號の問題は越人の云ふ通りで、路通の怒つたのは既に昔悪にも赦され、自分も前非を後悔した際であるから、かく迄舊悪を根にして譏らなくともよささうなものであるといふ腹があつたからであらうが、越人が路通如きは長くらべする相手ではないと威張つてゐるのは、例の人を眼下に見る悪い態度で、其實越人は猿蓑撰の頃は路通の行跡を悪んで切に路通を忌んでゐたので、路通と別れる時の句、「散る時の心やすさよ米嚢花（ゆしのはな）」の前書も別僧と改めて去來が出したほどであつた。猿蓑撰の秋越人が上京して、芭蕉に路通の悪口を云つたのも、前から路通を悪んでゐるからであつた。支考・許六ばかりが路通を悪ろく云つたのではない。長くらべする相手でなければ、路通が何をしようとも、我關せず焉でゐさうなものである。此點は越人の過言と思はれる。

路通の非行の一つとして還俗問題があつた。二月十八日附曲水宛の芭蕉の手紙に、

路通事は大坂にて還俗いたしたるもの推量致候。其志三年以前より見え來ることに候へば驚くにたらず候。とても西行・能因がまねは成申すまじく候。平生の人にて御座候。常の人常の事をなすに何の不審か可有御座也。於拙者は不通仕りまじく候。俗になりてなりとも、風雅のたすけになり候はんは、昔の乞食より勝可申候。

とある。路通の還俗は元祿五年か同七年か詳かでないが、此文意によると、還俗に就て何か曲水から憤つた手紙でもあつてその返事であらう。平生の人が平生の事をするのに何の怪しむべき事があらう。自分に於ては絶交はしないといふ意見、實に情理を盡したもので、この芭蕉の寛大な取扱に對して、門人も悪口を少し控へなければなるまい。路通も自分の罪を悔つたと見え芭蕉の生前三井寺の定光坊實永阿闍梨を介して詫を入れた。芭蕉が死ぬ時諸門人に遺言して、自分の亡き跡路通を見捨てないでくれ、前通り風交をつゞけてくれと言ひ殘した。路通此慈恩に深く感激して、元祿七年冬三井寺に於て芭蕉翁行狀記をつゞり、小沙彌謹書と署名した。恐らく佛門に歸依したものであらう。

やつがれは此三歳折々のたがために、翁心障り侍りて音信も遠ざかり侍りぬ。されど昔日の哀み深きにこそかへつて悪みも強からんと思ひ流して、やをら浮世にまかせ打暮らしぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心がかりなりとて、翁の方なだめまゐらせ、此度萬罪許し給へど

も、外の障りなど侍れば、表向きうときさまにて、それよりはやつがれ加賀、國へ旅立ちける。そこにも睦じき方ありて、日數經ぬ。此度翁遺言の次に、餘命頼なし、亡からん後路通が怠ゆめ〳〵恨なし。必ず親しみ給へ。その望おの〳〵聞きあへり。今更くやしさのみぞせんかたなき。云々

とある。この三歳といふと、元祿四年以來となるから、其頃から芭蕉も疎くなつたと見える。疎遠になつてゐる中に、大阪で還俗したものだらうが、曰人の諸生全傳によると、大阪たかさうの後家になつた事である。路通は相當に俳才もあり、學問もあつた男で、その點が芭蕉の同情を買ひ、彼の惡事非行も知つてゐながら、大目に見てゐたのであらう。去來も芭蕉の心事をよく理解してゐたから、いきり立つ近江の同門をなだめ、穩便にすませたかつたのであらう。路通は根から惡人ではなかつた。僞筆や傳書を賣歩く事は、食へないからやつた窮餘の策であつて、許せるだけは許してやつてよいと思ふ。支考のやうに平然と芭蕉の僞書を作り、僞說を流布して、酒色の肆に入るやうな男とは格段の相違である。惡人と云へば支考位圖々しい奴はあるまい。支考の行爲を咎めずして、路通の一小非行を問題にする者の考が分らない。越人もうぬぼれをやめて了へば支考から惡口も云はれまいし、許六も賢い男ならば越人から罵られもしなかつたらうと思はれる。

二、訓戒

芭蕉の訓戒は情誼的であつた。怒を含めて云ふのではなく、やさしい寓意が自然と門人の頭を下げさせるものであつた。例へば路通の奥州行を送り、「草枕まことの花見しても來よ」、支考の東行の餞別に、「此心推せよ花に五器一具」、許六の木曾路を經て、舊里に歸るを送り、「椎の花の心にも似よ木曾の旅」、酒堂の大阪行を送り、「湖水の磯を這出でたる田螺一疋、蘆間の蟹のはさみを恐れよ。牛にも馬にも踏まるゝ事なかれ。難波津や田螺の蓋も冬ごもり」などとその人々の性情によつて、奥床しい教訓を垂れてゐた。

人格

芭蕉は謹嚴な人であつた。よく貴人・長者に仕へて、禮讓を亂さなかつた。其角・嵐雪は若い時は道樂者で、俳情の外は芭蕉を避けて居つた。氣がつまつて面白くないからであると。か

ういふやうに芭蕉は門人に對しても儀容を崩さなかつた。其角の大酒を戒めた飲酒一枚起請といふ文が傳はつてゐる。

右飲酒一枚起請は尊朝親王御作の由承候。尤さる人の許に御眞筆にて掛物にして床にかゝり有之候。あまりあまり面白き御作故ちよと寫し來り候。貴丈常〻大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒は無用に存候。仍一句、

朝顔に我は食くふ男かな

如何、委しき事はやがて御目にかゝり萬々可申述候

とある。其角の大酒であつた事は、「十五から酒を飲み出て今日の月」、「大酒に起きてものうき袷哉」、「もどかしや雛に對して小盃」などとある句でも分るが、それがため母に非常な心配をかけ、母の歿後深く後悔したといふ事であつた。其角は豪放、芭蕉は閑寂、師弟の間に趣味も個性も甚しく違つてはゐたが、芭蕉の死ぬ間際紀州から驅け付けて側をはなれず看病した話は其情誼の美しさを物語つてゐる。或時其角は芭蕉と共に内藤露沾公の俳席に召された。芭蕉は露沾の煙草嫌ひを知つて、席を終る迄喫煙しなかつたので、其角問、俳諧は洒落・風流を本意とするもので、權威にも恐れず、高位にも屈すべきでないのに、今日露沾公の御席で煙草をお飲みにならないのは、諂ふやうで感服しないがどうかといふと、芭蕉云、汝の言は俳諧を辨へぬ者の言である。俳諧は小技であつても禮節を忘れるものではない。繁きを省いて風流と思ふは暗愚の俗である。今日露沾公の雅筵に煙草を用ひなかつたのは禮である。抑も自分如き乞食の徒が貴人の席近く召されて談笑を許されるのは望外の幸で、その恩惠に乘じて貴人の不快を犯す事は禮を知らぬ行である。自分は風雅の道に遊んでゐればこそ益〻禮節を重んずるのである。然るに之を阿諂の行爲といふは何事であるかと云つたので、其角深く慚愧し、冷汗を流したといふ逸話がある。

芭蕉の寂は彼が生活の信條であつた。簡素な生活は儉約のためではなく、俳人として實踐しなければならぬ人の道であつた。奈良茶三石の敎もそれがためであつた。奥羽行脚の歸途、金澤の小春亭に於て歡迎句會が催された。主人は遠來の芭蕉をねぎらふべく山海の珍味を供へてもてなした。會後芭蕉喜ばずして云ふやう、今夕の饗應心遣ひの程は有難いけれど、大名のお成りのやうで、風雅の寂がない。自分は江湖の漂客、或時は草深き野邊に假寢の夢を結ぶ事も

あるし、或時は茂つた木蔭に時雨を凌ぐ事もある男である。浮世の榮華などは考へてゐない。以後は必ず無益の饗應を止めて貰ひたいと云つたので、主人大に恥ぢ、次回よりは煎茶の外何の用意もなかつた。更闌なる頃芭蕉は冷飯を命じ、一二碗の茶漬をサラ〳〵と食つて、風雅はかういふやうにありたい、すべて酒食の奢に時間を費し、俳諧の情味を忘れるのは、遊里・戯場の數寄で、風雅の席には無用であると云つて、「白露のさびしき味を忘るゝな」といふ一句を示したといふ逸話がある。

芭蕉は水鶏笛・鹿笛・時鳥笛を好んだ。是等の笛は殺生の道具ではあるが、ただ吹くだけは面白いと云つた。一笑宛の手紙によると、旅行先の國へ行つて水鶏笛を吹いて聞かせると、里の女などは自分を藝人のやうに思つて面白がるからをかしい。鹿笛も木曾から貰つた。時鳥笛があつたら欲しいものである。望の物を相應出すから細工人に作らせて貰ひたい。初雁の聲、水鶏の叩く音なども歌にも句にも作る人はあるが、その人々が是等のものを竿で捕つたり、網にかけたりすると、口と心と相違して嘘つきとなり、誠の風人から見るとあはれな事である。殺さない迄も、雲を飛ぶ鳥、地を走る獸を捕へて、小き籠に入れて樂しむ人は、牢番と同じやうな者で、之は二兩の駒鳥である、之は五兩の鶯であるなどと云つて、摺餌に小袖の肌押拔ぎ高祿の人にも淺ましい事をする者が武士の中にもある。彼等には開レ籠放二白一といふ詩意でも教へてやりたいものである。伊賀の家中にもそんな人がゐるから、土芳にも度々云つてやつた。武士は殺生するものだと云ふ人もあるが、何も魚鳥を捕る事が腕だめしになるわけでもあるまい。心が卑しくていけない。それ〳〵の獵師があるから、それから買つて料理するならば罪にもなるまいなどと云つてゐる。芭蕉の愛情の鳥獸に迄及んでゐる例は句にも往々見る所である。如何にも詩人らしい氣持の表れた教でうれしい。土芳は伊賀藤堂家の家臣で、小鳥が好きだつたので、芭蕉から教訓されたのであらう。芭蕉の貰つた水鶏笛には二種あつた。一は近江の遊刀の餞別の具で、伊賀の配力（杉野勘兵衛）に與へたもの、直徑一寸三分の青磁色の陶器、靈極といふ銘がある。他は一笑から貰つたもの、銅製で直徑七分位の丸いもの、之は土芳に與へたものであらう。後上野町の川口家に傳はり、明治になつて藤堂家へ寄贈したが、大正十二年の關東大震災の時燒けて了つたさうである。

世に三等の文といふのが傳へられた。之は芭蕉が膳所の曲翠に與へた手紙の教であつた。寛

政十年蝶夢之を註し梓行した。三等とは三種類といふ意味で、世上の俳人に三種の人があるといふ事である。即ち一は點取俳人、二は富者の遊俳、三は正風の本流である。芭蕉の見解によると、一は點取に晝夜を盡し、勝負を爭ふ者がある。是等は風雅のうろたへ者であるが、點者妻子の腹を肥やし、店主の金箱を賑はすものであるから、惡い事をするよりもましである。二は其身富貴にして、目に立つ慰は世上を憚り、日夜二卷・三卷の點取り、勝つた者も誇らず、負けたものも怒らず、いざま一卷などと又取りかゝり、線香五分の間に（速吟する事）工夫をめぐらし、事終つて即點（其場で早速點を掛ける）などと興ずる者もあるが、是等は少年の讀カルタのやうなものであるが、料理を作り、酒を飽迄飲ませ、貧者を助け、點者（點をかける人宗匠）を肥やすから、又道の建立の一助とならう。最後は志をつとめ、情を慰さめ、他の是非に關せず、誠の道に入らうと思つて、遙に定家の骨を探り、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入らうとするもので、都鄙を數へて僅に十人とは居るまい。貴丈も此十指の中の一人であらうから、自重して修行しなさいといふ文意である。

以上によると芭蕉は點取俳諧を卑んで居つた。併し芭蕉にも點式（點のかけ方）が殘つてゐるから、在京時代か、或は江戸下り後、一時點者生活をして居つた事もあらうが、芭蕉庵入庵以來門人の扶持を受けるやうになつてからは止めて了つたものと見える。蕉門でも其角・嵐雪は業俳であつた。芭蕉の從弟の天野桃隣も點者を業とした。桃隣は伊賀の產で、元祿四年江戸に下り、芭蕉に師事した。芭蕉も可愛い從弟の事であるから、目を掛けて教へてゐた。それがため彼は、元祿六七年頃になると一かどの俳諧師として頭角を著すやうになつた。子珊の別座敷（元祿七年刊）や野坡の炭俵（同年刊）が上方筋で評判となり、此兩集に桃隣が手柄を見せるやうになつたのも、全く芭蕉の恩であつた。然るに桃隣は自分の俳諧が世上に持囃されるやうになると、うぬぼれて來たと見え、芭蕉杉風宛の手紙に「少しは桃隣にも師恩貴きすべをわきまへ候へと御申成るべく候。桃隣俳諧俄に僭上候と專沙汰にて候。云々」と戒めてゐる。又桃隣は前句附の點者もして居つた。前句附とは宗匠が前句（十四字）を出し、それに金錢を取つて十七字の句を幾つか附けさせ、秀逸なものには景品を與へるといふ極めて卑俗な雜俳で、元祿頃盛に流行したのである。五句附も前句附の一種で、前句に五ッ句を附けるから云つたのである。前句附の變形に冠附・三笠附なども行はれ、博奕に類する事になつたので、しば〳〵そ

の筋の禁止を受け、宗匠は所罰されたのであつた。桃隣が前句附の點者であつた所から、芭蕉も心配して、猪兵衛に手紙を寄せ、

桃隣如何相勤め候哉。暑氣の節短夜と云ひ、會も心のまゝには成り申すまじく候。杉風・子珊心にたがはざる樣に實を御つとめ候へと御申可被成候。京都俳諧師五句付候事に付閉門、俳諧沙汰ひつしりと蛭に鹽かけたるやうに候。然に段々拙者口から申上げさせ候も氣の毒故不具候。か樣の所實を不勤故と合點を致し、むざとしたる出合・會等心得可有旨、桃隣へ御物語可被成候。云々

と注意を依頼してゐる。芭蕉は前句附の點取を非常に卑んで、許六への手紙に、「五句附點取脾の臓つかみ破りたらん後、初めて俳諧はやり可申候。云々」と云つてゐるが、桃隣はそれを以て世過ぎの種にしてゐるから、芭蕉も大目に見て堪忍したのであらう。江戸へ下つた當時は桃隣も貧乏であつたが、三年經つと相應な金持になつて、飢ゑず寒からず、立つて行けるやうになつた。之も芭蕉の恩惠であるから、潛上したといふ噂を聞くと、芭蕉の怒るのも尤もな話である。芭蕉歿後直に師の墓を訪れたり、追悼會を東山で催したり、或は奥の細道を企てたりしたのは、師恩のありがたさが身に泌みたからである。芭蕉の教訓は慈愛のそれであつた。

三、尊皇・敬神敬佛

古來俳句は神社・佛閣と關係が深かつた。之は室町時代の連歌が會席を寺社に求めたり、或は出陣凱旋の祝、病氣平癒の感謝等を神佛に捧げたりした遺習に基くもので、伊勢の大神宮を始め奉り、北野・住吉・日枝・熊野・石山・三島などの寺社は、連歌の立願法樂の場所として有名であつた。從つて連歌師は行脚の途次必ず地方地方の寺社に參拜し句作するを例とした。彼等は歌詞を以て神佛の御心を和げようとしたのである。芭蕉の寺社參拜は多くの場合個人的のものであつたが、やはり是等連歌師の吟行を眞似たものであつた。芭蕉には皇祖・皇宗の御遺德を仰ぎ奉る國粹觀念が深かつたのである。名臣・賢人・高僧の遺業を慕ふ心も、彼が寂栞の國家主義に基く衷心の欲求であつた。越人の「鵲尾冠」に、

往昔芭蕉庵に旅寢せし比(元祿元年冬)、一日其角・嵐雪・擧白・宗和、其外二人三人吸筒

を袖にして來り……唐土の聖の御代賢き臣など數ふるに、我も傍に侍りて、それは知らぬ事也。我日の本にはなき事かはと、うめき出れば、翁の、いなや。我國の賢き君、まめなる臣、他の國になじかは劣るべき。さらば何のよしあしは知らず。いひ出で給へと、各々ものし給へる發句どもは、この始めに書付くる所也。云々

とある。此言を以てしても、芭蕉の如何に尊皇の念に厚く、國家觀念の強かつた事が知れようと思ふ。二三の例を云ふと、仁德天皇の御德をたゝへ、

叡慮にて賑ふ民の庭竈

「甲子吟行」、ひとり芳野の奥にたどり、西行上人の舊蹟を尋ねた條下に、

山を登り坂を下るに、秋の日已に斜になれば、名ある所々見殘して、後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何を忍草

名ある所々を見殘しても、後醍醐天皇の御陵だけは參拜する、其尊皇の精神がありがたいのである。又北條泰時の仁愛を先とし、私慾を去つた政道に感じて、

明月の出づるや五十一ヶ條

と稱揚し、正成の像に、鐵肝石心此人之情と題して、

なでし子にかゝる涙や楠の露

と泣いてゐる。

芭蕉は伊勢の大神宮にしば〳〵參拜した。士朗の枇杷園隨筆に、鶯亭夜話と註して、

貞享五とせ如月の未伊勢に詣づ。此御帝の土をふむ事今度五度に及び侍りぬ。云々

とあるが、五度は詳かでない。參宮の書に表れたものには、貞享元年八月と同五年二月、元祿二年九月とあるだけであるが、他に延寶年間父の病を聞いて歸國した時、或は伊賀仕官時代に行つたものかそれは分らない。貞享元年の甲子吟行に、

暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の鳥居の陰ほのぐらく、御燈所々に見えて、また上もなき峯の松風、身にしむばかり深き心を起して、

三十日月なし千とせの松をだく嵐

腰間に寸鐵を帶びず、襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に非

て髪なし。我僧にあらずといへども、髪なき者は浮屠の屬にたぐへて、神前に入るを許さず。

とある。自分は僧ではないが、頭を丸めてゐると、僧と思はれて神前に入れてくれない。芭蕉の殘念がつた氣持はよく出てゐる。貞享五年の笈の小文にも、伊勢山田と前書して、

何の木の花ともしらず匂ひかな

裸にはまだ衣更着の嵐かな

とあつて、外宮參詣の句がある。風國の泊船集に、「二月十七日神路山を出るとて、西行の涙を慕ひ、增資の信を悲しむ。」とあるが、之は十八日に親の年忌があるので、伊賀へ歸る時の事で十七日の句ではない。杉風宛の手紙によると、二月四日參宮の時の句である。前句は西行の「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」の歌に基いたもの、後句は增賀聖の神宮を崇敬した心を慕つて、聖の名聞嫌を彰したものである。前の鶯亭夜話に、「二月の末伊勢に詣づ。」とあるのも誤である。此二句の次に、神垣の内に梅が一本もないのはどういふ譯であるかと神主に尋ねたら、たゞ自然と無くなつたので、以前は子良の館の後に一本あつたさうだと云つたといふ事を記して、

御子良子（神宮に奉仕する少女）の一もとゆかし櫻の花

とする「赤丹子」によると、昔からこゝには連俳の達人多く句をとゞめたけれど、終に櫻の事を知らなかつた。自分だけ之を聞き出したのはうれしいと云つたとある。芭蕉の敬虔ななつかしい心は是等の句によつてよく知られる。次に奥の細道の末に、

長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

とあつて、九月六日大垣の如行の家を出立し、伊勢の御遷宮を拜みに行く事が書いてある。之は木因の舟に乘つて揖斐川を下り、内宮の御遷宮を拜觀しようとした事で、蛤の句は木因等と別れる時に作つた句であらう。内宮へ來て見ると、既に御遷宮は終つたので、十三日外宮の御遷宮を拜む事にした。九月十五日附、木因宛の手紙によると、木因の參宮を心待に待つたけれど、音沙汰がなかつたのは殘念であつたと云つて、

拙者も寛々遷宮奉拜大悅に存候。此狀御屆被成可被下候。方々かけまはり申候はゞ、又々

美濃路へ出申候間、其節萬々可得御意候。此地へ江戸才丸、京信德、拙者門人共十人斗參宮おびただしき連衆出合ながら、騷しき折節には會もしまり不申、神樂拜みに一日寄合、さのみ笑ひてちり〴〵になり申候。

とある。之によると才丸、信德もやつて來て、顆しい人數になつたので、會も開かないで、神樂を見て笑つて散々になつたといふから、なか〳〵の賑ひであつたと見える。

芭蕉は熱田神宮へ二度ほど參詣した。併し熱田へ來れば鳴海の知足亭へ寄るし、名古屋へも行けるから、參宮は其外にもあつたかと思ふ。貞享元年十月の熱田入りは桑名から船で來たので、其時は神宮はひどく荒れて居つた。甲子吟行に、

熱田に詣づ。社頭大にあれ、築地は倒れて草むらにかくる。かしこに繩を張りて、小社の跡をしるし、爰に石を据ゑて、其神と名乘る。蓬しのぶ心のまゝに生ひたるぞなか〳〵に目出度きよりも心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅買ふやどり哉

とある。此句は神前の茶店にての吟であつた。次は同四年十一月、此時は宮も立派に御修復が出來て、清淨の地となつた。典の小文に、熱田御修復と題し、

磨直す鏡す清し雪の花

とある。御神體が鏡であるから雪に喩へたのである。

芭蕉が行脚の途次參詣した神社佛閣はかなり多かつたやうだが、次にその主なるものに就て云ふと、近畿地方では伏見の西岸寺、大和の當麻寺、奈良の二月堂、春日神社、興福寺、招提寺、葛城明神、紀伊の高野山、當麻寺、三井寺、東海地方では伊賀の天滿宮、新大佛寺、桑名の本當寺、熱田の笠寺、三河の鳳來寺、東山地方では信濃の善光寺、奥羽地方では下野の室の八島神社、日光山、陸前の鹽竈神社、瑞巖寺、陸中の中尊寺、立石寺、羽後の羽黑山、加賀の那谷ノ觀音、全昌寺、越前の天龍寺、永平寺、氣比ノ明神等があつた。

先づ伏見の西岸寺は天正年中岸譽の開基で、淨土宗、三代目寶譽上人如羊和尚と云つて俳名任口、芭蕉の友人である。離談集に、「大方の月をも愛でし七十二」といふ句が見える。芭蕉が西岸寺に行つたのは貞享二年の春で、伏見の桃の雫せよと云つて、師の有難き敎化を桃の雫に喩へてゐる。大和の當麻寺は一名禪林院と云ひ、用明天皇第四皇子麻呂子親王の御建立、二上

山の下まりこ山の麓にある。本尊は觀音で、本堂の前に大きな松があり、根が南北に伸びてゐると云。申子吟行に、

二上山當麻寺に詣で、庭上の松を見るに、凡千とせも經たるならん、大き手をかくすともいふべけん。かれ非情といへども、佛緣にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるぞ幸にして尊し。

僧朝顏いく死にかへる法の松

とある。奈良の二月堂、本名羂索院。大佛殿東北四町に在る。東大寺二世實忠開基。治承の兵火を免れ、寛文七年回祿、同九年再建。西面して高地に佳り佳景、北に長廊を架する。行法二月朔日から七日に至る。堂前の若狹ノ國遠敷大明神から觀音に奉つたと傳へられる石井の水を硯に汲み、靈符を浸す行法である。之を二月堂の水取と云ふ。貞享二年二月芭蕉こゝに至り、曉方の式の嚴肅に感じ、こもりの僧の咨の音といふ一句を殘してゐる。春日神社奈良の春日山の下に在る。武甕槌ノ命、齋王ノ命、天兒屋根ノ命、姫大神の四柱を祭る。藤原氏の氏神で、興福寺の鎭守。現在の殿宇は慶長十七年修造。鹿で有名な社である。笈の小文貞享五年夏の條下に、「灌佛の日（四月八日）は奈良にて爰かして詣で侍るに、云々。」とあつて、「灌佛の日に生れあふ鹿子哉」とある。恐らく春日神社・興福寺・東大寺など參拜した事であらう。興福寺の佛生會は有名である。佛の生れた日に鹿が子を產んだのを見て面白く思つた吟である。大和の招提寺、聖武天皇天平寶字年中建立、鑑眞和尙開基、鑑眞は唐の揚州の人、淳于髡の後裔、唐の天寶年中日本の僧と共に渡日し、途中荒波に逢ひ、日南ノ國に漂流、暑毒眼に入りて盲目となる。「笈の小文」に、

招提寺鑑眞和尙來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目のうち鹽風吹入りて、終に御目盲させ給ふ。尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはばや

支考の笈日記に、「西大寺に詣して」と前書し、青葉してとあるが、和州巡覽記によると、招提寺は菅原寺の東で、西大寺へ二十五町、寺門廣く、諸堂多しとあるから、西大寺參詣はどうかと思ふ。葛城明神、葛城は大和の西方に聳える山で、古來山伏の靈場であつた。その麓に神社がある。一言主ノ神を祭る。「奥儀抄」に、昔大和に役ノ行者といふ仙人があつて、葛城山と芳野山

の間に橋を渡さうと思つて、一言主といふ神に願つた所、一夜の間に向ふの山とこちらの山に石橋を架け渡したが、此神は容貌の醜い神であつたので、夜は工事をすゝめるが晝は休んでゐるため、容易に仕事が捗らない。そこで行者ははかが行かないから、晝もやつてくれとせがんだ。云々とある。貞享五年春の芳野行脚の時、芭蕉はその麓を通つて、かゝる故事を思出し、「なほ見たし花に明け行く神の顏」と云つて、一言主ノ神にやさしく、なつかしく呼びかけてゐる。紀伊の高野山、金剛寺と云つて、眞言宗の大刹。僧空海弘仁七年の創立。笈ノ小文に、高野と題し、「父母のしきりに戀し雉子の聲」とある。枇杷園隨筆に、秋擧夜話と註し、

高野の奥にのぼれば、靈場盛にして、法の燈消ゆる時なく、坊舍地をしめて佛閣甍をならべ、一卯頓成の春の花は寂寞の霞の空に匂ひて覺え、猿の聲鳥の啼くにも腸を破るばかりにて、御廟を心靜に拜み、骨堂のあたりに彳みて、倩思ふやうあり。此所は多くの人の形見の集れる所にして、わが先祖の鬢髮をはじめなつかしきかぎりの白骨も、此内に思ひ籠めつれと袂もせきあへず。そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

とあるが、此記事は頗る疑はしい。高野山に故主蟬吟の遺髮を納めた事は事實であらうが、そこに芭蕉の先祖の鬢髮や父母の骨があるとは信じられない。此句は行基の作と傳へられる「山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」といふ歌によつて作られたもので、雉子と山鳥を置き換へたものに過ぎない。貞享五年頃は芭蕉の父母は既に死んゐたらうが、高野山へ來て古歌を思出し、父母が戀しいと云つた迄であらう。攝津の須磨寺、敦盛の墓のある寺で、青葉の笛其他の什物がある。上野山福祥寺と號し、光孝天皇仁和二年文鏡上人に勅して寶殿を營ませたと舊記にある。觀世音を祀る。貞享五年夏、芳野行脚から奈良を經て、須磨、明石に遊んだ時、須磨寺一見、「須磨寺や吹かぬ笛きく木下闇」といふ句がある。芭蕉は左思の招隱詩、「何事レ待ニ肅歌一、灌木自悲吟」と云つたやうな心を寄せて、敦盛の死を悲んだのであらう。近江の三井寺、長等山園城寺と云。近江志賀郡に在る。天台宗。京の延暦寺と並稱される名刹であつた。天智天皇の八年、第五子大友ノ皇子の御創立にかゝる。治承の亂に灰燼に歸したが、後美々しく造營せられ、寺門の繁榮ます〳〵熾になつた。桃隣の陸奥衞に、「蛤のふたみに別れ行く秋ぞと云ひ捨てて、伊勢に殘暑を凌ぎ、又湖水に立歸り、名月の夜は三井寺の門を

たいき、云々」とあるから、元祿三年の秋は三井寺の月を見たものか。支考の「笈日記」によると芭蕉に待宵名月、十六夜の月見があつて、名月の夜は「三井寺の門叩かばや今日の月」といふ句を作つたらしいが、その月見は粟津の無名庵であつたから、ただ希望だけで、實際三井寺へ行つたものではないやうである。十六夜の月見は船を堅田の浦に泛べて、浮御堂に遊吟し、「鎖あけて月さし入れよ浮見堂」といふ句を作つてゐる。浮御堂は志賀郡堅田町にあつて、禪宗、京の大德寺の末寺、海門山滿月寺と云ふ。本尊阿彌陀佛。一條天皇頃横川の源信僧都開基。

東海地方の寺社では伊賀の天滿宮、平樂寺（萬福寺）の伽藍神である。萬治三年藤堂家にて宮を上野町農人町に移し、社田を寄附し、上野町の鎭守とする。寛文十二年正月芭蕉は貝おほひといふ三十番の句合を奉納した。貝おほひの序に、

神樂の發句を卷軸に置きぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小うたにも予がこゝろざす所の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、當所あまみつおほん神のみやしろのたむけぐさとなしぬ。

とある。貝おほひの遊蕩的な句合である事は前に述べたが、かゝる句合を神前に捧げるなど、

如何に歌に和ぐ神心であると云つても、御神は苦笑される事であらう。新大佛寺、伊賀ノ國阿波ノ庄に在る。護峰山新大佛寺と云。東大寺の俊乘坊重源建立。俊乘坊は仁安年中入宋し、天台山に阿羅漢を拜み、歸朝後治承四年東大寺炎上、朝廷重源に勅して再建させた。「笈の小文」に、

伊賀の國阿波の庄といふ所に、俊乘上人の舊跡あり。護峰山新大佛寺とかやいふ。名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舍は絶えて田畑と名のかはり、丈六の尊像は苔の緣に埋みて、御くしのみ現然と拜まれさせ給ふに、上人の御影はいまだまつたくおはしまし侍るぞ、其代の名殘うたがふ所なく、涙こぼるゝばかり也。石の蓮臺獅子の座などは蓬葺の上に堆く、双林の枯れたる跡もまのあたりにこそ覺えられけれ。

丈六に陽炎高し石の上

とあるから芭蕉時代には既に荒廢久しきに渡つたものと見える。此丈六の尊像は重源勅命を奉じて、宋の陳和卿をして佛頭を鑄せしめ、首尾三十餘日、冶鑄十四度に及んだものであると傳へられる。伊勢の本當寺、桑名寺町に在る。京東本願寺輪番町桑名御坊と云。初め教如上人の息女長姫尼となり壽量院と云つたのを住職とした。寺中三ヶ寺、末寺二百餘、尾濃勢に散在す

る名刹であつた。貞享四年冬の旅に、

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

と謎のやうな句を作つてゐる。尾張の笠寺、天林山笠覆寺と云。昔は尾張星崎の庄笠寺村にあつたが、今は名古屋市南區笠寺町にある。眞言宗。本尊は十一面觀音、尾張四觀音の一である。善光上人開基。寺記によると、聖武天皇の御宇善光上人靈木を得、熱田明神の神勅によつて本尊を彫刻した。初は小松寺と云つて勅願所であつたが、中古兵火のため諸堂滅び、靈像空しく路邊に捨てられるに至つた。こゝに鳴海の長者の侍女に美人あり、深く觀音を尊信し、歩を運ぶ事數月であつた。或時村雨に逢ひ、靈像の雨水に浸せるを見て之を悲しみ、自らかづける笠を取つて像に着せた。たま〳〵其頃都より中將兼平といふ人東へ下向し、侍女を見て戀慕し長者に乞うて都へ伴ひ奥方とした。其後又此地に下り、伽藍を營み、尊像を安置した。そは醍醐天皇延長八年の頃であつた。かゝる緣起により、本像は今なほ笠を被つてゐられるので、世に笠寺と云はれたと云。芭蕉は此笠寺に歌仙一卷を奉納した。貞享四年、知足の日記「合歡のいびき」に、

十一月十七日、晴天、笠寺奉納はいかい。今日私宅にて桃青翁と共に連衆七人にてする。

とある。「千鳥掛」によると、芭蕉は發句だけで、あとは知足以下五人で附けてゐる。連衆七人とは桃青・知足・如風・重辰・安信・自笑・業言である。なほ千代倉家の手紙によると、

この寺の緣起人の語るを聞き侍りて

かさ寺やもらぬ岩屋もはるの雨　武城江東散人芭蕉桃青

笠寺の發句度々被仰候故、此度進覽候。よきやうに清書被成奉納可被成候。委曲夏中可得御意候。以上

とある。是等に就て考へると、笠寺の句は春に芭蕉が知足へ送つたもので、それを十一月知足亭へ來た時、立句として皆して作つたものと見える。三河の鳳來寺、煙巖山鳳來寺と云。三河設人樂郡門谷村の山頭に在る。天台、眞言の二派に分かれる。推古天皇の勅願で、利修仙人の開創である。本尊藥師佛。別當職天台學頭松高院。山内堂塔、伽藍が多い。芭蕉の參詣したのは元格祿四年冬で、熱田から江戸へ赴く途中であつた。「笈日記」に、鳳來寺に參籠してと前書し、「木枯

に岩吹きとがる杉間かな」、「夜着ひとつ祈り出して旅寢哉」の二句を記す。夜着一つの句は、桃先の「茶のさうし」に、「三河の國鳳來寺に詣る。道すがら例の病起りて、麓の宿に一夜あかすいとて」と前書がある。麓の宿とは鳳來寺門前門谷村で、旅舍が多かつた。芭蕉はその村に泊つてようやく夜着を一つ見付けた事であらう。

東山地方では信濃の善光寺、長野市に在る。皇極天皇の勅願で、本田善光創立。舊記によると、釋尊一光三尊の阿彌陀如來の像を持つて居つた。後一千餘年を經て百濟に渡り、聖明王の代になつて即ち欽明天皇十三年に日本に渡つた。然るに神佛の爭によつて佛像は難波の堀江に遺棄された。爰に聖武天皇の頃伊那郡小泉庄妹井郷に善光なる者があつて、或時靈異なる公卿に逢ひ、彼の如來を水落郡に移す事を告げられ、今の水內郡に移し奉つた。云々とある。今は天台、淨土の僧尼によつて奉仕されてゐる。芭蕉が善光寺へ參詣したのは元祿元年八月姥捨の月見の歸途であつた。更科紀行に「月影や四門四宗もたゞ一つ」といふ句がある。

奥羽地方では先づ下野の室の八嶋、大神神社である。所在地は下都賀郡國府村字惣社。國府村とあるから昔は下野の國府のあつた所だらうし、惣社といふと下野一圓の神社を取締まる社

のあつた地であらうから、昔の神社はなか〳〵權力のあつた社だつたと見える。今の國府村は田畠ばかりで、寂しい田舍であつた。壬生、栃木間の乘合自動車で行くと、社の森のすぐ側で車をとめてくれる。そこに古い石が立つて、中央に大神神社、右に弐內十一社、左に室ノ八島とある。社殿は地を盛上げたやうなもので、至極質素ださうだ。奥の細道に、

室の八嶋に詣づ。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申して富士一體也。無戸室に入りて燒け給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより、室の八嶋と申す。又煙を讀み習はし侍るもこの謂也。將このしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世に傳ふ事も侍りし。

とあるが、社家の說によると、室は神殿の義、八島は此附近に洲が多く、それが島のやうに見えるから云つたので、木花開耶姫の傳說に關係なく、ただ神社の在る地勢から名付けられたのだらうといふ。歌に煙を讀んだのも無戸室の煙から來たのではなく、附近の野中に淸水が湧出して、それから立ち騰る水蒸氣が煙のやうに見えた所から詠んだのであらう。このしろの傳說は昔有馬の王子といふ人が零落れて、下野の五萬長者といふ金持の厄介になり、長者の一人娘

と狎れて懐姙させた。その娘はかねて常陸、國司に嫁すべき約束があつたので、長者は佯つて娘を死んだ事にし、棺の中にこのしろを入れて燒かせた。このしろを燒く匂が人を燒く匂に似てゐるからであると云(慈元抄)。つないといふ魚をこのしろと呼ぶやうになつたのは、「あづま路の室のやしまに立つ煙たが子の代につなし燒くらん」といふ歌に基いたのであると。併し之は一說によると、此地方でこのしろを食べないのは眞宗坊主の宣傳だらうとある。それは室の明神の東、大光寺村に親鸞上人が住まはれたといふからであつた。日光山、下野國日光町に在る。二荒神社。延曆の初年勝道上人の創立。もと補陀落山と云つたが、補陀落、二荒和訓の似てゐる所から、後に二荒と書き、それを又日光と改める。奥の細道に、

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四海安堵の栖隱なり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

とあるが、空海の開基ではない。大師の德をたゝへて感謝の念をこめられた所に、芭蕉の敬虔な氣持はよく出てゐる。高久村角左衞門の家藏の眞跡に、「あな尊うと木の下闇も日の光」とあるといふから、青葉若葉は再案だらうとある。八幡宮、那須神社、黑羽町字南金丸に在る。社記によると、本社は仁德天皇の御宇下野の國造奈良別命、祈願のために金瓊を此地に埋め、上に一社を建立した。故にこゝを金丸村と云つた。元曆元年那須、與一八島の戰に、扇の的を射た時、本社八幡宮を念じて功名を立てたから、文治三年朝賽として土佐杉を以て再築し、太刀一振と乙連澤村を寄進せられ、代々奈須家の鎭守となつた。云々とある。こゝは芭蕉が黑羽の館代淨法寺圖書を訪れた時、附近の犬追物の跡、玉藻前の古墳(篠原神社卽ち玉藻稻荷)を尋ねた次手に參詣した所であつた。奥の細道に、「與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。云々」とあつて、武將の敬神精神を讃歎してゐる。雲岸寺、芭蕉は佛頂和尙山居の跡を見るために行つたので、直接に立寄つたわけではないが、雲岸寺(雲岩寺正しと)は黑羽より東に三里ほど行つた須加川村字雲岩寺にある。臨濟宗で、妙心寺派所屬の寺であつた。開基は崇德天皇頃、後後嵯峨帝第三皇子佛國國師によつて再興されたが、秀吉の時那須資晴の亂に依つて燒拂ひ、寺領を歿收した。

徳川時代に至り妙徳禪師復興し、家光より寺領百五十石を寄せられた。地形は今なほ廣大で、昔日の俤を存してゐると云。陸前の鹽竈神社、宮城郡鹽竈町の西北陵上にある。祭神は味耕高彦根ノ命。六所明神とも呼ばれ、奥州一の宮である。延喜式に、鹽竈神料一萬束とあるから、往古は宏大な神社であつた。後やうやく頽破したので、伊達氏之を修造し、彩椽きらびやかな莊嚴な宮殿とした。奥の細道に、「かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、我國の風俗なれといと貴けれ。云々」とある。芭蕉の國粹的な敬神觀念がうれしい。瑞巖寺、宮城郡松島洲崎町を門前西北に入りし所に在る。天長五年慈覺大師草創。はじめ天台宗で松島寺と云つたが、北條時頼の時、法心和尚臨濟宗に改め、圓福寺と改名した。後久しく荒廢に歸したが、慶長十年伊達政宗修造し、攝津勝尾寺の名僧雲居禪師を招請して住職とした。青龍山瑞巖圓福寺を略して瑞巖寺とする。今は妙心寺の末寺。伊達家の宗廟がある。奥の細道に、

十一日、瑞岩寺に詣。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の德化に依て、七堂甍改まりて、金壁莊嚴光を輝し、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

とある。法心は常陸ノ國眞壁郡の人、俗名を眞壁ノ平四郎と云。少時武家に仕へる。或時主人より木履を以て擲たれ、恚怨して僧となり、後宋に入り、徑山寺の佛鑑禪師に受法し、歸朝後瑞巖寺を開く。雲居は土佐の人、塙直之を友とし、奇行に富む。七人の盜賊を佛弟子とした逸話がある。正宗の信厚き人であつた。見佛上人は平安朝の末頃の人、撰集抄に、「上の弓張の十日ほどかきけし失せ給ひにしかば、云々」とあつて、月初め十日ほどは能登の岩屋に住み、月半以後松島の雄島に住むといふ變つた人であつた。西行が松島へ行つた時は留守で、逢へなかつたといふ話がある。中尊寺、陸中磐井郡平泉村の丘陵にある。天台宗。長治年中藤原清衡創立。内に經堂、光堂がある。經堂は一切經を藏し、光堂は清衡、基衡、秀衡の像を殘し、華麗の建築人目を驚かした。奥の細道に、

兼て耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光寺は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍みて、甍を覆うて風雨を凌ぎ、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り殘してや光寺

とある。國守の造修であらう。羽前の立石寺、東村山郡河原町に在る。慈覺大師開基、貞觀年中である。天台宗。俗に山寺と云。千五百石を領し、武州東叡山に屬する。奥の細道に、

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也。一見すべきよしを人々のすゝむるに依りて、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿借り置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這うて佛閣を拜し、佳景寂莫として心すみ行くのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

とある。幽邊な場所と見える。羽前の羽黑山、東田川郡手向村に在る。山伏の靈場として古來有名な山であつた。祭神倉稲魂神命。天台宗。江戸東叡山の管下。能除大師開基。月山、湯殿山を合せて三山といふ。羽黑山は秋田縣寄り、月山、湯殿山は山形縣寄りにある。月山は羽黑湯殿の奥の院である。湯殿山は大日の靈場で、役ゞ行者開基と傳へられる。なほ詳しい記事に就ては東水の「三山雅集」を見るがよい。芭蕉の羽黑入りは國司の左吉の案内であつた。別當代の會覺阿闍梨は之を南谷の別院に宿泊させ、憐愍の情濃やかに持成してくれた。芭蕉はこゝで内にあつては天宥法印の追悼文を起草したり、會覺・左右などと俳諧を興行したり、三山順禮の句を短冊に書いたり、外に出ては木綿しめを附け、頭に寶冠を包んで月山に登り、或は湯殿へ下りて、月山といふ刀鍛冶の小屋を尋ね、雪中の櫻花を見て奇異に感じたが、すべて山中の微細、行者の法式として他言を禁じられて居たから、細かに記さなかつた。

涼しさやほの三日月の羽黑山

雲の峯いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

などの句があつた。羽後の蚶滿寺、由利郡象潟に在る。芭蕉が象潟へ行つた時立寄つた寺である。古くは眞言宗だつたが、今禪宗になつた。古來干滿寺、干滿珠寺、干滿種寺などと云はれた。一説に此寺は蚶潟のほとりに在るから蚶滿寺と云はれたとか、或はもと干滿寺と號したのを後に干滿と書き改め、終に神功皇后三韓御征伐の時、海神から潮干る珠潮滿つ珠を貰はれた故事に附會し、干滿の下に珠の字を加へて寺號としたなどの説があつた。又梵字のカンマンを

寺號としたといふ說もある。蚶滿を干滿とし、神功皇后の故事を持つて來て、干滿珠寺として御陵を置くといふ說は信じられない。寺內に能因法師腰掛石だの、西行櫻があるなども當にならない。とにかく附近の景色は勝れたもので、芭蕉は「松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。」と云つてゐるが、それは象潟に昔の俤なく、荒れ果てゝ寂しいものになつてゐたからであらう。「寂しさに悲を加へて、地勢魂をなやますに似たり。」とも云つてゐた。

象潟や雨に西施がねむの花

之が芭蕉の實感であつた。加賀の那谷寺、奥之細道に、

山中の溫泉に行くほど白根が嶽後に見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや。那智・谷組の二字を分かち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

とある。花山法皇が順禮をされて、那谷と名付けられた舊記は詳かでない。菅菰抄に、

那谷寺は往還動橋といふ驛の北より、西へ入る事一里ばかり、山は高からず、深からねども、至つて閑寂也。本尊觀音堂は岩屋にて、前に舞臺あり。自然石を刻んで階とす。莊嚴すべて丹靑を用ひざれども、甚だあざやかにして奇麗なり。云々

とある。西國巡禮は紀伊の那智に始まり、美濃の谷內に終ると云。越前の永平寺、吉田郡志比谷村に在る。福井市の東四里。吉祥山と號する。後深草天皇建長五年道元禪師創立。寺は曹洞宗の大本山であつた。芭蕉は北枝と別れて、こゝへ參詣したのである。奥の細道に、

五十丁山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦畿千里を避けて、かゝる山陰に跡を殘し給ふも貴きゆゑありとかや。

とある。菅菰抄に、「相傳ふ、はじめ寺地を京師にて給はらんとありしを、禪師の云、寺堂を繁華の地に營みては、末世に至り僧徒或は塵俗に墮する者あらんかと固く辭して、終に越前に建立すといふ。」とある。未來を悟る名僧の智德に感じたのである。氣比ノ神社、敦賀郡敦賀町に在る。祭神、御食津ノ神・伊奢沙別ノ命。笥飯とも書く、神社考に、「氣比明神越前敦賀日本紀、仲哀天皇二年立二氣長足姫尊一爲二皇后一。二月、幸二角鹿一。卽興二行宮一而居レ之。是謂二笥飯宮一。神功皇

后十三年、命二武内宿彌一、從二太子一、令レ拜二角鹿笥飯太神一。大神名二去來紗別ノ神一。」とある。即ち氣比ノ神社は仲哀天皇行宮の舊蹟で、天皇の靈を祭つた所である。當國の一ノ宮と云はれる。

奥の細道に、

けひの明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入りたるおまへの白沙霜を敷けるが如し。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、與泥渟をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今に絶えず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主の語りける。

月清し遊行の持てる砂の上

とある。時宗二世の上人（他阿彌陀佛）が此の地へ來て、土砂を運び、泥渟を乾かせて、往來の便を計つた例により、代々の上人廻國の時此の地へ來り、遊行の砂持をやる習慣となつた。參詣人は履物を本履と代へて參拜した事は、遊行の砂石を踏む穢を憚つたからであつたと。

四、餘德

芭蕉は二千人の門人を持つて居つたと云はれる（終焉記）。其中で高弟と云はれる者十人あり、普通其角・嵐雪・去來・丈草・杉風・許六・支考・越人、野波・北技が之れであつた。所謂十哲である。併しその人選には異說があつて、或は野坡・越人・北技を除き、千那・曾良・桃隣を加へたり、或は越人・北枝を除き、惟然・土芳を加へたり、或は野坡・越人・北枝を除き、桃隣・園女・正秀を入れる、或は支考・許六・越人・杉風を除いて、荷兮・曲水・凡兆・曾良を入れたりする者もあつた。十哲といふ稱呼は、元來釋迦の十大弟子に準へたもので、曲水に與へた三等の文に、

はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るやから、わづかに都鄙を數へて、十の指をふさず。云々

とある事に歸因するが、なほ旅寢論の去來の序に、畏敬せる同門の士、丈草・其角・野坡・土芳・正秀・曲翠・半殘・野水・越人・洒堂の名を上げた事や、支考の露川責に、「惣じて蕉門の人格

十哲は、杉風・去來は實情を寫し、洒堂は俗語をあつかひ、許六はこなしを知り、越人はなぐりを得て、云々」とある事にも、その端を發してゐるかと考へる。

芭蕉の高德であつた事は、前條にしば〳〵說いたけれど、その追慕は歿後連綿として續いて居つた。元祿七年十月義仲寺の葬式の時、其德を慕つて招かざるに集まつた者三百餘人を數へたといふ。十六日、正秀亭で芭蕉の遺書、遺物披露や形見分けをすませ、其角・去來・丈草・支考・惟然等重立つた門人は七日ほど木曾寺に籠つて、追善に餘念がなかつた。其間曲水は其角を連れて幻住庵に行き、師の遺跡を見せて、在すが如く愁吟した。

木枯や何を力に吹く事ぞ　曲翠

丈草は七日過ぎてもなほ無名庵に止まり、遂に病氣になつて、去來が許へ手紙を遣り、

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈草

かへし

朝霜や人蔘つんで墓まゐり　去來

丈草の佛幻庵は義仲寺の二町許南岡山といふ所にあつたから、いはゞ墓守のやうに歿後長く弔つてゐたのであらう。十八日、義仲寺に於て追善の百韻興行があつた。連衆は其角支考・丈草惟然・木節・李由・之道・去來・曲翠・正秀等四十三人で、大體大津・膳所・京・大阪・伊賀の作者で、各愁眉を感じ、巧言を求めず、しめやかに師の靈を慰めたのであつた。

なきがらを笠に隱すや枯尾花　其角

溫石さめて皆氷る聲　支考

其他近江・伊賀・京・大阪から初七日迄に集まつた追悼句は四十句を越えて居つた。

江戸で芭蕉の死を知つたのは十月二十二日頃であつた。直に留守を承る嵐雪一派の追善俳諧杉風・桃隣などの深川連、又は露沾・湖春・秀吟・濁子・曾良・千里・素堂・野坡・孤屋、利牛、李下等の追善歌仙、或は悼句が披露された。嵐雪は二十五日桃隣と共に江戸を出立し、十一月七日夜義仲寺の芭蕉の墓に參詣した。そして、十二日の初月忌を京の丸山量阿彌亭で催した。會者嵐雪・桃隣・其角・去來・正秀・曲翠・荷兮・野童・風國其他であつた。

泣く中に寒菊ひとり耐へたり　嵐雪

向上附を雪のあけぼの　桃隣

路通は生前芭蕉の不快を買つた男であつたが、死ぬ時に芭蕉からその罪を赦されたので、深く前非を後悔し、乙州・木節・智月・惟然等と四十九日間の追善を營んでゐる。彼が「芭蕉翁行狀記」によると、金澤の北枝・萬子・牧童の追悼句や大垣の如行・斜嶺・殘香・怒風・或は島田の如竹・如舟などの追悼句も集まつてゐた。

大阪の壺中・芦角は芭蕉にとかくの噂のあつた男であつたが、四十九日、百ヶ日の追善も怠らなかつた。「芭蕉翁追悼木がらし」は彼が芭蕉の追善集で、内に風國は大阪は水が悪いから、師の養生には京か膳所がよからうと、支考から注意されたので、北野の南に草庵を借り受け、戸障子の煤を拂ひ、芭蕉の入來を待つてゐたが、果たさずして芭蕉は死に、その庵を店主に返したといふ悲しい逸話が見えた。

力なく軒を見廻す時雨かな　風國

熱田の桐葉も芭蕉の死を聞き、十年前の清遊を思出して、東藤など十二人と共に一句を手向けてゐる。

泪の内に人々一句を述べて、西の空を拜すのみ。

泣く事も先づ力なき水の雪　桐葉

我泣く聲は秋の風と聞きしに、同じ事となり給ひし悲しさ

悲傷十方なくて、一字を手向けぬ。

塚も動け我泣く聲は冬の風　東藤

十一月十三日の夜、其角・嵐雪・桃隣は去來を落柿舍に訪れ、芭蕉の喪に打興じ、嵐雪の馳走に鉢叩きを聞いて、夜を明かした事があつた。杉風も同年の冬芭蕉の短冊を深川の長慶寺に埋め、發句塚を建て、

霜枯の芭蕉を植ゑし發句塚　杉風

といふ句を手向けてゐる。史邦（フミクニ）がその縁に依つて芭蕉庵小文庫を著したのも、亦亡師追善の思出であつた。

日のかげの悲しく寒し發句塚　史邦

發句塚參詣の一句であつた。

支考は芭蕉の臨終に侍して、最後まで忠實に介抱した一人であつた。彼が笈日記は芭蕉病歿

前後の旅日記であるが、又亡師追懐の一端に成つたものである。切七日の追善を終つた支考は四十九日は伊勢にあつて、追善の一句を手向け、三月四日（八年）江戸に至り、十二日桃隣と共に深川の長慶寺の發句塚へ香花を捧げ、もとの芭蕉庵を見に行つて、知らぬ人の住家となつた事を悲んだ。四月二十六日、支考は伊賀の猿雖亭に到り、撰集に就て物語り、舊交の人々と芭蕉の生前死後の談に及んだ。

一周忌は深川の芭蕉庵で營まれた。嵐雪は、

夢人の裾をつかめば納豆哉

といふ句を手向け、許六から「かやうなたわけをつくす」と罵られてゐる。その許六にも、「亡師一周忌に、手づから畫像を寫して、野坡に贈つて、深川の什物に寄附す。」と題し、

鬢の霜無言の時のすがたかな

といふ句があつた。

三回忌追善（元祿九年三月）は洛東東山で催された。支考の催であつた。里圃の翁草も三回忌の出版であつた。此年三月十七日桃隣は奥の細道行脚を企てた。之も芭蕉追憶の意味に外ならない。

七回忌（元祿十三年）は粟津の義仲寺で行はれた。支考の主催で、集まる者二百三十五人餘盛會であつた。歸花集はその追善集である。江戸では杉風、素堂、曾良等十月十二日深川の芭蕉庵で行つた。杉風の冬かつらはその追善記念の句集である。卷末に、

師におくれ既に七回に及ぶといへども、四序のけしきについて、忘るゝ事なく、月々の忌日は此庵室に於て、懐舊の句をつゞり、像前に供ふ。云々

言の葉をこまかに慕へ冬かつら　杉風

とある。嵐雪にも「露しぐれそれも昔や坐興庵」といふものがあつた。路通が鳴海の知足亭を訪れて、此地方の人々の追悼會に加はつて、句を手向けたのもその頃であつた。千鳥掛に、

鳴海の知足子は芭蕉翁の古き因にて、旅寢の夢の見所と定めて、月に雪にやすらはれし其心ざし、今もむなしからざれば、予も亦たづねよりて、昔になり行く事ども物語り聞えしに、日數とゞまりて、古翁の月忌にさへ當り侍れば、たゞにあらぬやはと、道好める人々を招き、追善を催されぬ。云々

千鳥鳴く爰や昔の杖やすめ　路通
此浦の千鳥に殘る記念かな　蝶羽
俤のしぐれもこれや片便宜　自笑
俤は繪にもかゝれぬ紙子かな　龜世
落葉燒くけふの手向や七茶釜　知足

とある。其他路草亭乙孝の一幅半も七回忌に當る芭蕉追憶の出版であつた。

寶永三年三月、支考は芭蕉の十三回忌を洛東の雙林寺に開いた。其追善集を東山萬句と云つて、湖南、美濃、尾張、伊勢、越前、越中、加賀、肥前、肥後、豐前、安藝、讃岐、備中、備前、美作、攝津等の連衆五百七人、卷數一萬百韻、閑阿彌亭三日の興行であつた。なほ許六の十三歌仙、除風の一順百韻も此時の追善出版であつた。支考は又寶永七年三月、芭蕉七回忌にあたり、京東山雙林寺に芭蕉の碑を建て、享保十年三十三回忌を同所に營み、歌仙及び一人一句の出句を求め、三千化といふ追善集を出版した。桃隣の粟津の原、野坡の八鳥放生日など、その時の出版であつた。此頃は大方芭蕉の高弟も歿して了つた。

寛保三年芭蕉五十回忌、京に芭蕉堂が建てられた。寒爪の雪の棟、湖十のふるすだれが出た。蓼太は寶暦十三年、芭蕉七十回忌を舊庵に近い要津寺に營み、明和八年彼の寺に芭蕉庵を再興した。天明元年九月、蕪村は洛東一乘寺村金福寺に、芭蕉堂及び句碑を建てた。曉臺も天明三年芭蕉九十回忌を一乘寺村に營んだ。寛政五年芭蕉百回忌、天保十三年芭蕉百五十回忌には西馬の花の雲が出た。明治二十年十月永機は芭蕉二百回忌を義仲寺に催し、七日間の大法事があつた。

芭蕉は寛政三年桃青靈神といふ尊號を、時の神祇伯白川資延王から賜はつた。そして筑後高良山の麓に神社が建てられた。天保十三年百五十回忌には、二條殿から花の下大明神といふ贈號を受けた。寶暦十一年義仲寺から出た諸國翁墳記によると、諸國所在の句碑は年々增加して四百を數ふるに至つた。江戸だけでも四十以上はあつた。文政以降聖地順拜のやうな事が行はれ

人格

宇橋の茗荷集(文政五年刊)を始として野桂の茗荷圖會、廣茗荷集(文政九年成)などが出來た。是等は芭蕉句碑の順禮であつた。今日でも舊派の宗匠の間には芭蕉忌が年々營まれ、十月十二日の忌日には各所で句會が行はれてゐる。芭蕉俳德の餘光も實にすばらしいものであつた。

三、作品と所論

一、各時代の句風

寛文時代　芭蕉が季吟に教を受けた事は仕官時代であつた。伊賀、伊勢は藤堂家の領地で、季吟の地盤であつた。伊勢久居の城主藤堂高通は任口と號し、寛文十一年十月京より季吟を招き俳諧を學び、久居八百五十韻、百番俳諧發句等の家書があつた。芭蕉の仕へた藤堂良忠（蟬吟）は新七郎家と云はれ、代々侍大將を勤め、伊賀上野に住んだ。蟬吟が季吟に師事した事は、寛文五年貞徳十三回忌追善百韻を共に卷いてゐる事でも分るが、何時頃師事したものか細

い事は分らないが、任口よりもずつと前であつたらう。芭蕉が季吟に教を受けた事は、貞徳の追善百韻に十八句附けてゐるから、これ又蟬吟とほゞ同時代に學んだものと見てよろしい。蟬吟が芭蕉を使者として、京の季吟へしばしば添削を乞ひにやつたといふ說（冠山の全集）もあるが詳しい事は分らない。氣に入りの芭蕉の事だから、蟬吟が季吟を招いた時には、側に居て說を聽いたらうし、或は京へ行つて季吟の添削を乞うた事などもあつたらう。延寶八年の田舍之句合の判詞に、「喚子鳥、予先年吟先生にまみえて、此事を尋ね侍れば、云々」とあるから、教を受けた事は事實である。季吟の「續山井」（寛文七年刊）に伊賀、國三十六人といふ作者名をあげてゐるから、伊賀には季吟の門人多く、重頼の佐夜中山集（寛文四年刊）、伊賀上野之住九人よりも遙に多數に上つてゐる。

盛なる梅にす手引く風もがな　宗房
あちこちや面々さばき柳髪　同
花に明けぬなげきや我が歌袋　同
風吹けば尾細うなるや犬櫻　同

秋風の鎧戸の口やとがりごゑ　同
夕顔に見とるゝや身もうかりひょん　同
寢たる萩や容顔無禮花の顔　同
霰まじる帷子雪はこもんかな　同

○

後世ねがひとみさぶらひがた　宗房

釋迦の鎧あみだやすりのつば刀

などはこの時代の句であつた。その風は大方比喩とか掛言葉の縁によつて、通俗・滑稽の趣を主に表したものであつた。附句も詞附で、前句の意味を說明したものが多かつた。

當時芭蕉にあらざる宗房號の俳人は五人ほどあつた。それを地方別にして見ると、伏見の宗房、京の宗房、大和の宗房となる。伏見の宗房には、仲宗房と高井宗房とあつた。何れも高瀨道甘の門人らしい。京の宗房には、隼士(ハヤシ)常辰の門人荒木吉右衞門宗房と重賴の門人宗房とあつた。重賴門の宗房は、「毛吹草」(正保二年刊)に五十句入つてゐる。正章の「氷室守」によると、宗房といふ名はあつても實在の人ではない。それは重賴自身である。重賴の惡句は宗房の句として出してゐるとあるが詳かでない。或は宗房といふ人は重賴の門人であつたけれど、重賴の惡句を宗房の名で出したのかも知れない。とにかく毛吹の宗房は芭蕉の宗房より遙に先輩で、句も巧であつたに違ひない。例へば芭蕉の「花にあけぬなげきや我が歌袋」といふ句よりも、毛吹の宗房の「花にあかぬなげきはいつも仙翁花」と云つた方が譬喩が俳諧的で面白い。大和の宗房には、八木住寺田宗房と多武ノ峯住福本宗房とあつた。以上の中京の宗房の句と芭蕉の宗房の句との間に混同が多い。

延寶時代、此の時代は芭蕉が深川の芭蕉庵に入る迄の放浪期で、談林の感化の著しかつた時代であつた。その間延寶二年其角入門し、同三年嵐蘭入門し、同六年既に予が門葉杉風ありと云ひ、同八年桃青門人二十名を數へるに至つた(嵐雪入門)。所謂俳諧師としてその地位を認められた時代であつた。芭蕉が談林の感化を受け始めたのは延寶三四年頃かと考へる。越谷吾山の說に、宗因としばしば會談したとか、市村竹之丞の芝居を見た時、宗因と始めて會見し、宗因の門人が子はまさりけり竹之丞と云つて、上五を案じ佗びて居たのを、宗因は卽座におやゝ

いと附けて、衆を驚かしたなどといふ話は、確證を得なければ信じられないが、去來抄に、宗因が出なければ今以て貞德の涎をねぶつてゐたらうと芭蕉が云つたとあるから、宗因を尊んで居つた事は事實らしい。或は宗因とも會見し、その俳才に服した事もあつたかも知れない。とにかく談林の感化は宗房號を桃青號に改めた以後であつた。この期間の芭蕉は自己の俳諧集として奉納二百韻（延寶四年作）、江戸三吟（同五年冬より同六年春成）、杉風との兩吟百韻（同七年作）、信德の七百五十韻を次いだ次韻（延寶八年作、天和元年刊）があり、句合には六番句合、十二番句合（延寶六年十月成）、其角の田舍之句合（延寶八年成）、杉風の常盤屋之句合（同年成）などがあつた。そして一方に蝶々子、風虎、不卜、言水（ゴンスヰ）、幽山、才丸等の撰集に於て大に談林調を示した。

猫の妻へついの崩より通ひけり　（延五）　桃青
五月雨や龍雨あぐる番太郎　同
梢よりあだに落ちけり蟬のから　同
あら何ともなきのふは過ぎて河豚汁　同
於春々大なる哉春と云々（延六）　同
實や月間口千金の通り町（同）　同
阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍（延七）　同
五月雨に鶴の足短くなれり（延八）　同
よるべをいつ一葉に蟲の旅寢して　同
夜ひそかに蟲は月下の栗を穿つ　同
枯枝に烏のとまりたるや秋の暮　同

○

あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁　桃青
寒さしさつて足の先まで　信章
居合ぬき霰の玉や亂すらん　信德
拙者苗字は風の篠原　桃青
（江戸三吟）

此の時代の發句は譬喩、緣語が奇拔になり、故事を取つても大方下世話の滑稽にもぢつてゐるが、中には言葉の緣を離れて、まとまつた思想の上に一種の情味を表さうとしたものもあつた。前例の五月雨の龍頭、梢より落ちる蟬、枯枝に烏などの句は、前時代の言語遊戯の句に比して一進歩であつた。枯枝の烏の句は後に中七を改めたけれど、古來茶話口傳の句として尊ばれた。茶話口傳とは雪中庵の唱へた說で、季吟・芭蕉・素堂が會見して、正風體の新風を樹立すべく芭蕉に作らせたものであるといふのであるが、全く跡方もない僞說である。此の句は談林時代には珍らしい閑寂味の句である所から、後人が正風宣傳のために揑造した說に過ぎない。附句は表ではあるが、放膽的に出來てゐる所が、貞門の沈滯した風とは違つて多少氣持がよい。

併し大體の調は、

朝夷の三ぶ樣四郎樣五郎樣の　信德
地獄やぶりや芝居やぶりや　桃青

○

燒鳥の鶉啼くなる夕まぐれ　二葉

精進あげの三位入道　桃青

と云つたやうな道化、輕口を叩いて面白がつてゐたのである。

延寶八年頃芭蕉は幽玄體といふ新風を鼓吹した。この風は和歌の幽玄と異り、漢語調の佶屈な表現によつて、謎と駄洒落を表した新風であつた。一體江戸談林は延寶三年宗因の江戸下りを迎へて田代松意一派の主唱したものであつたが、松意に勝れた後繼者が居なかつたためか、その後が續かなかつた。芭蕉の談林はそれと關係なく、信德、信章等と結んで盛に作つて居たが、追々門人が出來るやうになつて、彼等を指導し獨自の一風を樹立したのである。延寶八年八月の田舍之句合の嵐雪の序に、「桃翁栩々齋にゐまして、ために俳諧無盡經を說く。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷がけしきより、初めて其體幽になだらかなり。云々」と云つてゐるやうに、漢詩趣味を俳諧に應用して、新生面を拓かうとしたのである。

今案ずるに寒食の家には自身番　其角
蔦に乘つて春を送るに白雲や　同
月日の栗鼠葡萄桂の廿露あり　同

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに　一二六　同

自身番（江戸の町内を取締る番屋、町役人が詰めるのであるが、後には役に立たぬ親仁が番人となる）の佗住居を云ふのに、寒食（冬至より百十五日後風雨があると云ふので、その日火食を禁ずる俗がある）の家を番屋に見立てた方が奇拔で珍らしい。春を送る白雲と云ふよりも、鳶に乘つて春を送ると云つた方が列仙傳の俤があつてよい。月日の栗鼠と云つて、葡萄、桂を利かせた方が新しい。松江の鱸では古風である。河豚と云つた方が斬新であるなどといふやうに、珍奇な趣向を立てゝ、漢語調に云つて、之を幽玄と名づけたのである。同年九月の常盤屋ノ句合の芭蕉の跋には、「まことに句々たをやかに、作新しく、見るに幽なり。思ふに玄也。是を今の風體といはんか」とあつて、次の勝句、

青わさび蟹が爪木の音　杉風

あへて此箒木のほろ〳〵と成つてたゞ

茶僧月を見るに梅干の影の如くに來り

橙を密柑と金柑と笑つて曰く

之も前例のやうに奇々怪々の句で、柚を蟹にたとへ、蟹が爪木の音丁々たりと漢詩風に洒落れ破箒木をほろ〳〵和にかけて、箒木のほろ〳〵あへとこじつけ、茶には梅干が附くから、僧の姿を梅干の影にたとへ、橙と蜜柑、金柑の論を莊子の寓言にこじつけるなど、實に幽玄體も噴飯の至である。

「次韻」は信德が七百五十韻第八の卷の末を續いだもので、五十韻一卷、百韻二卷、合せて二百五十句より成つてゐる。作者は芭蕉・其角・揚水に才丸が加はつてゐる。最初の卷、表四句、

驚の足雉脛長く繼ぎ添へて　桃青
這句以莊子可見矣　其角
禪骨の力たわゝになるまでに　才丸
しばらく風の松にをかしき　揚水

表だからおだやかに附けてゐるが、先へ行くと相變らず駄洒落や道化た譬喩が續出する。例へば、

白き親仁紅葉村に送る聟　桃青

漁の火かげ鯛を射ル　其角
師魚は諫め鰻は胸を割かれける　才丸

○

渾沌梨に乘つて氣に遊ぶ　桃青
朝咲しらむ馬鹿々々の山　揚水
雪の別れ女房に髭のあるありけり　其角

○

摩訶右衞門苦奈國に生る　其角
愛を捨て子を捨て毗盧遮阿毗羅味　桃青

○

迷ひ知れ恨が原の妾塚　桃青
横雲別レ之助修行し暮れて　其角
今宵月に村雨と申す三味線を　揚水

又次韻には妖怪趣味の句が全卷を壓してゐる。例へば幽靈を世に反す、血摺のねまき、むくろは起つ、白骨がかね附ける、山彦嫁を抱いて去る、卒都婆の男、石が曰く、木玉に奏で、人のぬけがらなどといふ怪奇な言語が到る處に見える。幽玄が妖怪調に化けて了つた。

次韻は古來蕉風の一時代を劃する撰集と見做されてゐた。去來が其角に與へた手紙に、「師の風雅見及ぶ所次韻に改まり、云々」とか、許六の問難に答へた文に、「先師の次韻起りて、信德が七百韻衰ふ。云々」などとある。越人は支考が冬の日を正風開眼の集と見做す事に對して、次韻を當流開基の集としてゐるが、どう考へても正風に忠實な集とは思へない。萠芽はあつたらうが、それは單なる芽であつて、過渡的のものである。虛栗が出れば次韻は亡び、冬の日が出れば虛栗は落ちるやうに、正風は時代の段階を踏んで成るものである。

天和時代、天和の蕉風は其角の虛栗集（天和三年刊）を以て代表される。其角の貧行交の戲序、芭蕉鼓舞、書の跋があつて、新風樹立の氣勢をあげてゐる。作者は芭蕉・其角・嵐雪・杉風・嵐蘭・揚水・素堂・才丸等で、やはり前時代の漢語調は全體を支配してゐるが、中には稀に見る佳作も交つて居て、時代の進展を想はせる。

傘にねぐら借さうやぬれ燕　其角
我僕落花に朝寢ゆるしけり　同
蚊をやくや褒姒が閨の私語　同
松風の里は粃するしぐれかな　嵐雪
はぜ釣るや水村山廓酒旗風　同
きりぐす鼠の巣にて鳴き終りぬ　同
浮葉巻葉此蓮と風情過ぎたらん　素堂
ほととぎす正月は梅の花咲けり　芭蕉
槌や花なき蝶の世捨酒　同
朝顔に我は食くふ男かな　同
世にふるもさらに宗祇のやどり哉　同
夜着は重し呉天に雪を見るあらん　同

其角の濃艶な調、嵐雪の清寂な調、素堂の豪健な調、とりぐの特色を發揮して面白いが、芭蕉の生活をじつと見詰めた佗しい主情的な傾向も、後の寂栞の境地への足踏となつて、慥に一進歩と見なければならない。附句は前時代に見るやうなふざけた輕口の句は少なくなつては來たが、その代り漢土の故事の新奇な翻案は著しくなつた。例へば、

山野に飢ゑて餅を貪る　嵐蘭
盃井の月に伯夷が足洗ふ　芭蕉

○

有朋自遠方來　千之
花に粮空嚢に錢をはたくらん　其角

○

月今月今西瓜に劍を曲クル　其角
弓張角豆野に芋ヲ射ル　藤匂子

○

酒債尋常住所有

人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉　其角

冬湖日暮れて駕レ馬鯉　芭蕉

又怪奇な想も依然として全巻を占めてゐる。例へば、

雷鳥の初音は嘴ヲ鳴ルならん　芭蕉

汐てる海に鰹孕る　嵐雪

○

魔鏡の月を睨みかへして　才丸

山彦と碁を打つ風の古寺に　子莧

○

ねみだれかもじ蛇と成る夢　李下

笛によろ骸骨何をその情　其角

○

枯藻髪榮螺の角を卷き折らん　其角

魔神を使トス荒海の崎　芭蕉

併し多くの附句の中には眞の幽玄調に近い作品もあつた。

琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一晶

朝に烏帽子をふるふ紙衣　芭蕉

○

曉の寢言を母にさまされて　嵐雪

ついに發心ならずなりけり　芭蕉

前述の如く虚栗は新風鼓吹の意氣揚々たるものがあつた。それは桃青鼓舞、書とある書方でも分らう。芭蕉の跋に云、

栗とよぶ一書其味四あり。李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る。これによつて其句見るに遙にして、聞くに遠し。佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、其の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。昔は西施が振袖の虚栗も次韻と同じやうに古來芭蕉

の劃期的撰集の一として見做されて居つた。それは去來の贈晋氏其角書に、「師の風雅見及ぶ所次韻に改まり、みなし栗にうつりてより以來、しば〳〵變じて、云々」とあるし、答許子問難辯にも、「先師の變風に於けるも、みなし栗生じて次韻枯れ、冬の日出でてみなし栗落つ。云々」とあるので分る。曲齋の婆心錄にも、「抑正風の始は延寶五の再吟より起り、同九年の次韻に流行し、天和三の虚栗に一變し、云々」とも論じてゐる。復古蕉風の堀田麥水は虚栗を特に推賞行し、新虚栗（安永五年刊）を著し、虚栗の古調に復活せんと努力した。彼が蕉門一夜口授（安永二年刊）に、

みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。卷中に氣凱、高致の吟多し。云々

氣凱、我句人不レ知我を鳴くものは子規　其角

高致、花に浮世我酒白く食し黑し　はせを

と云つてゐる。併し惜しい哉此の復古運動は成功しなかつたけれど、安永時代の新俳諧の樹立に此の運動の間接的貢献は認めてやらなければならない。

貞享、元祿時代、芭蕉は寛文に古風、延寶に談林新風、貞享に正風と變化した。其の劃期的撰集も次韻、虚栗、冬の日と移つて來た。冬の日は一名尾張五歌仙と云つて、芭蕉が貞享元年冬尾張の名古屋に旅行して、その地の野水、荷兮、重五等を導き、歌仙五卷、追加表六章を殘したものであつた。許六の自讃之詞上に、「愚老が俳諧は五歌仙に至らざる人一生涯成就せず。大事なり。覺悟せよ。云々」とあるから、芭蕉自身も蕉風の基礎たるべき集として、十分に自信を持つたものであらう。當時冬の日の聲望は非常なもので、江戸、上方の間にひゞき、ひとり尾張地方の一撰集たる聲譽ではなかつた。支考は冬の日、春の日の二集に正風の門を斷つ（發願文）と云つてゐるが、古來冬の日を以て正風初期の撰集とする事に異議を挾む者はあまりなかつた。

冬の日は安永、天明の新興俳人に多大のショックを與へ、當時の俳風は此の集の感化を受けた事は爭はれない。殊に尾張の曉臺一派の俳風に感化は著しかつた。曉臺は桃青二十歌仙を畫龍に比し、冬の日を眞龍にたとへ、熱田三歌仙の卷と共に自派の規矩と定めた。冬の日の調は前時代の道化、輕口或は漢語調の妖怪趣味を離れて、全く藝術的な態度になつて句作してゐるが、趣向に巧を求め句作に紅粉を施した點は、なほ未來に正風の進展性を殘してゐる。冬の日

の調は巧ではあるが、若々しい。技巧に鋭さがあり、想像に美しさがあるが、作らず巧まず、而も自然に美の焦點を捉へて、人生の深刻に觸れる點がない。あまりに空想的であつて、生活の內部から出た感動性に乏しい。

五歌仙中初めの二卷がよく出來てゐる。最初の卷、二ノ表二句目あたり、

今ぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
ぬす人の記念の松の吹折れて　芭蕉
しばし宗祇の名を付けし水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水

一句としても面白いし、變化も鮮かで巧である。二の歌仙、初裏三句目あたり、

床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
緣さまたげの恨殘りし　芭蕉
口惜しと瘤をちぎる力なき　野水

明日はかたきに首送りせん　重五

癪物語、氣が附くと緣を妨げた從弟だつた。瘤があるから破談になつたなどと、奇拔な事を云つてゐるが、復雜で巧である。冬の日調の最上のものだらう。併し烏賊はえびすのうらかただとか、雪の狂吳の國の笠、芥子の一重に名をこぼす禪、花棘馬骨の霜、花に泣く櫻のかび、八十年を三つ見る童などといふ難解な奇拔な句があつて、全然前時代の舊染からぬけ切らないやうに見える。其點は未熟な感もあるが、慥かに前時代の風より面目を改めた所は一大飛躍である。

其他熱田の桐葉一派の熱田三歌仙（貞享元年十二月より同二年三月成、安永四年刊）、荷兮の春の日（貞享三年刊）、其角の初懷紙（同年正月成、寶曆十一年刊）、荷兮の曠野（元祿二年刊）、珍碩のひさご（同三年刊）などもあるが、時代を劃すべきほどのものでもないから省筆する。が三歌仙は冬の日に近い調で、冬の日ほど巧な句がつゞかないし、初懷紙は其角流の濃艶な作意的な表現に特色を持つだけのもの、春の日は冬の日に似ず、調はずつとおだやかで、むしろ平凡のやうに見えるが、有名な古池やの吟が出てゐるから、七部集に入れられたり、評判され

たものであらう。曠野は荷兮中心のもので、七部集の一、その中の連句又見るべきものもあるが全體から見て芭蕉の集とも考へられない。ひさごは珍碩、正秀、乙州中心のもので、七部集の一書ではあるが、猿蓑があれば特に時代を劃すべき集として論ずる必要もない。そこで猿蓑を正風第二期の撰集と定めて置く。

芭蕉は奥羽行脚以來句風を一變した。行脚中はまだ異樣、異體の句も殘つてゐたが、後訂正して新風を唱へた。彼は元祿三年四月石山の幻住庵に入り、同四年の春を粟津の無名庵に迎へその四月、嵯峨の落柿舍に遊んだ。撰者去來が親しく指導を受けたのは此間であつて、猿蓑の成立も亦幻住庵、無名庵、落柿舍にての會合であつた。撰者は去來の外に凡兆が入つて、芭蕉の懇篤なる指導の下撰者の隔意なき意見の交換によつて成立した。芭蕉も乘り氣になつてゐたし、去來も末代の龜鑑たるべきものをといふ熱心さを以て編成に從つた事であらう。刊行は元祿四年五月、作者は撰者の外に芭蕉・其角・嵐雪・杉風・曾良・嵐蘭・珍碩・正秀・乙州・智月・丈草・史邦・越人・尚白・木節・半殘・土芳・憔然・路通等大方近江・京・伊賀・江戸の作者であつた。附合は芭蕉・凡兆・去來・史邦などの歌仙四卷、幻住庵ノ記、凡右日記を含んでゐる。

猿蓑は古來非常に尊ばれた集で、芭蕉の寂栞主義の最圓熟した時代のものであつた。許六は宇陀ノ法師に、「前猿蓑は俳諧の古今集也。初心の人去來が猿蓑より當流俳諧に入るべし。云々」と賞揚し、其他新しき風流、正風の腸などと云はれて、花實兼備の集たる事、衆口の一致する所であつた。併し句の入選に就ては去來と凡兆の間に相當な議論もあつたやうで、見渡す所餘韻、餘情の秀でた句もあれば、客觀的な印象句もあるし、中には句法の弛緩した、わざとらしい、俗な理窟を云つたやうな主情句も交つて居つて、全體の統制に缺けた所もあつた。附句も始め三歌仙はよいが、最後の卷は多人數になつて調子の抑揚が亂れてゐた。併しかゝる難はあつても、大體に於て芭蕉の寂栞風の圓熟した頂點に達したものと云ふべく、よく物の本情を捉へ、焦點を摑んで、技巧が極めて自然に落付いてゐる。

鑓持のなほ振り立てるしぐれかな　正秀
なつかしや奈良の隣の一しぐれ　曾良
新田に稗穀けふるしぐれかな　昌房

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆
ながくと川一筋や雪の原　同
時鳥何もなき野の門構　同
住みつかぬ旅の心や置炬燵　芭蕉
荒磯や走りなれたる友千鳥　去來
鉢叩來ぬ夜となれば朧也　同
入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅
終夜秋風きくや裏の山　曾良
そよそよや藪の中より初嵐　旦藁
菜畠や二葉の中の蟲の聲　尚白
稗の穂の馬逃したる氣色哉　越人
果もなく瀨の鳴る音や秋ついり　史邦
初雁に行燈とるな枕もと　落梧

陽炎やほろ〳〵落つる岸の砂　土芳

第一の歌仙、名殘の表一句目より、

いちどきに二日の物も食うて置く　凡兆
雪げにさむき島の北風　史邦
灯ともしに暮るれば登る峰の寺　去來
ほととぎす皆鳴き仕舞ひたり　芭蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦

と寂びた人事を展開させ、巧に抑揚を付けて、

せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切つたる死狂ひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　來
湖水の秋の比良の初霜　蕉

だんだん調子をはずませて、湖水の秋と氣分を下げ、他の場面に轉じて行く所などは、實に敬

服の至りである。第二の歌仙も名殘ノ表一二句目と進むに從ひ、輕く氣持をほどき、七句目あたりから調子が高くなり、

命うれしき撰集の沙汰　去來
さまくに品かはりたる戀をして　凡兆
浮世の果は皆小町なり　芭蕉
何故ぞ弼すゝるにも涙ぐみ　來
お留守となれば廣き板敷　兆

名殘ノ裏の二句目、小町の戀の觀相を中心として、前後に波立たせて、次の花の座でそれを輕く落して行く手際は、凡手の及ぶ所ではない。

芭蕉晩年の風は輕みにあつた。去來が猿蓑後又一の新風を起さると云つたのは此風であつた。この輕みは贅野に既に現れてゐたが元祿五年の深川集に、

乘かけの提灯しめす朝凪　嵐蘭
汐さしかゝる星川の橋　芭蕉

とあつて「愚老が俳諧四五年の後は皆かやうになると申されけり。云々」（滑稽傳）と、芭蕉は前途の風調を豫言して居つた。果せる哉元祿七年の蕉風は皆之に化せられて、同年九月意專に與へた手紙にも「惣慨かるみあらはれ大悅不少候。云々」とか、或は同年五月の上方旅行前、子珊の別座敷に於ける俳談の折「今思ふ體は淺き砂川を見るが如く、句の形は心ともに輕きなり。云々」などとあつて、元祿七年の蕉門俳壇は此の輕みによつて花が咲いたのであつた。此風の流行は同年九月十日杉風宛の狀に「上方筋別座舗、炭俵にて色めきわたり候。云々」とあるのを見ても分らう。

炭俵の禮讃は非常なものであつた。之は恐らく最後の新風であつたからであらう。支考は始めて俳諧の甘味を去り、月花のねばりを洗ひつくしたと云ひ、吏登は續猿蓑は炭俵に含まれ、全體は三度はどの流行である。嵐雪も此歌仙が生涯の出來ぢやと云はれたと說き、野坡も先づ炭俵を手本として、翁の風流を學ぶがよい、炭俵の風流は、翁の極意の所で、すなほに安き所を導かれた（風之の耳底記）などと論じてゐる。併しながら炭俵は草の調で、最も危險な所である。猿蓑以來芭蕉の性情が一層脫落して、輕み風を喜ぶ事になつたのであるが、之を皮相的

に眞似ると、卑俗な調に墜ちて了ふ。梅通が天保に炭俵を覘ふと云へども、炭俵に等しからずと云つたのは當然な事で、下手に眞似ると曲齋の云つたやうに、田舍菜に酢をかけたやうで、色の青いのは似てゐるが、風味に至つては似ても似付かないと云ふやうにならう。天保以降の俗調が其例を示してゐる。

炭俵（元祿七年刊）は野坡・利中・孤屋の共撰で、芭蕉・其角・嵐雪・去來・杉風・支考・許六・丈草・北枝・洒堂・岱翠・正秀等の作を上げてゐるが、發句は一體に淺俗で引立たない。芭蕉・其角・嵐雪・去來・丈草などの連中には佳句もあるが、全體が淺俗の風だから見映えがない。殊に野坡等三人の句が多くは俗調である。本集は發句より連句の集と云つた方がよからう。

五人扶持とりてしだるゝ柳かな　野坡
傘に押分け見たる柳かな　芭蕉
花守や白きかしらをつきあはせ　去來
柿の袈裟ゆすり直すや花の中　北枝

葛城の神はいづれぞ夜の雛　其角
五月雨や傘につけたる小人形　同
涼しさや浮洲の上のざこくらべ　去來
星合にもえたつ紅や蚊屋の緣　孤屋
悔みいふ人のとぎれやきりぐす　丈草
こほろぎや箸で追ひやる膳の上　孤屋

連句は歌仙七卷百韻一卷で、その淡い輕い風は慥に芭蕉晩年の一異彩であつた。併しそれも梅が香にの卷と振賣の雁の卷とが最も勝れ、天野氏興行の桃隣、野坡等の卷は、桃隣の句が卑俗で讀むに堪へない。嵐雪、野坡の脫落した句風と嵐雪の細い弱々した風と調子が合はない。其角、孤屋の兩吟は輕みどころか其角一流の巧な重たい人事句が目立つて堂々と響いて來る。孤屋も骨が折れたらうが、輕みとは別に上上の出來である。櫻が香にの卷、初裏三句目より、

奈良通ひ同じつらなる細基手　野坡
今年は雨の降らぬ六月　芭蕉

預けたる味噌取りにやる向河岸　坡
ひたといひ出すお袋の事　蕉
終宵尼の持病を押えける　坡
こんにやくばかり殘る名月　蕉

同名殘ノ表三句目より、

こちにもいれどから臼を借す　坡
方々に十夜の内の鉦の音　蕉
桐の木高く月冴ゆるなり　坡
門しめてだまつて寢たる面白さ　蕉
拾うた金で表がへする　同

此間の附方の妙、變化の抑揚を味はつて貰ひたい。

輕み風の撰集には其他子珊の別座舗と續猿蓑があつたが、別座舗は個人的のもので上げる必要もない。續猿蓑は芭蕉が江戸の沾圃を撰者として編成を試みたものだけれど、撰成らずして

歿し、歿後五年を經て刊行を見るに至つた。本集は古來支考の僞作說が傳はつて、不純なものと見做されてゐた。成程內容を見ると支考の手の加はつたらしい形跡多く、僞作說も一理あるが强ち支考一人の僞撰とも考へられない。去來は猿蓑以後の一新風と見てゐるが、炭俵よりも全體に野趣があり、炭俵の續篇と見るよりも、むしろ輕みのある猿蓑の延長と考へたい。併しここでは炭俵以後の撰集は省略する。三度ほどの流行ぢやと云つた說が、大體云ひ盡してゐると思つたからである。

二、文章

芭蕉の文として傳へられる短いものは百餘篇(紀行文、日記、序、跋、消息を除く)あつた。併し此百餘篇悉く芭蕉作とは信じられない。此中には句の前書文のやうなものも多く含まれてゐるが、之がなか〳〵厄介なもので、果して芭蕉の作であるか、或は撰者の手に成つたものであるか、選別するのに骨が折れる。次にその主なるものに就いて檢討しよう。

貞享元年の甲子吟行中、芭蕉が蝶といふ女に句を乞はれたといふ前書が、蝶夢の發句集に載つてゐるが、之は土芳の三冊子によると、土芳が芭蕉の物語を書き綴つたもので、それを蝶夢が多少改めて前書としたものであらう。

一葉集、一代集（秀三）に白髪吟といふ序詞を載せてゐる。一葉集では甲子吟行の原文、「長月の初故郷に歸りて」を削り、「たよりも文月の玉まつる頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや」と改めてゐるが、一代集には「手にとらば消えん涙もあつき秋の霜」を削つて、「一家みな杖に白髪の墓參り」の句を代りに入れてゐる。一葉集の如く文月の魂祭る頃云云とすると、元祿七年七月最後の歸郷の事となり、一家皆杖に白髪の發句には合ふけれど、母の白髪拜めよ浦島が子の玉手箱と云つた甲子吟行の事實とは一致しない。又手に取らば消えんの句を活かすとすると、甲子吟行の歸郷とは合ふけれど、文月の魂祭る頃だの二十年の月日を夢だのといふ事が、其時の歸郷と事實が合はなくなる。支考の古今抄に、一家みな杖に白髪の句を註して、「西麓庵の遺稿には白髪吟といふ序詞ありて、云々」とあるから、或は白髪吟は支考の僞作で、それでは甲子吟行の歸郷に合はなくなるから、後人が一句皆の句を削つて、手に取らばの句に改めたものかと考へる。

士朗の枇杷園隨筆に、鶯亭夜話と題して、貞享五年伊勢參宮の芭蕉の眞蹟文を載せてゐるが疑はしい。冒頭に、「貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前の土を踏む事今度五度に及び侍りぬ。云々」とあるが、第一如月の末といふ記事が誤つてゐよう。杉風宛の手紙によると、二月四日參宮の事になつてゐる。又御前の土を踏む事五度といふ記事もよく分つてゐない。芭蕉參宮の書に現れたものは、貞享元年八月、同五年二月、元祿二年九月の三度で、恐らく他は延寶年間父の病を聞いて歸郷した時か、或は伊賀仕官時代の頃かで詳かでない。なほ同書に、芭蕉が同年三月高野山へ登つた時の文を載せ、末に、

此處はおほくの人のかたみの殘れる所にして、わが先祖の髻髮をはじめ、親しきなつかしき限りの白骨も、此内にこそおもひこめつれと袂もせきあへず、そゞろにこぼるゝ涙をとどめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

とあるが、芭蕉の先祖の髻髮や父母の骨が高野山に埋められるといふ事は他書に見た事がな

い。之は恐らく芭蕉が蟬吟の遺髪を高野山へ納めるお供に行つたといふ話を、芭蕉一家の墓に揑造して父母の句の註とした後人の作意かと考へる。

支考の和漢文藻に芭蕉の月見ノ賦が出てゐる。之は一葉集（眞僞未詳とする）、芭蕉文集等に載つてゐるが、笈日記によると、元祿四年八月は湖上に船を泛べて、三夜月見した事があつた。其時支考に名月泛湖ノ賦があつたといふから、この月見ノ賦は支考の泛湖の賦ではなからうかと思ふ。若し之が芭蕉の作であつたとしても、支考の手の加はつたものではなからうかと考へる。

芭蕉の幻住庵の文に三種あつた。一は眞蹟拾遺の幻住庵ノ記、一は和漢文藻の幻住庵ノ賦、一は猿蓑の幻住庵ノ記である。眞蹟拾遺の幻住庵ノ記と和漢文藻の賦とは大同小異であるが、猿蓑の記だけは大に違つてゐる。喝于錄（卓朗の雜記）の記事によると、始めの一通は落柿舍にあつて、文章の無用をすぐり、中の一通は幻住庵ノ賦で、文章の花美を揃へ、終の一通は猿蓑ノ記で、文章の花實を整ふと云ふのであるが、賦は必ずしも花美を揃へたとも思へない。幻住庵の文は去來と相談して辭句を訂正したものだから、三通は芭蕉の草稿だらうが、賦の筆力は猿蓑の記に及ばず、眞蹟拾遺のものよりも平板、冗長な感がある。殊に支考は賦を五祕の一品であると云つてゐるから、容易に信じられるものではない。賦は支考の手の加はつたものと見てよからう。なほ本朝文鑑に憐ニ捨子一辭（芭蕉庵）、庚午紀行（風雜坊）を載せてゐるが、何れも支考の僞作である。辭は貞享元年甲子吟行中の富士川捨子の條下の文を少し改めたもの、庚午紀行は貞享四年から元祿元年に涉る卯辰紀行の燒直しである。支考の註に卯辰紀行は江戸の芭蕉庵で元祿四年に修正して、元祿三年と貞享二年の兩紀（奥の細道と甲子吟行を云つたものか、或は幻住庵ノ記と甲子吟行か）の文法を取合せて作つたものらしいとあるがどうだらうか。內容が卯辰紀行の記事であつて、題號を庚午紀行（元祿三年）と名けたのは、此紀行が元祿三年に書かれたものであるといふ理由の下に名けたのだらうが、果して元祿三年の庚午に書かれたものか分る事ではない。

史邦の芭蕉庵小文庫に煤掃之說と石臼之讃を載せてゐるが、煤掃之說は支考の作らしく、寫生的に面白く書かれてはゐるが氣品がない。成美の隨齋諧話に之を疑ひ、

文中拙き語どもも交れり。殊に結句にほどなく暮れて高鼾とはなりぬと書きて、その發句

暮行く宿の高鼾とあり。これら決してはせをの造意にはあらぬなり。云々

とある。さう云へば文章と發句とが取つて付けたやうな感がする。石臼之讃は越人の草稿を芭蕉の添削したもので、越人の不猫蛇に論がある。支考の創かけの返事によると、之は去來か許六の麁相であるとごまかしてゐるが、例の支考の空つとぼけであらう。因に不猫蛇には銘とし小文庫には讃とし、風俗文選には頌とする。

風俗文選に芭蕉翁とあつて松島〻賦を載せてゐるが、之は奥の細道松島の條下の記事を前後に綴り合せて書き直したもので、許六の僞作である。成美の説に、語脈のつゞかない所があると難じてゐる。

烏之賦、蝶夢の芭蕉翁文集、風德の芭蕉文集、一葉集等を芭蕉の作とするが、凡兆の作である。加生宛の芭蕉の手紙によると、文章くだくだしき所あつて、締がないが、趣向は面白いから增補して自分の文にするが、是非貴下の文にしたいといふなら、自分の文を見た上で改められたい。云々とある。芭蕉作としてもよいが、元來凡兆の文を添削したのであるから、凡兆作とするのが至當であらう。

一體俳文といふ意味は、俳諧を以て文章を書くから云ふのであると、去來は論じてゐるが、此論によると俳文は必ずしも俳人に限られたわけではない。武將でも僧侶でも云へようが、ここでは俳人の文章といふ意味で云つて見る。その嚆矢に玄隣の寶藏(寛文十一年刊)があつた。寶藏の文は日常、卑近の道具の名を題として、中古風の漢字假名交り文で書いたもので、俳文としては特別な文格を持つたものとは思はれない。俳文が文章として特殊の性格を持つやうになつたのは芭蕉以來で、芭蕉になつて始めて內容にも形式にも體格を備へるやうになつたのである。芭蕉は生前文集を作る意圖があつた。それは猿蓑撰の時去來に計つて猿蓑文集を編成すべく文稿を選んだのであつたが、未だ成らずして歿したので、その草稿は去來の手許に殘つて居つた。それを許六が去來から讓り受け、十五年の歲月を費して大成したものが本朝文選であつた。許六の自序に、

先師芭蕉翁、始めて一格を立て、氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言、漢字を交へたりとも、心は吉野、立田の花紅葉をうらやみ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどり知るべし。云々

とある。芭蕉の說によると、世上の俳諧文は或は漢字を假名に和げ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云ひなし、或は人情を表すと云つても、西鶴の如く淺ましく下れる姿がある。自分は慥に作意を立て、たとへ漢字を用ひてもなだらかに云ひ取り、田舍びた事を云つても、なつかしく表さなければいけないといふのである。任意を立てるとは事柄の技巧化である。巧に事柄を表さなければ文章は平凡になる。漢字を交へると調が佶屈になる恐があるから流暢と云つたのである。俗な事を云ふと內容が卑しくなるから、なつかしく風韻があるやうに望んだのである。芭蕉の文は俗事、鄙言を表しても溫雅で、其間に和漢の故事を引用し品を落さない。文勢に抑揚があり、辭句に調節がある。寶藏などの文は許六の云ふやうに和歌、連歌の文法で、俳諧文章の格式がない。也有の文林文集の序に、

蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず。たとへばやごとなき人の編笠羽織にやつして、花の下の床几によりたれど、田樂團子に手をふれず。茶ばかり飲みて休ひたるが如し。云云

と云つてゐるのは、氣品の勝れた事を云つたのだが、田樂團子に手を觸れない程しかつめらしいものでもない。但し故事の引用もあまり頻繁に行はれると衒學的な嫌になる。許六・去來の文に既にその傾はあるし、芭蕉のにも一端の責任はあるが、俳文といふと故事の通俗化、滑稽化を特色とするやうに思はれて、そこに一種飄逸な洒落な風韻を殘す事にならうが、也有の鶉衣の如きはかゝる傾向の甚しきもので、其弊は元祿俳人の文格にあつたのである。

三、俳論

芭蕉の俳論は俳話的であつた。組織的なものではなかつた。大體門人に敎示した話說であるから斷片的である。芭蕉は良き敎師であつた。門人の長所、短所に應じて、指導的に敎へたのである。例へば洒堂に向つては黃金を打延べたやうに作れとか、許六に向つては取合を第一にせよとかいふ類であつた。芭蕉の門人は各師說を傳へてゐた。支考・北枝は俗談・平話論を傳へ、去來は不易流行說といふやうに、敎示の說は異つて居つても、傳ふる所は師說の一端でな

いものはなかつた。門人が各自門戸を構へ、自分の説を芭蕉の精神であるかのやうに論ずるのも、却て蕉風の流行を促す事になつて面白からうが、支考のやうに先師、故翁の遺分けをして自説を芭蕉説のやうに僞つて唱へるのでは始末が悪い。芭蕉の美名にかくれて、僞説、虚構を工作すると、後學の惑となり、研究に骨が折れる。之は野坡・洒堂・露川の如きものにも見る所であるから、先師曰もよく見究めないと、芭蕉の説でない事を、芭蕉説として信ずる事になるから注意すべきである。

一、本質論

俳諧と誠　芭蕉の俳諧は誠にあつた。誠とは物を見る態度の純眞性を云ふのである。土芳の説に、「餘念なき俳諧の事なるべし。」とある。即ち物の本情を知り、本意を摑む事は誠の態度でなければ得られない。強ひて言語を巧み、情を作意する者には、誠の句は出來ない。言語や表情は誠の中に含まれてゐるから、技巧を凝らさなくとも自然の姿になつて表はされよう。白

ざうしに、俳諧といふ名は昔からあつたが、誠の俳諧はなかつた。芭蕉は誠の俳諧を主張して世の先達となつた。例へば「古池や蛙飛込む水の音」の句でも、荒れた草の中から蛙の飛込む水の音を聞き付けて實情を表したもので、そこには何等の技巧もない。心から情景を表したもので、そこが誠であると云つてゐる。純眞の見方が誠を生むのである。芭蕉の俳諧の本源である。

連俳の別　貞徳は俳諧は百韻ながら俳言で賦する連歌であると云つた。彼は無俳言といふ事を非常に嫌つて、宗鑑の附句を批評し、無俳言わろき連歌也などと云つた事もあつた。俳言とは和歌連歌に用ひない言語で、つまり俗語である。白ざうしに、聲にいふ詞はすべて俳言であると云ふ。聲にいふ詞とは音讀する詞といふ意味である。和歌・連歌の用語は大方訓讀したもので、音讀したのは俗語であつた。併し連歌に連俳兩様の詞といふ制があつて、例へば屏風・几帳・拍子などの語は、音讀されたものであるが、連歌にも用ひられ、俳にも用ひられた。

貞徳が俳言を旨としたのは、連俳の區別を明かにするためであつた。俳諧を連歌から獨立させて、之に文學的な價値を與へようとするには、俗言を主として民衆趣味のものでなければな

らない。併し貞徳の俳諧は言語の俳諧であつて、心の俳諧ではなかつた。俳言は内容に俗趣味を附けるけれど、芭蕉のやうに眞面目な俗談ではなかつた。

先師曰、春雨の柳は全體連歌也。田螺取る烏は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見に行くといふ句は詞に俳諧なし。浮巣を見に行かんといふ所俳也。又霜月や鶴のつくゞ〳〵並びゐてといふ發句に、冬の朝日のあはれなりけりといふ脇は、心、詞共に俳なし。ほ句をうけて、一首の如く仕なしたる所俳諧也。云々（白さうし）

春雨の柳が連歌で、田螺取る烏が俳諧である事は貞門でも云ふだらうが、鳰の浮巣の句のやうに、詞の上に俳味になくとも、見に行かうと云つた氣持の上には俳味がある。又冬の朝日の脇には心、詞共に俳味はないが、一首の和歌のやうに思ひ寄せた所は俳諧的で、是等の作風は貞門より一歩進んだ見方であつた。支考は俳諧十論になほ此說を敷衍して、蕉門の俳諧には、俳諧の心はあるが、俳諧の詞といふものはなかつた。雅言のぬめり（和歌の柔弱な言語をいふ）には、俳諧の風はないが、俗語のいやみ（あまりに卑俗な言語を用ひる事、例へば大根をだいこ、油をあむらといふ類）も亦俳諧ではない。ぬめりといやみとは二つながら俳諧病であると云つてゐる。

俗談・平話　貞徳は俳言を重んじ、縁語、掛言葉によつて通俗、滑稽な趣を表さうとした。俳言は庶民の言語である。縁語、掛言葉の滑稽は庶民の雅情であつた。俳言を用ひ、表現の通俗、滑稽を旨とした事は、やがて俳諧の俗談、平話たるべき前提を示してゐる。併し芭蕉はかゝる境地には留まらなかつた。俗談・平話であつて、而も卑俗の感をいだかしめない所が、彼の境地であつた。北枝の山中問答に、

芭蕉云、俳諧の姿を俗談平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず、その境を知るべし。云々

又黑ざらしにも、「師の曰、俳諧の益は俗語を正す也。云々」とある。此俗語を正すといふ事は風雅の寂を基調とした生活をする事である。芭蕉の俳諧は生活の俳諧であつた。生活の寂びる事は取りも直さず芭蕉の俳諧の寂を生む事で、その修練があつてこそ俗談、平話が俗ならず、野卑ならずになるのである。支考も二十五ヶ條の解に、風雅の道理を取る所が正すの義であると云つてゐる。風雅の道理とは寂栞の修練である。かゝる基本情調があつて俗談、平話が價値

を持つのである。

寂・栞・細み　芭蕉の說に寂・栞・細みといふ敎がある。去來の說によると、寂は句の色である。閑寂なる句を云ふのではない。老人が甲冑を帶し戰場に働き、錦を着て御宴に侍りても老の姿のあるやうなものである。賑やかな句にもあると云つて、「花守や白きかしらをつきあはせ」の句を例に出してゐる。此說に就て考ふるに、寂は句の情調で、物を見る人の氣持に、落着いた、脫落した、艶の消された色があれば、それを寂と云つたので、靑年時代よりむしろ老境に入つた人の心に見るものである。寂は寂しいといふ苦痛の感情ではない。夏の日のやうな强烈な暑さではないが、冬の日のやうな落寞たる冷さでもない。長閑な枯色で、全人格的な色調である。此寂が芭蕉の生活の基本感情で、俳諧がかゝる生活の表現であるとすれば、どこか句全體の感情の上にその氣持があるわけになるのである。

元來此敎は連歌にあつた。心敬は「ひえさびたる方を悟り知れ。云々」（さゞめごと）とか、或は「ふけさびたる方最も尊かるべし。」（心敬僧都庭訓）などと云つて、ひえ寂ぶ、ふけ寂ぶの境地を連歌作者の理想とした。心敬の寂の境地は、彼が連歌論の「ひとへに餘情、幽玄の心

姿を旨として、いひ殘し、ことわりなき所に、幽玄感情は侍るべしとなり。」（さゞめごと）いふ主張に立脚したもので、物事を露骨に云つたり、示したりする氣持を嫌つたからで、そこに芭蕉の寂といふ心と一脈通ずる或物があつたかと考へる。蓋し寂は一面から見ると言葉少なき態度である。靜かな奥床しい物の俤を示すやうな態度である。芭蕉の寂は心敬の心境を進展させたものと云ふべきである。

栞は之も去來の說によると、句の姿にありとか、或は句の餘情にありなどと云はれてゐる。姿とは表現形式である。餘情とは言外の意味といふ事で、所謂心敬の言ひ殘し、俤を示すといふ意味にならう。つまり栞とは表現によつて餘情的に寂を深く表すといふ意味であるかと考へる。趣向、言語、材料の哀憐を云ふのでなく、餘情が深く寂びてゐる事であらう。其證句に許六の「十團子も小粒になりぬ秋の風」といふ句が引用されてゐるが、之は小粒になりぬと云つた表現が、秋風の吹く淋しい宇都〻山の光景を、餘情的に深かめてゐるのである。小粒になりぬが時間を含んだ表現で、そこに佗しい餘情が深く入つてゐるのである。そこを芭蕉が栞ありと賞めたものであらう。

細みに就て、之も去來の說に、「細みはたよりなき句にあらず。」……細みは句の心にあり。」と云つて、路通の「鳥どもも寢入つてゐるか余吾の海」の句を證句に引用してゐるが、句の心といふ書方が漠然として難解ではあるが、私は之を感覺の鋭さといふ意味に解したい。路通の鳥どもの句は此場合適切ではない。此句細みありと芭蕉は云つてゐても、かゝる月並な俗調に細みがあるとは考へられない。風之の俳諧耳底記に、其角の句を論ずる條下に、

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店（芭蕉）と作りて細みを見せられたり。……秋の雲尾上の杉をはなれたり（其角）など言ひしほそみは、正風の丸ぬけにて、云々

とある。之れならば芭蕉の主張もさぞかしとうなづかれる。鹽鯛の句も秋の雲も皆鋭い感覺の句である。鹽鯛が齒を食ひ合せて、魚家の店先に晒されてゐる光景は、實にさむさうで、寒しといふ焦點はよく捉へられてゐる。秋の雪が尾上の杉を離れて、悠々と去來する光景も、秋晴れの明朗さを如實に表してゐて鋭い。兩句とも弱々した賴のよい感じの句ではない。むしろ强く緊張した句である。芭蕉が或所へ客に行つた時、食後蠟燭を早く取つてくれと言つた。それは夜の更けるのが眼に見えて、心忙しくなるからであるといふ逸話があるが、如何にも芭蕉の

云ひさうな事で、彼が神經の細く鋭かつた事を物語つてゐる。野坡が芭蕉や其角の句を細みの證句に引用した所を見ると、ます〳〵路通の句の不適切である事が分るし、鳥共の句は果して芭蕉が賞めたものであるか疑はしくも考へられるのである。

二、風體論

不易・流行　之れは句風の性質から見た論である。此論は元祿二年秋芭蕉が加賀の北枝に傳へたものであるが、芭蕉は同年冬嵯峨の落柿舍に去來を訪れ、去來に說いたので、專ら去來一派の唱へる所となつた。花實集によると、蕉門の千歲不易、一時流行といふ句があつた。之は二つに分けて論ずるがもとは一つである。不易を知らなければ基は立たない。流行を知らなければ風が新しくならない。不易とは古今に通ずる句であるから、千歲不易と云つたので、流行は一時代の變、昨日の風は今日に適せず、今日の風は明日に用ひられないといふわけで、一時流行と云つたのであると說かれてゐる。つまり不易の句は永續性のある句、一人の趣味ではなく、萬人の讃美するもの、流行の句は一個人の趣味の一時に行はれたもの、時代の一時的趣味

をなす句を云つたのである。二者そのものを一にするとは、和歌にまめやかに思ひ入りたる體のある如く、根本に於て感情が僞なく深く表されてゐる事である。白冊子に、萬代不易、一時流行とあるが、その本は風の誠であると云つてゐる。つまりまめやかに思入りたる體、即ち感情が僞りなく深く表されてゐる體が、俳諧の誠を備へた句の體になるわけである。

不易・流行論は去來の主唱によつて、同門間に反響が少なくなかつた。去來は答許子問難辯により、許六は再呈落柿舍書によつて難陳した。許六の說では俳諧は不易・流行の二體に極まつてゐる。不易でなければ流行、流行でなければ不易であるが、近來不易・流行に捉はれて、眞の俳諧血脈の筋を失つてゐる者があると云つて暗に正秀を攻擊してゐるが、許六の論は激越であるだけ、去來の方が筋は通る。

眞・行・草　之は俳風の時代的變化の上から見た論である。支考の著書に多く論ぜられてゐるから、支考の主に唱へた說であらう。土芳の赤冊子に、「芭蕉云、此道のこゝに出でて百變百化す。然れどもその境眞、草、行の三つをはなれず。云々」とある。併し此說は宗養の秘袖抄に見えてゐるから、芭蕉はただ古說を承けて云つたものに過ぎない。支考の三疋猿の序に、「眞

とは眞實にして五色の糸筋を亂さず。行は世の常の世情をつくし、草はその情のほどけるをいふか。云々」とある。即ち眞とは其風の堅く眞面目である事、行とは堅からず、柔かならず、中庸を得た風、草とはほどけた平淡な風である。之を各時代の風調にあてはめて云ふと、初懷紙、冬の日、熱田三歌仙は眞の體、ひさご、猿蓑、深川集は行の體、別座舗、炭俵、小文庫、續猿蓑は草の體であつた。なほ芭蕉は赤冊子に、「その三つの中いまだ一二をもつくさず。云云」と云つて、將來種々なる進展を見るべき餘地ある事を暗示してゐる。

句の新しみ　之は句の價値論である。山中問答に、「あたらしみを心がくべし。好き句の古きより、悪しき句の新しきを俳諧の第一とす。云々」或は赤冊子に、「亡師の常に願に瘦せ給ふも新しみの句なり。云々」とあつて、奥の細道の際先づ加賀の北枝に敎へ、後去來に傳へ、去來一派の信條となつた。風國の菊の香の序に、

はせを庵の先生、一日門人に對せられて曰、今の風體を以て古人の致されし所を見るに、その趣向、作意既に求むるにたやすし。又われ〳〵が今翫びて情志を樂しましむるの境も亦さぞしかなり行くべし。後世何者か出でて、如何なる新しみをやさゝぐり出すべし。我

はただ來者を恐る事ばかりにぞ。云々

とある。菊の香は初蟬の誤を訂正した書であるが、句の新しみを知る事が芭蕉の眞諦である事を示さうとしたものであらう。卷末に去來の贈其角先生書を添へたのもそのためで、其角の古格を墨守して流行に從はない事を難じてゐる。併し去來は徒に句の新しみを望んでばかり居なかつた。去來抄に、「俳諧は新意を事にすといへども、物の本情を違へていふものにはあらず。云々」と云つて、其角の「鶯の身をさかさまに初音哉」の句を難じてゐる。句は本情を失ふと作り事となる。新しく云はうとして、本情を失へば虚僞となり、誠の俳諧とは云へなくなる。芭蕉の「鶯や柳のうしろ藪の前」の句に就て、野坡は「鶯に柳は其比も古く候へども、かくの如く句作り給へる故、あたらしみ第一也。」（雅文せうそこ）と云つてゐるが、許六は宇陀ノ法師に、「新しくといふは趣向にあり。あたらしみといふは句作りにあり。毎度新しき趣向は稀なる故、句作りにて新しみを付けていふ事也。云々」と云つて、表現の技巧によつて句風が新しくなると論じてゐる。趣向は古くなり易いと云ふが、それは題詠的に事柄の範圍を限定すると、連想が一定して古くなるが、題に捉はれないで廣く天地を探ぐれば新趣向も浮ぶものであらうが、長い年月の間には結局表現の技巧問題となるかも知れない。

三、作法論

一、發句の作法

俳諧の發句とただの發句　蕉門以前は專ら連句が流行して、發句は比較的少なかつた。芭蕉以降連句と發句は平行し、後世に行くに從ひ四分六の形勢となつた。それも蕉門以前は百韻が普通の興行で、歌仙は少なかつたが、之も蕉門以後になると專ら歌仙形式の流行となり、百韻は特別の場合の興行となつて了つた。連歌では發句は堪能、宿老に讓り、末座に酌酌あるべきものとし、或はたけ高く（風調の堂々として氣品ある事）大やうに作れとか云はれて居つた。貞門でも此制は守られて居つて、みだりに句作する事を禁ぜられた。芭蕉の教に發句は大將の位なくしては卷頭に立たないとか、平句に伸びた句は見劣りされるなどと云はれたが、是等は皆連歌の發句——百韻形式のもの——の遺制であつた。百韻の卷頭吟であるとすれば、丈高く大やうに云はなければ、一卷の品位に關る事でもあり、初心、下級の者の遠慮しなければなら

ない道理で、當然な戒であらうが、百韻が歌仙に代れば、歌仙は略式であるから、連歌以來の遺訓をやかましく遵奉する必要もなくなるわけである。蕉門の發句を讀んでも、丈高き風姿の句ばかりはありはしない。獨立して作られたものには種々の風姿があつて一定しない。而もそれが直に連句の發句として通用する例はいくらもある。

上達の道　俳句上達の道は多作にある。昔の句風に飽きて、句境を展きつゝ進んで行く者が上手の地位に達するのである。許六の篇突に、

芭蕉云、上手になる道筋慥にあり。師によらず、弟子によらず、流れによらず、器によらず畢竟句數多く仕出したる者の、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれり。

とある。併し上手の作者になる事が、師に忠實なものかどうかは分らない。古い句に飽きて、將來の新風を目指して進んで行くのはよいが、昨日の我に飽ける人が、あらぬ道に變化して行く事は、其角の洒落風でも分るやうによい事ではない。

取合法　取合せとは材料の配合である。芭蕉之を許六に教へ、許六之を以て芭蕉血脈の教なりと信じ他を罵つてゐる。花實集に、

先師曰、發句は頭よりすら〳〵と云ひ下したるを上品とす。ほ句は物を合すれば出來せり。そのよく取合するを上手と云ひ、あしきを下手といふ。其角曰、物を取合せて作する時は、句多く吟速なり。初學の人是に思ふべし。功成るに及んでは、取合ふ合はざるの論にあらず。

とある。初學指導の方法としては、取合法によると句は慥に上達しよう。併し取合せによつて出來た句は品が落ちる。態度が既に卑しいのである。頭から黃金を打延べたやうに作る方が氣品がある。其角の云ふやうに、上達したならば取合ふとか合はぬとかいふ小手先の問題でなくなる。野坡は自然の作とか、神定まるなどと云つて、許六の取合俳句に反對してゐるが、此方が根本問題で、そこ迄は容易に至らないものである。

餘韻・餘情　芭蕉は印象の明瞭よりも餘韻・餘情を尊んだ。此教は連歌にある事で、芭蕉は之を守つてゐたのだ。去來抄によると、芭蕉は荷兮の「蘿の葉は殘らず風の動きかな」の句を批評して、發句はかくの如くくまぐ〳〵迄云ひつくすものではないと云つた。又「下臥(シクヴシ)につかみわけばや糸櫻」の句に就ても、去來は糸櫻の十分に咲ける形容をよく云ひ遂せてゐるといふと

芭蕉は云ひ遂せて何かあると云つた。是等の說によつて考へると、云ひ遂せる卽ち物の狀態をすみ〳〵迄精叙する事は芭蕉の嫌つた表現で、物はただ中心の事情が描かれてゐれば、他は連想に待つて味へばよいといふ事になる。一體印象が明瞭になれば餘韻・餘情には乏しくなる。句の趣を言外に殘せば情味は深かくなり品が附かう。物の情景をすみ〳〵迄はつきり表すと、情趣を內面的に味ふ餘地がなくなつて、淺薄にならう。かうした理由で芭蕉は云ひ遂せて何かあるなどと云つたのであるが、附句の場合ならばよいけれど、獨立した俳句になると、表現が大まかになり、ぼんやりした印象しか表れない事になつて古い感じがする。そこは却て技巧して印象を明瞭に描いた方が面白くはないかと思はれるが、芭蕉時代にはまだ連歌の遺訓が力を持つてゐたから、さうは行かなかつたのだらう。蘿の葉の句は見方が理知的であると云はれるが、さう惡い句ではない。未完成の句ではあるが新しみはある。蘿の葉の殘らず動く工合を見て、風の動きの劇しさを知つたので、風の動きが第一印象であらう。之を「蘿の葉や殘らず動く秋の風」と直すと、形は整つてゐるが平凡になる。餘情の內容がぼんやりしてゐるから古い感じがする。糸櫻の句もつかみ分けばやがよいので、殊に下臥にだから印象ははつきりして、

糸櫻を賞美する氣持はよく出てゐる。併しかう考へては芭蕉の意に叶はないのであるが、俳句が安永・明治となつて客觀的印象的表現に進んで來たのも時代の變化・進步であらう。

離題　芭蕉は題詠の弊を戒めて、發句は題の中から出すと大方古くなると云つて、題の想像化を說いてゐる。篇突によると、發句は題の噂（想像化）と考へたがよい。例へば花の句を作る時、花とばかり云つては面白くない。風に花が散る、それも一度はよいが、二度になると面白くなくなる。そこで入相の鐘に花が散ると云ひ換へたり、或は風の吹かないのに散るなどと想像をつくすと面白くなる。よき噂を尋ね出した者が上手であり、下手は噂が面白くないと云つてゐる。許六はなほ之を敷衍して、句は題の內から案じてもないものである。他から求めて來ると無盡藏にある。例へば題を箱の中に入れて、その箱の蓋に上り、廣く乾坤を尋ねると得られると云ひ、去來は又發句は曲輪（題の範圍）の內に無い事もない。卽興・偶感などの句はその內にあるが、普通は內に少ない。多くは古人の糟粕である。千里にかけて吟ずる時は、句も多く、第一意味の似た句が無くてよいといふ。許六の蓋の喩は面白い。題を離れ、その固定した趣味を離れて句作すると、自由に新しく句が作れる。

二、附句の作法

附方の態度　芭蕉は句作の第一として氣鋒を以て作る事を教へた。之は一般的な教示であつた。去來抄に、

先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席に臨んでは氣鋒を以て吐くべし。心頭に落すべからず。云々

去來曰、俳諧は氣鋒にて無分別に作すべしとのたまひ、云々

とある。又土芳の赤冊子に、「師の詞にも、俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ。云々」ともある。氣鋒を以て作れとは、一氣呵成に、放膽的に作る事である。心頭に落すなとは、思案に凝るなといふ事である。子供は無邪氣であり、率直であるから、却て物の本情を捉へて、私意・私情を挾まない。功者になると巧に云はうとするから、とかく本情を失つて、物を作りたがる傾向になる。句は氣に乘せて作らなければいけない。氣鋒を殺すと、句が氣に乘らない。從つて拵へたやうな事をいふ。それが悪いのである。芭蕉は速吟を尊んだ。去

來は蕉門第一の遲吟であつた。或時正秀亭に句會があつた。發句は去來だがなかなかうまく出來ない。芭蕉云、一夜の程いくばくかある。汝が發句の時を移したならば、今夜の會は空しくならう。と云つて自分で發句を作り、正秀が脇、去來は第三を附けたが、うまく行かないで修正され、面目を失つたといふ逸話がある。赤冊子に、芭蕉の言に、「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中に云ひとむべし」とあつた。之は感受した物の印象を消えない中に表せといふ義である。實感の光が消えると、私意にかけて作る事になる。實感の把握が大切であるが、しつかり握つたならば、その熱の覺めない中に云はなければいけない。ぐずくしてゐると實感性がうすらいで來るから、強ひて言語表現に訴へて、うまく云はうとするから、自然の活きた力がなくなる。芭蕉の言は後進によき教訓である。なほ赤冊子に、

師の曰、學ぶ事は常にあり。席に臨みて、文臺と我の間に髪をいれず。思ふ事速に云ひ出でて、髪に至つて迷ふ念なし。文臺引きおろせば卽反古なりと、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒す如し。鍬本に打込む心得、西瓜切る如し。梨子食ふ口つき、三十六句皆やり句などと、いろくにせめられ侍るも、皆功者の私意を思ひ破らせんとの詞也。

云々

大木を倒す、鍔もとに打込む、西瓜切る、梨を食ふに、皆小枝小巧を捨てゝ、思ひ切つて大膽に作れとの戒である。許六が「船にわづらふ西國の馬」といふ附句に點を乞うた時、芭蕉云、今はかゝる手帳（拵事）らしき句は嫌つてゐる。船の中で馬が煩ふといふ事はあるが、西國の馬とまでは拵へたものであると云つた話がある（去來抄）。之も物の本情を後にして、私意を挾んで云はうとした戒である。

附句の種類　花實集に、

先師曰、發句は昔より樣々變り侍れど、附句は三變也。昔は附け物を專とす。中頃は心附を專とす。今はうつり・響・匂ひ・位をもて附くる事をよしとす。

とある。附物とは詞附で、前句の言葉の緣に與へて附ける事、貞門時代に流行する。心附とは意味と意味との連續、談林時代に行はれた。今の芭蕉は移・響・匂ひで、芭蕉獨自の考案であつた。花實集、うつりの例、

赤人の名につがれけり初霞

鳥も囀る合點なるべし

うつりとはうつりが善い惡いのうつりであらう。古代蒔繪の重箱に西洋菓子を入れてはうつりが惡い。干菓子とか羊羹とかを入れなくては落付かないと云つたやうな意味である。附意は赤人のやうな偉い歌人の名跡をつぐ者が出來た。それは丁度初霞が四方に棚曳く長閑な頃であつた。鳥も目出度い日を知つて、賑やかに囀つてゐるのだらうといふわけである。前句が名につがれけりと俗談的にほどけて云つてゐるから、脇もその氣持に合せて、合點なるべしと俗に附けたのである。若し前句が名は面白やと輕く云つたならば、附句も氣色なりけりと輕く合はさなければいけないと其角は註してゐる。

響は打てば響くの響きで、氣持の間が拔けない呼應を云ふのである。

樽椽に銀土器を打碎き
身細き太刀の反る事を見よ

附意は楠公父子の別のやうな場面、父は銀土器を椽に擲ち、子供に形見として細身の太刀を與へる光景である。武士が討死を覺悟する時は、飲んだ別の盃を擲つて、生還を期さない事があ

る。盃を打碎きは悲壯なる氣持である。それに對して太刀の反りを示す事も緊張した氣持で、その呼吸がピタリと合つてる。そこを響くと云つたのである。芭蕉が右の手にて土器を打付け左の手に太刀の反りを打掛ける眞似をして門人に語つたとある。

匂ひは風韻か。何となく二句の情趣の呼應する狀であらう。赤冊子に、

折々や雨戸にさはる荻の聲
放す所におらぬ松蟲

を上げ、發句の位を思ひしめて、匂ひよろしく、事もなく附けた句であるとしてゐる。支考の說によると、匂ひは百句ながら二句の間に籠つてゐるとあるから百句（歌仙ならば三十六句）が百句に渡つてゐるものと見える。古來例句を上げてゐないのはそのためであらうか。

移・響・匂ひは心附の一歩進んだ附方である。心附は前句の事柄に親しい連想を持つた事を附けるもので、二句の間の思想上のへだたりは接近してゐる。接近してゐるから變化に乏しい。芭蕉は思想を自由に展開させんがために、二句の連想を近付けないで、その間に一脈通ずる氣持のある附方を執つたのである。附句はあまり離れても意味が分らなくなるし、近付くと情趣

が狹められて面白くない。不卽不離といふ關係の下に附けて行く事が、相互に都合がよいからわざと前句を附け放して附けたのである。附句は前句の情を引く事を嫌つたのもその譯である。

位は前句の位を知つて附ける事である。花實集に、

上置きの干菜刻むもうはの空
馬に出ぬ日は內で戀する

附意は俎板に載せた干菜を刻むのも上の空である。その女は馬子に出ない日は家の內でくよくよしてゐるといふ事で、問屋などの下女と見て附けたのである。このやうに前句の人の身分や風俗を見定めて、それに合ふやうな事を附けるのが位附である。前句が古風な人なら古めかしい風俗を附けるとか、或は今樣の浮氣女なら浮氣つぽい樣子を附けるとかするのである。

其他芭蕉には俤附といふ敎もあつた。俤とは古事の想像化である。之も花實集に、

草庵にしばらくゐては打破り
命うれしき撰集の沙汰

といふ例句を上げ、前句を西行か能因などの境界と見立てゝゐる。附意は草庵にしばらく住ん

で居つたかと思ふと間もなく捨てゝ了ふその人は西行のやうな風流人で、近頃都に和歌の集が編まれるといふ噂を聞くが、自分も長生したばかりにかゝる嬉しい事を聞くのである。せめて一首なりとも選に入れて貰ひたいと思つて、詠草を檢べるといふ意味であるが、之を直に西行と附けては拙い。西行の俤で附けると、懷が廣くなつて、後を附けるのに變化を殘す事になつて面白いのである。

去來の說によると、この移・響・匂ひは附やうの鹽梅で、俤は附やうの事であるといふ。附樣の鹽梅とは附樣の程度を云つたもので、どの程度に二句の事柄が離れてゐるか、その離れ工合を示す附方であつた。附やうとは附方の事で、附方は前句の風に依ていくらでもあるから、基本的なものではない。うつり・ひゞき・匂ひはすべての附方の基本的なもので、附方のすべてに通ずるのである。位附も恐らく附方の一種であらう。

三、法式論

法式の取扱方　花實集に、

先師曰、おほむね御傘・花火等を用ふべきとなり。……先師も差合ぐり（助辭・副詞・動詞・助動詞等の同字或は特定の文字は何分置いて出すといふ制がある。その制をやかましく詮議立てする事）の上手と云はれんよりは、俳諧に上手のかたあらまほしと宣ひき。云々

とあつて、芭蕉は大體古式に從つたけれど拘泥しなかつた。御傘は貞德の式書、花火草は立圃の式書であるが、芭蕉はそれのみに據らず、連歌の式も用ひて居つた。稀には古法を破る事もあつたが、それは煩瑣な制を省き、詠む事柄を自由にさせ、秀句あらしめんためで、濫には破らなかつた。

一卷の上の制　一卷の思想進行の順序に、序・破・急といふ教があつた。良基の筑波問答によると、一の懷紙の面はしとやかにする、浮き〳〵した言葉を用ひない。二の懷紙から賑やかな事を云ひ、三・四の懷紙は殊に面白く云ふ事になつて、一枚目の懷紙は序、二枚目の懷紙は破、三・四枚目の懷紙は急にする制があつた、貞門でも之を踏襲し、初折（一枚目の懷紙）は作意の見えぬやうにする。二ノ折（二枚目の懷紙）よりそろ〳〵作意ある句を出し、三ノ折（三枚目の懷紙）には隨分作意をふるひ、人目を覺ます事を云ひ、名殘ノ折（四枚目の懷紙）は輕

輕と仕立てる事になつた。以上は百韻の式であるが、歌仙になると三十六句だから、表が序の格、裏から名殘ノ表迄が破、名殘ノ裏が急となるやうで、芭蕉も大體此順序に從つて句作を勸めてゐた。

去嫌　去は何の詞は何句隔てゝ出すといふ制、嫌は表に嫌ふ名詞の制である。是等は連歌よりの敎であつて、句去は貞門に於て連歌の新式より緩かになり、例へば連歌で七句去る物體五句去、五句去るべき物は三句去にした。又一座に一句物といふ制もあつて、例へば龍・虎・鬼・女などの詞は一座に一句しか出せないとか、或は名所・國名・神祇・釋敎・戀・無常・述懷・懷舊などの詞は表に遠慮する事になつて居て、貞門では遵奉して居つたが、蕉門では寬大になつた。但し神祇・釋敎・戀・無常などの句は表に遠慮されて居つたが、人名・病體などの句は構はなかつたやうである。

發句の式　たけ高く作る規則であるが、歌仙では必ずしもそれに據らない。ただ發句には發句の風姿があつて、平句のやうに伸びてはいけない事は芭蕉も敎へてゐる。大將の位などといふのもその譯であるが、之も歌仙ならばそれ程堂々と云はなくともよかつたやうだ。發句には

切字が必須條件であつた。之も連歌に發句は必ず云ひ切るべしといふ敎が古くからあつて、後に切るべき詞の制となり、や・かな・けり・ぞなど十八の切字が白髮集に見え、紹巴頃には二十二となり、貞門ではなほ數を增して四十八と下知(命令形)九つの詞を上げるやうになつた。

切字に對する芭蕉の意見は古式と違つてゐた。古來抄に、

先師曰、切字を入れる句は句を切るためなり。切られたる句は字を以て切るに及ばず。いまだ句の切れる切れざるを知らざる作者のため、先達切字の數を定められたり。此字を入れる時は、十に七八は句切れるなり。殘り二三は入れて切れざる句あり。又入れずして切れる句あり。……

先師曰、切れ字に用ひる時は四十八字皆切字也。　用ひざる時は一字も切字なしとなり。

云々

とある。芭蕉の說に依ると、切字は初學に句切れを敎へる方便で、切字を入れても句の切れない時もあるし、切字を入れなくとも句の切れる時もある。句を切らうと思へば、四十八字皆切字となるし、切るまいとすれば、一字も切字にならないといふのである。つまり句の意味が切

れれば特定の文字を必要としない。切字の有無に拘泥しないがよいといふのである。

發句に季題を入れる事も必須條件であつた。事も古くから連歌に發句は必ず當季を結ぶ事の教があり、其後良基の新式などには、動植物や自然現象の語の整理が行はれ、兼良頃には四季に渉つて幾つかの語の分類が見え、宗祇頃には春季の物にも、正月の物、二月の物、三月の物と云つたやうに、月によつての分類が出來た。俳諧も此例に倣ひ、作法書には四季之詞寄が大部分を占めて居つた。かゝる現象は歌人の生活が自然の風物を好侶伴とし、自然を詠歌の主たる對象とした結果で、俳人もその習慣を承け、季題尊重の範圍を廣げたのである。自然を好愛して居つた芭蕉がその例に倣つた事は云ふ迄もないが、芭蕉には別に無季の發句の試作もあつた。去來の旅寢論に、

去來云、先師もたまゝ無季の句有之。然れどもいまだ押出して是を作り給はず。或時宣小は、神祇・釋教・賀・哀傷・無常・述懐・離別・戀・旅・名所等の句は、無季の格ありたきものなり。是を興行せんと思ひ侍れども、暫く思ふ所ありと云。無季の句と云へるは落馬の卽興に、

歩行ならば杖つき坂を落馬かな　翁

何となく芝吹く風もあはれなり　杉風

とある。發句が季の詞を必要とした理由に就ての説明のないのは、發句に季之詞を入れる事は連歌以來の教で、何人も疑念を挾まぬほど絶對視されてゐたのであるから、今更强ひて無季の句の格を立てゝ一般に興行する事は、傳統を無視し、先哲の教を破壞する譯になるから、芭蕉は敢て行はなかつたものであらう。神祇・釋教以下の句は直接に四季の風物を詠んだものでもなく、季を入れなくとも、情味を深くすべき性質のものであつたから、それだけは無季の格がありたいと云つたものだらうと考へる。去來は無季の句を二種に分け、一つは前後・表裏季と見るべき詞も感情もない場合、例へば芭蕉の歩行ならばの句、杉風の柴吹く風の句のやうなもの、他は句の詞の上には季はないけれど、感情の上に季と見るべきものがある場合、例へば芭蕉の「年々や猿にきせたる猿の面」の如き句で、それは歳旦の季を表したものと云つてゐる。

芭蕉は新しい季題を定めてゐる。去來抄に、

先師曰、季節の一つも探し出したらんには、後世によき賜物となり。云々

とあつて、竹植うる日、鹽牡蠣の夜の季題を定め、夏季としてゐる。古來の季ならずとも、季に然るべきものがあつたならば、採出して季題とするなど、芭蕉は季題觀にも卓見を持つてゐた。後世季寄の書に、芭蕉翁口授と題して季に關する說明や自然鑑賞の本然性を說いたものが出てゐるが、之は白髮集や三湖抄などを本にして、後人の作爲したものであらう。篇突に二十五條ほどの季題論があり、雲鈴に與へた許六の傳書雅樂抄にも百八十餘項の季語の說明のある所を見ると、許六は季題に就て芭蕉から敎へられた事があつたかも知れない。

脇の式　北枝の山本問答に、

脇の句は發句と一體のものなり。別に趣向奇語を求むべからず。唯發句の餘情を云ひあらはして發句の光をかゞぐるなり。脇に五つの附方あれども、これ皆附やうの差別にして、外に趣向を求むるにあらず。云々

とある。古來脇は亭主の格、發句は客の格と云はれ、紹巴の至寶抄にも、「發句は客人の如し。脇の句は亭主の如し。」とあつて、脇は客への挨拶、必ず主人の附ける事になつてゐた。併し蕉門では發句を主人が作り、脇を客が附ける例もあるが、先づ普通は此制に從つて居つた。貞門では連歌の式を守り、發句を客から出されると、主人はその句意を明に說き表すやうに挨拶して脇を作つたものであつた。發句の意味がよく分らないのに、分つたやうな顏をして脇を附ける事は、客に對して無禮であるとされて居つた。芭蕉が發句の光を揭げると云つたのはその義である。發句をすぐれた句のやうに仕立てるのが脇の働である。五脇と云つても別に趣向があるわけではなく、發句の風情に應じて脇を附けるのだから、脇は五つの附方に限られたものではない。とまりは名詞止めが昔からの敎で、手爾波で流して止めない事になつてゐた。

第三の式　第三と云つて、三句目とは云はない。宗祇や紹巴の敎によると、句柄をたけ高く大やうに作り、とまりは大體て留り、それでなければはね字（らんのやうな類）にする。もないと結ぶ事もある。併し發句が疑の切字の時は、第三をはね字にしない。又哉留りの發句の第三はにてどめにしない。之は治定の哉となるからである。花の盛哉、月の光哉は盛にて、光にての意味が通ふからである。第三は轉句と云つて意味を變へる場所となつてゐるが、それは脇句による。違附（前句と反對な事をいふ附方）、取成附（前句の意味を他の事に喩へて附ける附方）の時は轉じなくともよいなどとある。貞門・蕉門大體是等の說に從つてゐる。

四句目　昔から四句目ぶりと云つて、安く輕くといふ事が教であつた。白冊子に、「師の曰、重きは四句目の體にあらず。脇にひとし。句中に作をせずとなり。古事・本説など嫌ふ事也。云々」とある。應其の無言抄に、「第四句目よりはいかにも輕々とすべし。云々」とあるから芭蕉の説も此教に基いたものであらう。末の留りもない、けりなどにする規則である。

月の句　連歌以來尊ばれたもので、功者に讓るとか、或は一座の貴人・珍客に作らせたものであつた。表の月は俳諧では發句・脇・第三の間に出す事になつてゐるが、第三以後の月は上の句を常翫とし、短句に出す事は無禮とされてゐた。定座と云つて貞門以來月花を出す場所が一定され、百韻では表七句目、裏九句目、二ノ表十三句目、二ノ裏九句目、三ノ表十三句目、三ノ裏九句目、名殘ノ表十三句目、歌仙では表五句目、裏七句目、名殘ノ表十一句目、と定められた。併し蕉門では定座なく、その前後に移動したが、折端（百韻、十四句目、歌仙、十二句目）からはこぼさない例になつてゐた。又表に月の無い卷を素秋と云つて嫌つて居つた。

花の句　連歌の花は櫻といふ意味の花であつた。貞門之に倣つて櫻とし、正花・非正花の別を立てゝゐた。例へば夏の正花は餘花・若葉の花、秋の正花は花火・花の踊、冬の正花は歸花、

餅花、雜の正花は花紅葉、非正花は花の帽子・花野・雪の花・浪の花等の類であつた。併し芭蕉はすべて春の花を花と認め、櫻といふ意味の花ばかりでは、花が多く出て、賞翫が輕くなると云つた。許六の宇陀ノ法師に、

篇突云、花は賞翫の惣名と註ス。されば花に櫻付くる事習あり。何ぞ花の句櫻ならば、花に櫻付くる事あらん。茶の出花・藍の出花正花たるべしと先師申されき。云々

とある。連歌では櫻に花は決して附けないが、花に櫻を附ける時は、花を櫻と考へないで、別の意味のものに取扱つてゐる。芭蕉の意見では、それは華やかといふ意味を主としたものであるから、賞翫の惣名と云つたのである。さうすれば茶の出花、藍の出花といふやうな句にも流用が出來て、すべて花は鑑賞の內容を廣くする事になる。併し實例を見るとやはり櫻といふ意味の花が多いやうである。去來抄に、去來が花を櫻に置き換へた句を作つて、芭蕉に示した時

先師曰、故いかに。去來曰、凡花は櫻にあらずといへる、一通りはする事にして　花聟・茶の出花なども花やかなるによる。はなやかなりといふもよる所あり。必竟花は櫻をのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ、古は四本の內（百韻の中四ヶ所出す。）一本は

櫻也。汝がいふ所も故なきにあらず。とかく作すべし。されど尋常の櫻にてはかはりたる詮なからんとなり。予糸櫻腹一ぱいに咲きにけりと吟じければ、句我まゝなりと笑ひ給ひけり。

とある。併し單に花といふ文字を用ひた句の感じと、櫻といふ文字を用ひた句の感じとは鑑賞の氣分が違ふ。糸櫻が腹一杯に咲いたと云つても、華やかな感じは直覺されない。知識的には華やかな意味はあるが、感じは出ない。若し花を賞翫の惣名とするならば、何處迄も花といふ文字を遣つて云はなければなるまい。去來の句は失敗と思ふ。

蕉門では月花に定座はなかつた。併し花は定座（百韻、裏十三句目・二ノ裏十三句目・三ノ裏十三句目・名殘ノ裏七句目、歌仙、裏十一句目・名殘ノ裏五句目）をこぼした例は殆んど見ない。去來抄に、

卯七曰、花に定座ありや。去來曰、定座なし。花の句は互に大切と讓り合ひ待る故、裏十一句（歌仙）、十三句（百韻）にて出す。十句・八句は短句也。十三句目おのづから花の句となり待るなり。當流には此說を用ふ。

とある。花は連歌では景物の最上となつてゐるから、一座の宗匠か責人でなければ作らせなかつたもので、俳諧になつても此制は守られて濫には考へなかつた。故に連衆は花を大切と心得互に遠慮し、讓合つて、遂に裏の十一句目か十三句目に來て了つたのである。而も長句で出さなければ無禮になるのだから、十二句目・十四句目へは出せず、十一句目・十三句目となつたのである。去來は當流では此說を用ひると云つてゐるが、之は貞門の說で、貞門の式の承繼である。

貞門に呼出しの花といふ事がある。之は花の句を定座より前に引上げて作る事である。去來抄によると、花を引上げるには二品ある。一は一座に賞翫すべき人があつて、その人に花の句を望む時、その人の句の前に至り、前句より春季を出して望むのである。之を呼出しの花といふ。他は一座に貴人や功者が居ないで、他に讓るべき人もないから、都合のよい時に呼出しを待たないで花を作るのである。又兩吟の時は互に一本づゝ出せるのであるから、謙退に及ばずどちらへも引上げて作るのであると。是等も古式の敎であらう。

貞門の式に、初折の花に散る花などは作らないとか、或は裏十句目（百韻）に高い植物は出

さないなどの制があるが、蕉門ではそれに拘泥しなかつた。

戀の句　白冊子に、

先師曰、昔より二句結ばざれば不レ用也。昔の句は戀の詞をかねて集め置き、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざるなり。……そのかみ宗砌・宗祇の比迄、一句にて止む事例なきにもあらず。此後所々門人とも談じて、一句にても置くべき事もあらんかとなり。又或時曰、前句戀とも戀ならずとも片付けがたき句ある時は、必ず戀の句を附けて前句ともに戀にすべしとなり。云々

とある。又去來抄にも、

卯七・野明曰、蕉門に戀を一句にて捨つるはいかゞ。去來曰、予此事を伺ふ。先師曰、古は戀の句數定まらず。勅以後二句以上五句となる。これ禮式の法なり。一句にて捨てざるは、大切の戀句に挨拶なからんはいかゞとなり。一說に戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨つべからずとも云へり。皆大切に思ふ故なり。予が一句にて捨てよと云ふもいよ〳〵大切に思ふ故なり。汝は知るまじ。昔は戀句出れば、相手の作者は戀をしかけられたりと

挨拶せり。又五十韻・百韻といへども、戀句なければ一卷とは云はず、はした物とす。かくばかり大切なる故、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出づれば幸とし、却て卷中戀句稀なり。又多くは戀句より句しぶり、吟重く一卷不出來になれり。此故に戀句出て附けよからん時は、二句が五句もすべし。附けがたからん時は、しばらく附けずとも、一句にても捨てよと云へり。云々

とある。連歌では戀の句は春秋の句と同じく尊重されたもので、二句以上五句までつゞく事に定められた。但し兼良の新式追加に、「戀の句只一句にて止む事無念。云々」とあるから、當時一句で捨てた例もあつたと見える。古風の俳諧でも其制に倣ひ、一句で捨てない事になつた。ただ去嫌が連歌より緩和され、連歌の五句去が二句去になり、戀の字は折を嫌つて四つ出す制になつた。連歌では初折の裏の三句目（表八句だけれど、引返しの二句を表並に取扱つて表に嫌ふ物は遠慮した）に戀を出す事を待兼戀と云つて嫌つてゐるが、（或は戀は待ち兼ねるのが情であるから差支へないといふ說もある）、蕉門では裏の一句目から戀を出す例があつて一向嫌つてゐない。之も歌仙興行が一般的のものとなつたからであらうが、貞門では百韻興行だ

つたから、連歌の制のやうに遠慮して居つた。戀を一句で捨てる事は芭蕉の新說ではないが、詞の戀を捨てゝ、心の戀に定めた事は芭蕉の卓見であつた。貞門の作法書を見ると、戀之詞・非戀之詞といふ項目を設けて、戀之詞百五十有餘を集めてゐるが、中には戀愛的な意味を持たない語も入つて居つて、それを用ひたとて戀の句にならない例もある。戀・非戀といふ意味は語の上にあるのではなく、作者の感情に存する事は見易き事實であるが、貞門では連歌の遺習に捉はれて、詞の制を主眼としたため、かゝる矛盾を生じたのである。戀を一句で捨てると云つても、どちらか一方の句に戀の意味を十分持たせてあれば、次の句は戀の情がうすくとも戀の句になるから、一句で捨てたとも云はれなくならう。

揚句　一卷の最後の句を云。白冊子に、

揚句は附かざるがよしと云說あり。今一句になりて、一座興覺むる故也。又かねて案じ置くとも云へり。ほ句主并に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば、揚句を筆にすべし（執筆が作る事）。ほ句にある文字をつゝしむとなり。匂ひの花（名殘、裏五句目の花）にて、春季五句に至るとも、揚句に季を放すべからず。たとへ季六句に及びてもすべしとなり。云々

とある。之は古式の傳承である。土芳が芭蕉から敎へられた說であらう。